

報告書
Project Report

「インドネシア・アチェの民族、暮らし、衣生活文化」
People, Life and Clothing Culture of Aceh, Indonesia

2012年6月
June, 2012

松本由香 (MATSUMOTO, Yuka)
佐野敏行 (SANO, Toshiyuki)
Herawati binti Muhammad Zain

(服飾文化共同研究 最終報告書 平成 23 年度終了)

目 次

図、表、写真リスト	iv
執筆分担	iv
I はじめに	1
II アチェの服飾工芸と民族のアイデンティティ	5
III アチェの女性のくらしと衣服・布づくり	22
IV ファッション・イスラーム・伝統文化	33
V アチェの衣生活文化へのアプローチと男性用帽子コピア・ムクトゥブの持続的生産	44
VI 変容するアチェ社会における伝統性と衣生活の理解に向けた試論 — 飲食物にたいする若者の認識特性からのアプローチ —	65
VII アチェにおける華人の存在とアチェ人の衣生活文化との関係	81
VIII 制約性と表現性 — アチェ人の衣生活における宗教とファッション —	98
文献総覧	107
地図	117
表	119
写真	121

地図、表、写真リスト

地図 1	インドネシアおよびアチェ州	117
地図 2	調査訪問したアチェ州の町村と各民族分布及び生産物分布	117
地図 3	ガロット村	118
表 1	アチェ州における服飾工芸産地調査結果	119
表 2	バンダ・アチェにおける服飾関連業調査結果表	120
写真		121

1. バンダ・アチェの街 (2009.8)、2. コピア・ムクトゥブのモスク (バンダ・アチェ 2011.5)、
3. 婚礼披露宴でのアチェ人新郎新婦 (バンダ・アチェ 2009.8)、4. バンダ・アチェのファッション・デザイナー (2009.12)、
5. 新年ハリ・ラヤの州知事 (左 2 番目) と家族 (バンダ・アチェ 2011.9)、
6. アチェ文化祭 PKA を見学するユドヨノ大統領夫妻 (中央・右) とアチェ州知事 (左) (バンダ・アチェ 2009.8)、
7. 新郎と婿入りの儀式 (シブレ 2010.5)、8. 華人街フェスティバルでの客家のアピール (バンダ・アチェ 2011.5)、
9. 仏教系日曜学校で瞑想する華人の子どもたち (バンダ・アチェ 2011.5)、10. ソンケットを織る女性 (シーム村 2010.5)、
11. ボルディールのバッグ (クタマラカ 2010.5)、12. パサールの仕立職人 (シグリ 2011.12)、
13. 田植えを終える農夫たち (ガロット村 2011.12)、14. ガロット村の伝統家屋 (2011.5)、
15. 建設中のモスク (ガロット村 2011.5)、16. 家の床下でカサブする女性 (ガロット村 2011.5)、
17. コピアを作る女性たち (ガロット村 2011.5)、18. コピア・ムクトゥブ (アチェ州立博物館 2010.12)
19. コピア・シャム (ジャカルタ国立博物館 2011.12)、20. Cut Aja Ainsyah (ガロット村 2011.12)、
21. コピア・リマルを編む女性 (アダヤアダン村 2009.12)、22. ティカールを編む女性 (トレンガデン 2010.12)、
23. 湖のある街 (タケンゴン 2009.12)、24. ガヨ人の伝統的ファッション (タケンゴン 2009.12)、
25. ランサの街 (2011.5)、26. 華人の古寺 (スルワイ 2011.5)、27. 丘陵に広がる華人墳墓 (カランバル 2011.5)、
28. アラス人の婚礼用刺繍傘 (クタチャネ 2011.8)、29. ティカール編みをする女性たち (クタチャネ 2011.8)、
30. パティックのろう置きをする女性 (タバクトゥアン 2011.8)、31. トウク・ウマルの記念碑 (ムラボ 2011.8)、
32. 19 世紀末のトウク・ウマルの写真 (バンダ・アチェ市立図書館 2010.12)

執筆分担

- I (松本・佐野・Zain)
- II (松本)
- III (松本)
- IV (松本・佐野)
- V (佐野)
- VI (佐野)
- VII (佐野)
- VIII (佐野)

I はじめに

アチェは、2004年12月に州全体で約20万人が犠牲となったスマトラ島沖地震の被災地として知られる。その歴史・文化について一般にほとんど知られていないが、アチェは、インドネシアの中でも最も古くイスラーム教国が栄えた地といわれ、「スランビ・メッカ (Serambi Mecca メッカのベランダ)」と呼ばれるほど、敬虔なイスラーム教徒の住む地である。イスラーム法 (シャリア・イスラーム、Syariat Islam) が、2002年には、インドネシア中でアチェ州だけに適用されるなど、アチェの人々の重要な生活規範となっている。特にアチェ人の文化は、トルコ、インド、中国の文化的影響を受けて醸成され、17世紀にアチェは、マレー半島にまで及ぶ王国として栄えた。しかし19世紀末には、オランダ軍とのアチェ戦争で荒廃し、1970年代～1990年代半ばには、当時のスハルト大統領政権によるアチェの独立運動 GAM 制圧、住民の弾圧・虐殺という陰惨な歴史を経てきた。スハルト時代に外国人の立ち入りが制限され閉鎖状態にあったアチェは、2004年の被災後、海外支援を受けて国際的に注目されるようになり、2005年8月のヘルシンキ和平協定締結後、コンフリクト問題は急速に解決し、州都バンダ・アチェ (Banda Aceh) は国際都市の容貌を呈するようになった。

このようなアチェの服飾文化をテーマに報告書をまとめる契機は、文化学園大学・文化ファッション研究機構による研究助成を受けて「衣服・布づくりと人間の自立についての研究—インドネシア・アチェ州の事例調査より」をテーマに、2009年度から2011年度まで調査研究 (研究代表者：松本由香、共同研究者：Herawati binti Muhammad Zain、佐野敏行 (2010・2011年度)、Syafwina (2009年度)) を行ったことにある。本報告書では、衣服・布づくりが、人間にとってどのような意味をもつのか、どのような力をもつのかについて、アチェ州での衣服・布づくりを事例にとりあげて考察した成果を述べる。なお、本研究では、さまざまな手工芸の中で、特に服飾にかかわる染織、刺繍などの手工芸を、服飾工芸と表記して研究対象とし、金属加工 (小刀、食器製造) や木工 (彫刻) などの手工芸と区別する。

アチェ州 (Propinsi Aceh) (地図1) の総人口は約520万人 (2009年) で、大きく分けて、アチェ人、アヌク・ジャマー (Anuek Jamee) 人、タミアン (Tamiang) 人、ガヨ (Gayo) 人 (写真24)、アラス (Alas) 人という5つの民族が居住する。アチェ人は、州の総人口の90%近くを占め、バンダ・アチェと北部および南部海岸地域に住み、オーストロネシア語族に属し、人種的にはコーカソイド系である。アヌク・ジャマー人、タミアン人もそれぞれ南部、東部海岸地域に住むマレー語系の言語を有する少数民族である。ガヨ人は、州の総人口の10%ほどで、少数民族であるアラス人とともに、スマトラ島中央部に走るバリサン山脈の、それぞれ中部と南部に住む山地民で、原マライ人種に属し、バタク人に由来する先住民族である。これらの先住民プリブミ (pribumi) とは別に、北部および南部海岸地域を中心に、またアチェ州全体の都市に

居住する移住民プランタウ (perantau) として区別される華人 (チョンホア Tionghoa) (写真 8, 9, 26, 27) の衣生活文化との関係についても研究対象とした。本研究では、これらの民族の居住地を訪ね、それぞれの服飾工芸品生産の現状・特徴について調査研究を行った。

研究方法について、2009年度～2011年度に行ったアチェ州各地での衣服・布づくり、服飾工芸にたずさわる人々へのインタビュー調査、およびバンダ・アチェ (バンダ・アチェ市立図書館、シャークアラ大学図書館、アリ・ハシュミ図書館)、ジャカルタ (国立図書館、中央統計局)、メダン (メダン市立図書館)、アメリカ (スタンフォード大学図書館) および日本国内 (アジア経済研究所図書館) での文献資料調査から考察を行う。

次に、2009年度～2011年度に行ったフィールド調査の内容について、年度ごとに概要をまとめる (地図 2、表 1、表 2 参照)。

[2009年度] : 次のように 2 回行ったフィールド調査から考察を導く。

第 1 回 : 2009 年 7 月 22 日～8 月 11 日に、アチェ人の居住地であるバンダ・アチェ およびアチェ・ブサル県 (Kabupaten Aceh Besar) で、衣服・布づくり、服飾工芸にたずさわる人々にインタビュー調査を行った。

第 2 回 : 2009 年 12 月 7 日～24 日に、アチェ人の居住地であるバンダ・アチェ市、アチェ・ブサル県、ピディ県 (Kabupaten Pidie)、ピディ・ジャヤ県 (Kabupaten Pidie Jaya)、ロスマウエ (Lhokseumawe)、アチェ・バラット県 (Kabupaten Aceh Barat)、アチェ・ジャヤ県 (Kabupaten Aceh Jaya) と、ガヨ (Gayo) 人の居住地であるアチェ・トゥンガ県 (Kabupaten Aceh Tengah) のタケンゴン (写真 23)、ブヌール・ムリア県 (Kabupaten Bener Meriah) で、14 人を対象にインタビュー調査を行った。

[2010年度] : 次のように 3 回行ったフィールド調査から考察を導く。

第 1 回 : 2010 年 5 月 7 日～15 日に、アチェ・タミアン県 (Kabupaten Aceh Tamiang) でタミアン人の服飾工芸、ピディ県ガロット (Garot) 村 (地図 3; 写真 13～17, 20) のアチェ人による服飾工芸・コピア・ムクトゥブ (Kopiah Meuketob) づくり、アチェ州 DEKRANAS (全国服飾工芸品協議会) および行政によるバティック・刺繍バッグ (写真 11)・ソングケット (songket 緯糸紋織) 生産 (写真 10) の推進について調査を行った。

第 2 回 : 2010 年 9 月 22 日～10 月 3 日に、バンダ・アチェのアチェ人ファッション・デザイナーとそのバティック、伝統衣裳店、仕立屋、洋裁教室、DEKRANAS での衣服づくり調査、および中国系住民チョンホアの服飾調査を行った。

第 3 回 : 2010 年 12 月 19 日～30 日に、バンダ・アチェのアチェ人ファッション・デザイナー、仕立屋、華人住民の衣服づくり、ピディ県ガロット村のコピア・ムクトゥブづくり (写真 17)、ピディ・ジャヤ県トレンガデン (Trienggadeng) のアチェ人によるティカール (tikar 棕櫚編。写真 22)、アチェ・ブサル県モンタシ (Montasik) のアチェ人によるボルディール (bordir ミシン刺繍) 生産調査を行った。

[2011年度] : 次のように 3 回行った調査から考察を導く。

第 1 回 : 2011 年 5 月 4 日～12 日に、沿岸都市ランサ (写真 25) に宿泊してアチェ・タ

ミアン県のタミアン人の服飾工芸、沿岸小都市シグリに宿泊してピディ県ガロット村のアチェ人による服飾工芸コピア・ムクトゥブづくり、DEKRANAS および行政によるバティック・刺繍バッグ・ソンケットについて、そしてバンダ・アチェ市内の華人の服飾調査を行った。

第2回：2011年8月22日～9月2日に、アチェ・トゥンガラ県 (Kabupaten Aceh Tenggara) クタチャネ (Kutacane) でアラス人の服飾工芸 (写真 28)、アチェ・スラタン県 (Kabupaten Aceh Selatan) タパクトゥアン (Tapaktuan) でアヌク・ジャメー人の服飾工芸、およびアチェ・バラット県 (Kabupaten Aceh Barat) ムラボ (Meulaboh) (写真 31) とウェ島 (Pulau Weh) サバン (Sabang) でのアチェ人の服飾工芸、バンダ・アチェの華人の服飾調査を行った。

第3回：2011年12月20日～28日に、バンダ・アチェとジャカルタでの文献資料調査、およびピディ県ガロット村における服飾工芸調査を行った。

それらの研究成果を、アチェの服飾工芸、ファッション・イスラーム・伝統文化、民族のアイデンティティ、女性の暮らし、華人の人々の暮らしをキーワードに、7章にまとめて考察を述べることにする。

なお、次にあげる方々に、本研究でお世話になりました。

2009年度共同研究者であったシャークアラ大学講師 Syafwina 氏には、アチェでのフィールドワーク、文献調査、またアチェの現状についていろいろとご教示いただきました。また共同研究者 Herawati 氏の夫 Sanusi Wahab 氏、長男 Maksarmina 氏、次女 Sarah 氏、親戚の Jalaluddin Abubakar 夫妻、また Wahab 家の運転手 Heri さんには、バンダ・アチェでの調査で多くのご協力をいただきました。シャークアラ大学講師の Aya Sofiana 氏には、Syafwina 氏とともに名古屋セミナーでアチェ文化について講演をしていただいたり、アチェ・ファッションについて有意義な話を聞いたりすることができました。

華人文化について、メダンの Kosashi(高德材)氏、北スマトラ大学 Agustrisno 先生、バンダ・アチェの Jony (呉国忠) 氏、客家オフィスの Haryanto (老偉富) 氏、Daimaru 店主 Lely 氏、シャークアラ大学講師 Dr. Abdul Rani Usman 氏に、いろいろとお教えていただきました。

またアチェ州各地で調査にご協力下さった、アチェ州 DEKRANAS 長 Darmawati A. Gani 氏、同秘書 Netty Murhani Murp 氏、バンダ・アチェ市長夫人 Nurshanti Mawardy 氏、バンダ・アチェの洋裁学校プトゥリ・クストゥムの校長 Ainal Madia 氏、ミレク・タマン村の Jasmani 氏夫妻、ガロット村の Wathania Usman 氏、Cut Aja Ainsyah 氏、Kasmidar 氏、タパクトゥアンの Teuku Syaribunino 氏、クタチャネの Ulian 氏、ランサの Cut Huzaimah 氏、Lina 氏、スルワイの Mariani 氏、ムラボの NN 店の Syarifah Aurilam 氏夫妻、Evi Usmanidar 氏、ジャカルタ在住の Ibrahim Hasan 前アチェ州知事夫人 Siti Mayram 氏には、インタビューにご協力をいただき、貴重な話を聞くことができましたことを、ここに深くお礼を申し上げます。

主な公表成果

[著書]

1. 松本由香

2011 「文化のアイデンティティとしての服飾デザイン」『生活環境学シリーズ 3 生活のデザイン』横川公子編、光生館:pp.77-84。

[国際会議発表]

- 2009年8月8日、アチェ州立シャークアラ大学教育学部でのセミナー ‘*Ekstensi Potensi Daerah Kreasi Sandang dan Pangan*’ (『衣・食生活の創造における地方の可能性』) で、松本は、‘What is the meaning of making clothes and textiles’、Zainは ‘Tenunan Aceh dalam Tantangan Masa’ (「アチェの織物の現代への挑戦」) のテーマで講師を務めた。
- 2010年12月22日、シャークアラ大学教育学部でのセミナー ‘*Lintas Budaya Indonesia(Aceh), Jepang dan America dalam Kehidupan Sosial Masyarakat Aceh*’ (『アチェの社会生活からのインドネシア(アチェ)、日本とアメリカの文化の概観』) で、松本は ‘Tradisi dan Produksi Kurume Ikat di Kyusyu, Jepang Saat ini’ (「久留米絣の伝統と現在の生産」)、佐野は ‘Social and Connection among Persons’ の研究報告を行った。
- 2011年12月17日、名古屋国際デザインセンターで、文化ファッション研究機構服飾文化共同研究公開セミナーを開催した。テーマは『衣服・布・服飾雑貨づくりと女性のくらしーインドネシア、アチェと愛知県稲沢の事例より』で、松本は「衣服・布・服飾雑貨づくりと女性のくらし」、Zainは「アチェの伝統的手工芸」と「金糸刺繍カサブのワークショップ」、佐野は「アチェ人の正装用帽子コピア・ムクトゥプの特徴と地域的特殊性」と題して研究報告を行った。

[学会発表]

- 2011年6月4日、服飾美学会第94回研究発表大会において松本が研究発表を行った。テーマは「ファッション・イスラーム・伝統の位置づけーインドネシア・アチェ人の服飾事例より」(お茶の水女子大学)
- 2012年5月13日、日本家政学会第64回大会において松本・佐野・Zainが研究発表を行った。テーマは「インドネシア・アチェの人々のくらしと衣服・布づくりのもつ意味」(大阪市立大学)

[口頭発表]

- 2010年3月、奈良女子大学ポストドクター公開セミナー『持続性、多様性、暮らしやすさー学術的、領域横断的視点による日常生活研究の重要性』で、松本は「インドネシアの衣生活文化、自立支援、災害復興」と題して研究報告を行った。(奈良女子大学)
- 2012年1月7日に、松本は日本風俗史学会中部支部例会において研究報告を行った。テーマは「インドネシア・アチェの服飾・手工芸と津波後の復興」(衣の民俗館)
- 2012年2月26日に、松本は武庫川女子大学洋裁文化研究会において研究報告を行った。テーマは「インドネシア・アチェの女性のくらしと服飾・手工芸・洋裁文化」(武庫川女子大学)

II アチェの服飾工芸と民族のアイデンティティ

1. アチェの歴史的特性と政治・文化

アチェは、マラッカ海峡に面し、古くから香辛料、コーヒー、金、染織品などの産物を輸出する貿易で栄えてきた土地である。交易によってアラビア人、ペルシャ人、トルコ人やインド人が集まり、イスラーム教がもたらされた。中国の年代記には、7世紀の終わりに、アラビア人のイスラーム教徒の王が、アチェに存在していたと記されている[Bangkaru 1997:15]。西暦840年には、すでにイスラーム教国の存在が確認されていて、これは東南アジアで最初のイスラーム王国とされる[Bangkaru 1997:15]。13世紀の終わりには、強大なイスラーム王国サムドゥラ・パサイ (Samudra Pasai) が、現在のロスマウエを中心として興り、商業、信仰、教育の中心地として栄えていた[Bangkaru 1997:15]。ベネチアの商人マルコ・ポーロは、1292年にアチェを訪れ、東方見聞録の中に、この地が当時、ラ・ムリ (La Muri) と呼ばれて栄えていたことを記している[Sujitno 1995:235]。

このイスラーム文化以前には、仏教やヒンドゥー教による文化が栄え、アチェ各地の民族の文化と混合して、独特の特徴ある文化が形成されていた。これらの文化要素は、各地の木造家屋のかたち、彫刻、バンダ・アチェにあるチャクラドニャ (Cakra Donya) という中国から17世紀に贈られた鐘、やはり同時期に建造されたグヌンガン (Gunungan) という山々をかたどった庭園のモニュメントなどにみられる。このように異なる文化要素が混合して、現在のアチェの人々の生活文化が形成された。

16世紀初頭、アチェ・ダルサラーム (Aceh Darussalam) 王国がアチェ地方全域を統一し、その後、スマトラ島北部海岸地方からマレー半島にまで勢力を広げていった[Smith 1997:5-6]。17世紀初めのスルタン・イスカンダール・ムダ (Sultan Iskandar Muda) の時代が、アチェ史上の黄金期であった。当時、アチェには、トルコ、アラビア、ペルシャ、インドなどのイスラーム文化が開花し、今日のアチェ文化の原型が、この時代に生まれたとされる[Smith 1997:7-8]。この後、アチェには、スルタン・イスカンダール・ムダの娘スルタナ・サフィアトゥディン・タジュール・アラム (Sultanah Safiatuddin Tajul Alam) をはじめとする4代の女帝が誕生したが、マレー半島を含めた広範囲の政治的および軍事的力の不足により、しだいに王国の勢力は衰えていった[Khan 2010:3-25]。通常、男性がスルタンとなるイスラーム教国でありながら、女帝が4代続いたことが、アチェ人社会が母系制であることとつなげられて論じられる土台となっている。

16世紀初めから、ポルトガル、オランダに次いでイギリス、フランスが、アチェの香辛料やカカオ、コーヒーを求めてアチェに進出した。特にオランダは、ヨーロッパの他の国に、アチェを支配されることを恐れ、オランダの制御下に置こうと、アチェに軍を送った[Bangkaru 1997:16-17]。1873年には、主権を譲らないアチェに対し、オラン

ダは攻撃を始め、その後 40 年以上に及び、オランダとの間でアチェ戦争が続いた。しかしアチェの人々は、20 世紀初めまで、オランダの支配に屈することなく、長らく抵抗を続けてきた[Smith 1997:9-13]。このアチェ戦争では、アチェの住民とオランダ兵との間で多くの犠牲者が出て、終焉は明確ではなく、各地で紛争が続いた。

アチェの各地域は、地域の商業活動を含めた首長ウリーバラン (Uleebalang) とイスラーム教の指導者であるウラマ (Ulama) によって統治され、20 世紀初めまで継続的に地位を保ったスルタンが、今のバンダ・アチェ、当時のクタラジャ (Kutaraja) を中心にアチェ北部沿岸、南岸を統治した。しかしアチェ戦争でのオランダとの内戦状態が、第二次世界大戦まで続き、大戦中は日本軍が駐留し、混乱した状態は、第二次世界大戦後まで続いたといえる。

1945 年にインドネシア独立を導いたスカルノ政権を経て、1968 年からのスハルト政権の時代にも、アチェでは、石油や天然ガスなどの豊富な鉱物資源を、ジャカルタの中央政府によって搾取されていると感じるアチェの住民と中央政府との間で対立が続いた。アチェの人々は、中央政府の動きに対し、自由アチェ運動 GAM (Gerakan Aceh Merdeka) を展開し、アチェ州内の各地で、国軍と市民兵との間でゲリラ戦が繰り広げられた。このコンフリクト状態は、2004 年 12 月のスマトラ島沖地震で被災するまで続いた。この当時、外国人のアチェ州への立ち入りが制限され、アチェは閉鎖状態にあったが、津波後、国際社会が被災と復興に注目すると、2005 年 8 月にはヘルシンキ条約が GAM と中央政府との間で締結され、コンフリクト問題は、急速に解決した。津波後、多くの NGO が復興支援を行い、建築物、インフラの再構築・整備がなされ、特にバンダ・アチェは国際都市へと変貌を遂げてきた。こうしてアチェの人々のくらしは、近代化に向かって大きく進んだといえる。

2. アチェの服飾工芸の歴史的推移

アチェの人々が着用していた衣服としての布は、19 世紀末のオランダとのアチェ戦争の頃まで、各地で手織りで作られ、特にクタラジャのラングゴップ (Lamgugop) などで織られていた[Yunus 1985/86:31-32]。当時、アチェ各地でフィールド調査を行ったオランダ人研究者 Snouk Hurgronje は、1906 年にオランダで刊行した *The Acehnese* に、アチェ人女性が染めの色彩を工夫して絹織りをしていたことを記している[Hurgronje 1985:67]。

しかし 19 世紀後半から 20 世紀初頭までのアチェ戦争、その後の第二次世界大戦、それらの間に継続的に各地で起こった紛争、また 1970 年代から 2004 年スマトラ島沖地震で被災するまで続いた、GAM と中央政府とのコンフリクトで、手織りは各地で衰退していった。

各地で自家生産的に作られながら、特に大戦後に衰退していった手織りなどの服飾工芸を、当時の州政府が保存しようとしていたことが明らかである。特にスカルノ元大統領時代の 1956 年には、アチェは特別州 (Daerah Istimewa) となり、自治が尊重された[Rist 2010:108]ことともかわり、1958 年が第 1 回目となったアチェ文化祭 PKA は、その後、国の文化の一部としてのアチェの慣習と文化の継承、開花の目的のために継続して開催されてきた。この伝統文化を尊重する流れは、国によるアチェの自治が軽

視されて国家への統合が強められ、その後それに対抗する動きとして自由アチェ運動 GAM が発起して、中央政府およびアチェ州政府の政策的流れが変化しても継続されたといえる。そういった中で、中央政府による地方文化尊重の動きは、1980年代、政府による「地方文化調査記録プロジェクト (Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah(IDKD))」の施行につながり、アチェの伝統服飾もその対象となり、その調査成果が、教育文化省から1985年に、*Pakaian Adat Tradisional Daerah Propinsi Daerah Istimewa Aceh* (『アチェ特別州の伝統的慣習衣服』)の文献[Yunus 1985/86]として刊行された。この1980年代には、アチェ州教育文化局 (Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh) によって、アチェ州全域の服飾工芸品生産状況の調査が行われた。その調査結果は、1980年から1985年にかけて刊行された調査報告書[Muhammad 1980a・1980b・1980c・1981・1982・1984・1985]にまとめられた。それによれば、当時、州内の各地で、刺繍 (シュラム *sulam*)、棕櫚編 (ティカール *tikar*) が行われ、またバンダ・アチェに近いアチェ・ブサル県などのいくつかの県で、首飾りや指輪などの金属による装身具がつくられていたことがわかる。刺繍 (*sulam*) が行われていたという記述については、ミシン刺繍 (ボルディール *bordir*) か手仕事による金糸刺繍 (カサブ *kasab*) なのかは明らかではないが、刺繍と編物は州内のどこでも行われていて、自家生産的なものであったと考えられる。このような調査報告書が刊行されたことから、服飾工芸の保存・振興が、当時、中央政府の方針であり、またそれを受けて、アチェ州政府にとっても重要な課題であったことが理解できる。この調査は、1984年9月にバンダ・アチェで開催されたアチェの衣服のモチーフについてのパネル・ディスカッションにつながり、それらの成果が、アチェの伝統衣服と慣習についてまとめられた文献 *Pedoman Umum Adat Aceh Edisi 1: Pakaian* (『アチェの一般慣習の手引き・第1巻：衣服』) [Alamsyah 1990]として1990年に刊行された。

服飾工芸は、その後、自由アチェ運動などのコンフリクトで途絶えたり衰退したりしながら、バンダ・アチェ近郊を中心に細々と続けられてきた。

衰退するアチェの染織・服飾工芸を最初に振興しようと試みたのは、1986年にアチェ州知事に就任し、1993年まで在職した Ibrahim Hasan (1935-2007 アチェ人男性) である。彼は、夫人 Siti Maryam (1940- アチェ人女性) に、各地の衣服・布づくりを調査させて現状を把握し、緯糸紋織 (ソングケット *songket*) を再興し、バンダ・アチェのムラクサ (Meuraxa) に織工芸センターを設けた。さらにアチェ州中部の山地に住むガヨ人のミシン刺繍の衣服デザイン・技術をとりあげ、バンダ・アチェでその教室を開き、各地から受講生を募り、技術者を養成した。この試みが成功した地域の例として、アチェ・ブサル県のモンタシ (Montasik) をあげることができる。この地域では、当時の受講生の一人であった Nurjana (1949- アチェ人女性) が、習得したボルディールの技術を地域の女性たちに教えてきた。ここモンタシでは、現在、ボルディールが盛んに行われ、女性による地域産業の一つとなっている。

このアチェでの染織・服飾工芸品生産の動きは、インドネシアの政治・社会状況と重なる。1968年～1998年の30年間という長期にわたって大統領の座に就いたスハルト元大統領は、新秩序体制の一つとして、女性による服飾工芸生産を振興し、インドネシ

アの多様な民族文化を表象する手段とした。そして1981年には、女性公務員および公務員の妻から成る全国的な服飾工芸振興組織 DEKRANAS (Dewan Kerajinan Nasional 全国服飾工芸品協議会) を設けた。つまり大統領夫人が頂点に立ち、その下に各州知事夫人、県知事夫人が位置するという、全国に網目状に広がる女性組織を形成したのである。先述した Siti Maryam は、当時のアチェ州 DEKRANAS 長としてアチェの服飾工芸の振興活動にたずさわったのである。スハルト元大統領は、各地で服飾工芸振興または教育に功績のあった人々を表彰し、そのような表彰は、アチェでは特に1990年代に多く行われた。その一例として先に述べたモンタシの Nurjana は、ボルデールの教育の功績に対し、1995年にスハルト元大統領から表彰を受けた。

アチェの服飾工芸は、GAM のコンフリクトなどで、各地で途絶えたり衰退したりしながら細々と続けられてきた。しかしその生産が大きく変化したのは、2004年12月のスマトラ島沖地震による津波被災後である。アチェの服飾工芸は、特に津波後に振興されるようになった。行政、インドネシア政府とスイス、オーストラリアなどの外国資本による復興庁 BRR (Bureau of Reconstruction and Rehabilitation Agency 2005~2009年)、インドネシア赤十字社、日本赤十字社、カナダ赤十字社などの災害復興支援プログラムに、女性の自立をうながすものとして服飾工芸が含まれてきた。しかしこの服飾工芸のプログラムについては、住まいやインフラ整備などとは異なり、プログラムの実施状況、経過・結果の評価について、報告書に記述されることはなく、一つ一つ聞き取りして状況を把握するしかないといえる。これらの NGO の援助、共同組合 KOPERASI、DEKRANAS によってデザイン・生産が整えられてきた。2009年12月の BRR 終了後、雇用の減少などにより、経済が下降気味となり、服飾工芸品の需要は減少したといわれるが、インドネシア全体の好景気に支えられ、服飾工芸品生産は維持されているといえる。

3. 服飾工芸品生産の状況についてのフィールド調査結果

以上に述べたようなインドネシアおよびアチェの服飾工芸生産をめぐる歴史的・政治的な状況をふまえながら、2009年~2011年に行ったアチェ州各地でのフィールド調査において得たインタビュー資料から、アチェ州各地で、どの民族によってどのような服飾工芸生産が行われているのかを、アチェ州に住む主な5つの民族、アチェ人、タミアン人、アヌク・ジャマー人、ガヨ人、アラス人、そしてアチェ州の各都市に集住する華人(チョンホア)に分けて、それぞれについて述べる(表1,2; 地図2参照)。

(1) アチェ人

アチェ人は、アチェ州人口の90%近くを占めるとされ、州都バンダ・アチェおよび、バンダ・アチェから北岸、南岸の沿岸地域に居住するマレー系の海洋民族である。とくにバンダ・アチェから西へアチェ・ブサル県、さらにスラワ (Selawah) 山を越えて西へ100キロメートルほど進んだところにあるピディ県シグリ (Sigli) から、さらに南に8キロメートル進んだガロット (Garot) の村にかけて、アチェ人による服飾工芸が盛んに行われている。その種類は、ソンケット (songket 緯糸紋織)、バティック (batik 臙纈染)、ボルデール (bordir ミシン刺繍)、ティカール (tikar 棕櫚で編んだ敷物お

よび日用雑貨)、カサブ (kasab 金糸刺繍)、コピア・ムクトゥブ (Kopiah Mekeutob 男性用盛装帽子)、コピア・リマル編 (Kopiah Rimar ムスリム男性用椰子葉脈編みの帽子)、伝統衣裳、ファッション・デザイン、テイラー (仕立て taylor) である。

それぞれについて、次に述べる。

ソンケット：ソンケットはアチェ各地で古くから行われていたと考えられるが、アチェ戦争や第二次世界大戦で衰退した。この織りはアチェ・ブサール県のシーム (Siem) 村で、1973 年に再興されるようになった (写真 10)。その工房を開いた Nyak Mu (1933-2009 アチェ人女性) は、ソンケットの有能な織り手として知られるようになり、高品質の布を生産し、工房をやりくりしてきた。彼女が 2009 年に 76 歳で亡くなると、その娘 Dahlia (1970- アチェ人女性) が工房を継いで生産にたずさわってきた。現在、工房が所有する織機は 60 台ほどあって、近所の女性に貸し出し、工房では 8 人が織りにたずさわっている。働き手である女性たちは、20 歳代の主婦が多い。材料となる絹糸は、かつてはアチェで養蚕によって生産されていたが、1970 年代には生産が途絶え、現在はパレンバンなどから仕入れているという。地元のシャー・クアラ大学の女子学生を 6 カ月間、ソンケット織りの実習で引き受けたことがあり、大学生や希望者に広く織りを教授する活動も積極的に行ってきた。

このシーム村の工房に近いミレク・タマン村の Jasmani (40 歳代 アチェ人女性) が、2006 年に 3 カ月ほど Nyak Mu の工房で織りを学び、現在、夫とともに自宅で工房を経営している。政府および DEKRANAS の資金援助を受けて、2 台の織機を得て、計 10 台の織機を備え、工房の運営を行っている。彼女はソンケット織りを始めた動機について、「アチェの伝統的な文化としてのソンケットがなくならないように、ソンケット織りを守りたいと思った」といい、工房で織るソンケットの文様を毎年変え、2011 年は「鋸歯文 (Pucuk Reubong)」がテーマということであった。彼女のように、アチェの伝統文化を再認識するケースは、ほかの女性たちにもみられ、津波後に、伝統的な織りに興味をもって勉強しようとする人が増えたという。織りは家ですることができ、家計をサポートしてくれることが魅力であるという。

ソンケット織りは、このアチェ・ブサール県のほか、バンダ・アチェから南海岸に沿って 100 キロメートルほど西に行った海岸沿いのロッ・クルエト村 (Desa Lhok Kruet, Kecamatan Sampoi Niet, Kelompok Bungong Ban Keumang) でも行われている。ここで工房を経営する Rumaiyah (1969- アチェ人女性) は、近くの村の女性職人十数名を擁して、ソンケット織りをしている。彼女は、2002 年から近くのラムノ (Lamno) の教室で織りを学び、工房を設けたという。この海岸沿いにある村も津波の被害に遭い、前の工房は流されたが、津波後、カナダ赤十字社の援助を受けて工房は建て直され、現在、ここで織りが行われている。州 DEKRANAS も、この工房のソンケット織りの質が、年々良くなってきたことを評価している。

バティック：バティックは、もともとアチェにはない染色技法であったが、1986 年に、当時の州知事 Ibrahim Hasan が創出した。その後、細々と生産が続けられてきたようであるが、どのように生産されてきたかは、資料がなく明らかではない。このアチェのバティック生産は、女性の生計の手段として津波後に特に注目され、BRR の資金援助を受けて、州 DEKRANAS によって、2006 年にバンダ・アチェ郊外に工房が設けられ

て盛んに行われるようになってきている。ジャワのバティックとは異なるアチェらしさを出したデザインが工夫され、ジャワ島のジョグジャカルタにあるバティックの老舗ダナル・ハディの協力を得て染めを改善し、アチェ独特の伝統文様であるピントゥ・アチェ (Pintu Aceh アチェの扉)、コピア・ムクトゥブ、レンチョン (Rencong 小刀) などの文様が考案され、それらの版型が、ジョグジャカルタで注文された。アチェのバティックの特徴とは、ジャワ・バティックのような文様が布全体に充填されたものとは異なり、文様の間に空間があることだという。またガヨ人の伝統文様や色彩を使ってアチェらしさをあらかず工夫がなされ、簡文や、黒字に黄・赤・白・緑の色彩が多用されている。2007年には、州 DEKRANAS が中心となって、ジャカルタで「ルモ・バティック・アチェ (Rumoh Batek Atjeh アチェのバティックの家)」のブランド名でファッション・ショーを開催するなどして、アチェのバティックをインドネシアに広く紹介することが試みられてきた。

2010年5月のインタビューでは、工房で布に蠟置きしていた十数人の女性すべてが津波の被災者で、夫や子どもを亡くした人々であり、生計のためにバティック生産に従事しているという話を聞いた。

ボルディールによるかばん生産: 現在、アチェ州を代表する産品になっているボルディールのかばんは、津波前からつくられていて、その創製には、1986年の Ibrahim Hasan 州知事時代にアチェ・ブサール県知事夫人であった Herawati binti Muhammad Zain (1948- アチェ人女性、本共同研究者) が大きな役割を果たしてきた。彼女は、ガヨ人の布や建築物の伝統モチーフを調査し、ガヨのボルディールをかばんにほどこして、アチェ州のものとして生産することを考案した。当初試行錯誤してつくられたボルディールのかばん生産は軌道に乗り、現在、毎年4月にジャカルタで開催される全国の DEKRANAS による展示会に、アチェ州の産品として必ず出品されるようになってきている。

Herawati が尽力して 2008 年に開設されたアチェ・ブサール県クタ・マラカ (Kuta Malaka) にあるボルディールのかばん工房では、ジャカルタから専門のデザイナーが招聘されて、デザインや生産ラインが整えられてきた。州 DEKRANAS は、約 200 台のミシンを近郊の家庭に貸し出し、家庭婦人が内職としてかばんの部品にボルディールをほどこしている。そして、17 歳～40 歳の女性 25 人が工房で、ボルディールをほどこした部品を縫製してかばんに成形する仕事を行っている。刺繍の文様は、やはりピントゥ・アチェが主であるが、定期的にモデル・チェンジし、カタログ冊子も作成している (写真 11)。

このような DEKRANAS 直営の工房とは別に、各地で個人の工房を運営する経営者がいる。バンダ・アチェに近い、アチェ・ブサール県スカブミ (Sukabumi) では、Khairan (1971- アチェ人女性) が、2009 年にボルディール・バッグ工房を設立した。工房では近所の女性たち 17 人が働いている。州 DEKRANAS が生産を注文し、ウェスタン風の刺繍柄のためか、アメリカからまとまった注文があつて輸出しているという。

アチェ州北部沿岸の都市ロスマウエに近いアチェ・ウタラ県 (Kabupaten Aceh Utara) ウリー・マドン (Desa Ulee Madon) で、ボルディール工房を運営する Armia (1977- アチェ人男性) は、1996 年に工房を設けた親の仕事を継いで、現在かばん生産を行っている。50 人の女性と 10 人の男性が、イスラームの慣習にしたがって、男性

と女性の部屋に別れて仕事をしている。ここにも州 DEKRANAS が生産の注文をし、やはりアメリカに製品を輸出している。

このようにアチェ人によるボルディールは、DEKRANAS や各地の個人経営の工房で、特にアチェ州としての特徴あるかばんに結びついて行われている。

ティカール：ティカールは、古くから各地でつくられてきた。ティカールの材料となる棕櫚は、各地で自生し、1年を通して収穫が可能な植物である。ティカール編みの盛んなピディ・ジャヤ県トレンガデン近辺では、各家庭の女性 400 人ほどによって、棕櫚を編んだ敷物、それをデザイン化したかばん、小物入れ、インテリア用品などがつくられている（写真 22）。津波以後、NGO、特に Save The Children が被害のあった家を改修し、また店舗を設け、ジョグジャカルタなどからティカール編みの先生を招聘して、これまでつくられていた敷物だけでなく、ティッシュ・ボックスなどのインテリア用品にデザイン化することを援助してくれたという。これらの製品は「スク・アチェ (Seuke Aceh アチェ民族)」のブランド名で、婦人服飾工芸共同組合 KOWANKRA によって生産・販売が管理されている。ティカールの編み文様は格子縞、ジャワのバティックの斜め文様、ピントウ・アチェなど、デザイン化が工夫されている。県 DEKRANAS もこの生産を援助し、県 DEKRANAS の事務所やシグリの街中にあるアンテナ・ショップで販売するなどしている。

トレンガデンのルン・ビンバ (Lung Bimba) 村に住む Nazaria (1965- アチェ人女性) は、ティカール編みを母親から学び、近所に住む 100 人ほどの家庭婦人の生産管理をしてきた。津波でやはり生活の変化があったといい、津波前は、水田耕作とエビの養殖が生業であったが、津波後には、ティカール編みが主な生業になっているという。文様を編み出すための棕櫚の葉脈の染色を、かつて行われていた天然染料で行ってはどうかと、筆者は提案してみたが、退色の心配から合成染料で行っているということであった。

カサブ：結婚披露宴での壁飾りなど、儀式性の高い場で用いられるカサブは、自家生産的なボルディールやティカールに比べて、特化された産地で生産されているといえる。調査では、アチェ州内で古くから現在まで行われてきた産地は2つあることがわかり、一つはピディ県ガロット村（写真 16）、もう一つはバンダ・アチェから南海岸沿いに400キロメートルほど西に行ったアチェ・バラット県ムラボである。次にそれぞれの地域でのインタビュー結果から、生産の状況、特徴について述べる。

ガロット村の服飾工芸の村としての歴史は古く、17世紀のスルタン・イスカンダール・ムダの時代には、ガロットは、すでに王族御用達の服飾工芸街であった。この村の、特に代々カサブ生産が行われてきたことで有名なジュルン・クプラ (Jurung Kupula) 村で、母親からカサブを学び、生産にたずさわってきた Cut Aja Ainsyah (1929- アチェ人女性) (写真 20) は、優れたつくり手として、スハルト時代の 1991 年に、受賞 (Upakarti) したことがある。1981年にカサブの共同組合 KOPERASI ができると、優れた技術を有し、古くからガロットで行われてきたカサブを盛んにした彼女が、初代の組合長に選出された。

Cut Aja Ainsyah の二代目として KOPERASI の長を現在まで務める Wathania Usman (1959- アチェ人女性) は、プングサハ (pengusaha ディレクター) として、

50 人のブンラジン (pengrajin 職人) の生産を管理している。広域には、ガロットはインドラジャヤ郡 (Kecamatan Indrajaya) のセンター的存在であり、郡全体で 400 人ほどがカサブやボルディールの仕事にたずさわっているという。ガロットのモスクの正面にある彼女の自宅には、KOPERASI のオフィスを兼ねた工房および服飾工芸品販売店「クプラ・インダ (Kupula Indah Sevenir Aceh)」があり、数人の女性職人がボルディールにたずさわっていた。彼女も母親からカサブを学び、優れたカサブの技術をもつことと、小学校の教員であることから、地域のチューターの存在であり、KOPERASI の長に選出されたという。スハルト元大統領は、ピディの服飾工芸を評価したといい、1996 年に表彰を受けている。彼女によれば、ここでのカサブ生産は、多くの家庭にとって副業であり、水田耕作が生業であるという。

このクプラ・インダから、細い路地を住宅地に進むと、そのはずれには水田が開け (写真 13)、伝統的な高床の家の床下で、カサブをする女性たちをみることができる。彼女のまわりでは、母親や親戚の女性たちが野菜の手入れをしたり、彼女の幼い子ども達が、仕事する母親のまわりで遊んでいるのを見ることができる。筆者が、このカサブの作り手に、その文様がガロットの伝統的なものか聞いたところ、それはムラボのデザインだという。同様の話を、他の家のカサブの作り手からも聞くことができた。

そこでムラボでカサブ生産についてインタビューすると、ガロットで生産されるカサブとムラボで生産されるカサブとの違いは、太い扁平な金糸を縫いとめる方法の違いにあるという。ムラボは赤い糸で、太い金糸をとめる方法で、ガロットはこのムラボの様式をまねて細い金糸で太い金糸をとめる方法で行っている。カサブの技法の発生が、ムラボかガロットが先かは、インタビューでは分からなかったが、ガロットの作り手が、ムラボのデザインでつくっていると語り、ガロットの伝統的な文様について聞いた例がないので、確かにカサブはもともとムラボで行われていたものであり、ガロットに伝わったのかもしれない。

ムラボで「NN」という伝統衣裳店を営み、カサブやソンケットづくりにたずさわってきた Syarifah Aurilam (1977- アチェ人女性) は、母親が 1974 年にはじめた伝統衣裳店を継いでいる。母親がカサブのデザインの先生として、職人女性 100 人ほどを擁していた。1997 年には、スハルト元大統領からカサブ生産の功績に対して表彰を受けたという。しかし母親が 2011 年 3 月に亡くなってからは注文が減ったという。

また NN 店の近くにやはり同じ伝統衣裳店をもち、ムラボ郊外に住む Evi Usmanidar (1980- アチェ人女性) も、代々、カサブ生産をする家に生まれ、やはり母親からカサブを学んだという。現在、40 人ほどの女性職人が、近辺の各家でカサブを行っている。昔はこの家に集まってつくっていたという。このようにムラボのカサブづくりにも、伝統的に家に集まってつくっていたものが、各家で生産するというように、近代化によって個々人の生活、時間を尊重する動きがみられるようになっている。

コピア・ムクトゥブ: この生産は、古くからガロットでのみ行われていたといわれ、コピア・ムクトゥブがモスクの屋根、モニュメント、衣服の文様、街中の看板など、象徴的に頻りにみられることも考慮すると、コピア・ムクトゥブは、アチェ人のみならずアチェ州を象徴する意味をももつといえる (写真 18)。これについては、別の章で述べる。

このコピア・ムクトゥブ生産については、ムラボで 1990 年代前半につくられていた

が、2004年の津波で、そのつくり手が亡くなり、途絶えたという話も聞くことができた。おそらく、婚姻や転居などで、コピア・ムクトゥブの技術をもった女性がガロットからムラボに移り住んで、そこで注文に応じてコピア・ムクトゥブをつくったのかと考えられる。ガロット村の中でもガロット・チュットとトゥンコップ (Tungkop) の2つの集落でつくられている。

ガロット・チュット (Desa Garot Cut) では、カサブ生産の Wathania らとはまったく別に、古くからコピア・ムクトゥブ生産が行われている (写真 17)。ガロット・チュットに住む女性にインタビューすると、この村には 100 軒ほどの家があるが、ここでは親族の女性 15 人ほどがたずさわっていて、帽子づくりの工程を5つに分けて、3人ずつが組になり、①2センチ角の布片をつくる、②布片を縫い合わせる、③芯になる綿棒をつくる、④綿棒を入れて筒状にする、⑤頭頂部を編む、の工程を分業している。この生産方法は、各家で異なり、布片を縫い合わせる仕事だけを行って、次の工程を専門にする人に売る場合もあれば、家族で布の裁断から完成まですべて行う家もあった。水田を所有する家では、農繁期は稲作が主となるということであるが、水田などをもたず、帽子づくりだけを生業にする家もあった。

ガロット・チュットに隣接するトゥンコップ村で、ガロット・チュットよりも古くからコピア・ムクトゥブづくりが行われ、今ではガロット・チュットで盛んになり、トゥンコップではコピア・ムクトゥブづくりがさほど盛んではなくなっている。その小村ラワ・トゥンコップ (Rawa Tungkop) では 20 軒ほどがコピアづくりをしているといい、コピア・ムクトゥブの前身のコピア・シヤム (Kopiah Syam) (写真 19 参照) という背の低い帽子づくりも今も行われている。またコピア・ムクトゥブの布をパッチワークする方法を応用したバッグも、赤・緑・黒・黄の伝統色を入れ替えて自由な色合いを組み合わせて、つくられている。

このコピア・ムクトゥブの作り方の特徴、象徴的意味については、後の章で述べる。**コピア・リマル**：これは、ピディ県に近い、アダヤ・アダン (Desa Adaya Adan, Kecamatan Mutiara Timur) でつくられている (写真 21)。ペチ (Peci) と呼ばれるムスリム男性用帽子のつばのない形で、黒の泥染めの編み糸で文様を編み出している。細い糸での透けるような編み地は涼しげで、アチェ土産ともなる高級な帽子である。ここで工房を営む Badriah (1957- アチェ人女性) は、ジョグジャカルタで編みについて学び、アチェに帰省後、1985年に仕事をはじめ、その2年後には、10人がリマル編みにたずさわっていた。現在、たずさわる人はもっと増えて、30人ほどが近辺で編んでいる。1個の帽子をつくるのに15日かかり、高価であるが、伝統的なものとして珍重されているという。この工房名「プサカ・モハ (Pusaka Moha)」とは、「大いなる遺産」という意味で、この編みの高い技術をさしているという。

伝統衣裳：伝統衣裳 (写真 3 参照) 制作については、バンダ・アチェの有名な伝統衣裳店「ニャク・ニ (Nyak Ni)」と、ガロット出身者で、バンダ・アチェの住宅街に工房をもつ「ウオ・バック・アダット (Woe bak Adat)」、またガロット郊外の村ムラユ (Desa Melayu) で婚礼衣裳を縫製する男性の仕立職人を取りあげる。

「ニャク・ニ」は、伝統衣裳店の名前であるとともに、この店を 1971 年に創業した女性の名前 (1937- アチェ人女性) である。Nyak Ni はガロット出身で若い時から縫

製、刺繍に熟達していたという。クバヤを仕立てたり、バティックをつくったり、また各地を服飾工芸品の行商をして歩いたともいう。刺繍・縫製は、母親から学んだという。現在、Nyak Ni は病気で高齢のため引退していて、その娘 Halimatun (1958- アチェ人女性) が店を運営している。現在、バンダ・アチェには2店舗あり、近辺の25軒の家で刺繍や仕立ての仕事をしてもらっているという。また Halimatun は、服飾工芸のディレクターの仕事について、大学で非常勤講師として、学生に講義している。津波直後、バンダ・アチェには多くの人々が訪れ、服飾工芸品がよく売れたというが、現在、売り上げは落ち込んでいるという。

ガロット出身者で、20年前に家族でバンダ・アチェに引っ越し、「ウォ・バック・アダット (Woe Bak Adat)」という伝統衣裳店を運営する Cut Ainal Marziah (60歳代 アチェ人女性) は、祖母が刺繍をしているのを見て、子どもの頃に刺繍ができるようになったという。ボルディール、刺繍を専門にし、コピア・ムクトゥブも、ガロットから布地で作った基盤を買い付け、金属の装飾をつけて完成して販売する。7人が近辺で仕事をしていて、縫製、ミシン刺繍、手刺繍をすべて分業してこなしているという。津波後、ジャワやアチェからの注文は増えたといい、伝統文化としての服飾工芸を守りたいという気持ちから、店名を「ウォ・バック・アダット (伝統に帰れ)」としたという。

ガロットから南に外れたムラユ村 (Desa Melayu) では、Wathania のクプラ・インダとかかわり、伝統衣裳の縫製を行うタイロールの男性職人がいる。その先生も男性で、ボルディールの技術が高いことで定評のあるアラス人の職人であったという。このような縫製の仕事をする職人は、1990年代には、まだガロットに多くいたが、縫製の収入が少ないこともあり、跡継ぎが育たず、現在ガロットに2人ほどしかいないという。

ファッション・デザイナー: ファッション・デザイナーの職域は、バンダ・アチェで展開されていて、バンダ・アチェの中心部には、アチェ人によるブティックが数多くある。本調査では、11名のデザイナーにインタビューを行った。ここでいうブティックとは、経営者であることの多いデザイナー主導のデザインを表現した衣服を販売する店であり、注文主がデザインを決めて縫製を依頼するタイロールと区別される。ファッション・デザイナーの例として、3人をあげる。

Safartiwi Gadeng (1968- アチェ人女性) は、伝統的な服飾工芸を好んで使うデザイナーで、ピントウ・アチェの文様をバティックで表現したテキスタイルでゆったりしたムスリム・スタイルを表現するなど、伝統文化とムスリムの文化要素を混合したデザインを創り出すことに特徴がある。工房では、女性3人、男性2人とともに仕事をし、また近所でボルディール、縫製、ビーズ刺繍、裁断を専門にする職人がいる。彼女は、2009年のアチェ文化祭で、DEKRANASの展示場に代表として作品を出品するなど、アチェらしいムスリム・ファッションでの受賞経験もあり、アチェを代表するデザイナーである。

Ipah (60歳代 アチェ人女性) は、バンダ・アチェでオーダーの「イパ・モデスト (Ipah Modiste)」店を運営するデザイナーである。彼女は、洋裁を中学生の時にモンタシで学んだといい、20歳で結婚してから、中国人に学び、1980~1990年代初めにはジャカルタで縫製、紳士服の仕立てを学び、1990年には、店と並行して洋裁教室を運営してきた。津波で夫が亡くなり、建物にも被害があつて、仕事を中断せざるを得なかったが、

2006年に、カナダ赤十字社の援助でミシンを購入し、仕事を再開して、現在では、大学で被服学を学んだ娘とともに店を経営している。

Syarifah Mariana (1956- アチェ人女性) は、バンダ・アチェの中心地で「マイ・ハウス」店を経営するデザイナーである。メダンの大学で被服学を学び、1980年にオーダーの仕事 시작했다。1998年の政権交代の混乱期にも仕事を順調にこなしてきたが、2009年12月には、アチェの経済は下降し、津波復興のNGO、BRRが終了して、多くの人の収入が下がり、購買が減ったと実感している。しかし今まで12人の女性職人を雇用し、順調に仕事をしてきた。

以上に述べたように、ファッション・デザイナーが好況である背景には、2002年からアチェ州だけに施行されているイスラーム法(シャリア・イスラーム)によって、アチェのムスリム女性が、ブサナ・ムスリマしか着られない状況がある。ジャカルタやバンドゥンなどからの既製服は日常着として位置づけられ、週末に多く行われる結婚披露宴、イスラームの行事には、デザイナーにオーダーした衣服が着用されるという習慣があるのである。これについては、後の章で考察することにする。

タイロール:注文主のデザインにしたがって仕立ての仕事を行う人、またファッションの要素が衣服づくりに少ない場合、仕立屋タイロールとして区別された語が用いられている(写真12)。そのタイロールの例2つをとりあげる。

Abudullah Husan (1944- アチェ人男性) は、紳士服仕立てをもととの業としてきた。優れた縫製の職人が多く排出されてきたシグリ出身で、高校の時バンダ・アチェに移り住み、縫製の仕事をしながら高校を卒業し、その後、地元の大学で経済学を学び、卒業後、経済学と教育学部での被服学を教えるようになった。特に当時、紳士服を教えられる教員がいなかったため、彼は、経済学を教えながら被服実習を指導するという特殊な立場にいた。大学の定年退職後はタイロールの店の経営に専念し、仕立ての良い衣服を顧客の注文にしたがってつくることを行っている。

女性服専門のタイロール「マンズ・タリ (Man's Tari)」の店を経営する Sulaiman (1968- アチェ人男性) は、やはりシグリ出身で、顧客の希望するデザインを聞いて顧客の持参した布を見ながら、デザイン画を描き、顧客と相談してデザインを決め、裁断縫製して仕立てる仕事をしている。ファッション・デザイナーとは異なり、値段も値段で店の雰囲気も気軽にに入れる感じである。

以上に述べたように、アチェ人によって、特に州 DEKRANAS の援助が行われてさまざまな種類の服飾工芸が各地で行われている。

(2) タミアン人

アチェ州北東部沿岸のアチェ・タミアン県、アチェ・ティムール県に居住するタミアン人は、マレー系(ムラユ)で、マラッカ海峡を経てマレー半島と文化的つながりをもつ民族である。オーストロネシア語族に属するタミアン語を母語とする少数民族である。

タミアン人の服飾工芸としては、シュラム、ボルディール、ソンケットがあげられる。タミアンのシュラムは古く、インドに由来し、花や葉、蔓の連続幾何学文様の刺繍に所々ミラーワークが施される。ミラーワークのシュラムは、現在ほとんどつくられなくなったが、アチェ・タミアン県の県庁所在地カラン・バル(Karang Baru)や西海岸へ40

キロメートルほど行ったスルワイ (Seruwai) では、シュラムの他、ボルディールが盛んである。植物の抽象文様や伝統家屋の彫刻文様、小さめの鋸歯文が、タミアンの特徴あるボルディールの文様として、ミシンで刺繍されている。ソンケット織は、古くからタミアン人の間で行われていたが、アチェ・タミアン県の DEKRANAS が、2008 年からスルワイでソンケット織りの教室を開き、地域の女性たちの生活支援とソンケット織振興をはかっている。県の DEKRANAS が織機を用意し、近辺の女性の就労を援助しているのである。最も若い女性は 12 歳で、学校から家に帰ると、織りを学びにこの教室にやってくるという。一枚ソンケットを完成させると、工賃として 100.000RP (約 1.000 円) が得られるという。現金収入の機会の少ないスルワイで暮らす女性たちにとって、ソンケット織りは人気である。

そのほか、DEKRANAS は乾燥させた油椰子の葉脈に彩色したほうきや編んだ皿、バナナの葉を使ったティッシュ・ボックスなどの日用品の生産を振興している。県知事夫人で県 DEKRANAS 長である Sitirahman (1960- タミアン人女性) は、タミアンの由来するムラユの文化を大切にしながら、地元の素材を使った新しいタミアンの服飾工芸をつくりたいと考えている。

そういったムラユの文化の一つであるボルディールの蔓草文様を、現代のムスリム女性向けの衣服にほどこし、県内外に広げていきたいと考える女性がいる。Siti Chadiyah (1970- タミアン人女性) は、スルワイに近いスクラック・カナン (Sekerak Kanan) で、ボルディール縫製の工房を経営している。経営を始めて 10 年が経つといい、近辺に住む 10 人の女性たちと仕事をしている。工房のミシンは、1 台が政府の援助によるもので、工房にはもう 1 台、また各家のプリンタジに貸し出しているものが 10 台あるという。完成した布は DEKRANAS に買い取ってもらい、衣服に仕立てて、このような衣服は、タミアン内で流通しているという。タミアンのボルディールは、1967 年頃振興が始まったといい、政府工業局がボルディールの先生を派遣し、1986 年からの Ibrahim Hasan 州知事時代には、すでに盛んになっていたという。当時、インドネシア全体で P2WKSS という「村の平穏で健康な家庭を目指す女性の地位役割を築くための村の鑑定チーム (Tim Penelitian Kampung Binaan Peningkatan Peran Wanita Menuju Keluarga Sehat Sejahtera)」プログラムがあり、タミアンでは、1967 年頃から、ボルディールが対象とされ、服飾工芸振興のために賞が設けられ、地方ごとにボルディールの技術やデザインを競い合ったという。

タミアン人の婚礼や公の儀礼時の伝統衣裳は、男女とも立襟・長袖・丈長の上衣と、男性はズボン、女性はカイン (腰布) で、素材はすべて手織のソンケットである。

(3) アヌク・ジャメー人

アヌク・ジャメー人は、スマトラ島南岸に位置するアチェ・スラタン県の県庁所在地タパクトゥアンに居住する。文化的にはミナンカバウに類似しているとされるが、アヌク・ジャメー人の伝統衣裳は、男女ともアチェ人とほぼ同様である。

ここでは主だった伝統的な服飾工芸はなく、県行政府が、2003 年からソンケット、2009 年にはバティックの教室を開き、地域の女性たちを募って生産を援助している。その他、ボルディールも行われているが、県は特にバティックを振興しようと考えてい

て、アチェ・スラタン県を象徴する3つの代表的な植物、芳香草 (apacuri)、とうがらしの葉 (daun cabay)、ゴムの木 (buah para) を抽象化したモチーフを創作し、県内外に広げたいと計画している。

行政が2006年に建設した染織工房「バライ・トゥヌン (Balai Tenun)」には、現在地域の女性20人が働きに来ていて、さらに20人のバティック従事者を増やす予定であるという(写真30)。工房にあった織り機は、工業大臣とBRRから援助されたという。タパクトゥアンでは津波の被害はなかったが、その社会・経済への影響はあったという。その後の復興支援があり、織りやバティックの道具を整えて、織りがより熱心に行われるようになったという。

タパクトゥアン郊外でボルディール工房「ムスティナ (Mustina)」を経営するNadir U. Nur (1953- アヌク・ジャマー人女性) は、母親からボルディールを学び、1980年代からボルディールの仕事をしていて、ここがセンターとなって、近所の主婦12人がプンラジンとして仕事をしている。ボルディールのモチーフは、アヌク・ジャマーの伝統的な植物の抽象柄を創作柄と混合して用いるという。この工房にあるミシン20台のうち、3台が政府の援助によるもので、経済的に困難で就学できなくなった若年女性が仕事に従事するケースがあるという。Nadir は、体調を崩したプンラジンには薬をあげるなど、彼女たちの生活も支援している。

(4) ガヨ人

ガヨ人は、スマトラ島中部に位置するバリサン山脈の山中に住む山岳民族で、アチェ州人口の10%弱である。現在アチェ・トゥンガ島の県庁所在地タケンゴン (Takengon) を中心に居住する。古くからガヨ人の服飾工芸はボルディールで知られ、伝統服飾として、ボルディールの腰布ウレン・ウレン (ulen-ulen) が用いられてきた。

ガヨのウレン・ウレンには、古くからあったとされる太陽 (matanilo) や十字 (segi opat)、筍 (pucuk rebung)、連続する雲 (emun berangkat) などの幾何学的抽象文様がミシン刺繍で描かれる。またウレン・ウレンの色彩は、黒(大地)地に、文様として、黄(王・幸運)、白(司祭・信頼)、赤(長老・印)、緑(人民・日常生活)が用いられ、それぞれの色彩に括弧内に示したような意味が含まれている。100年ほど前にはすでに交易により外国からもたらされたミシンが使用されていて、ミシン刺繍が行われていた。

かなり以前から、このウレン・ウレンのボルディールの色彩、文様を踏襲したバッグがつくられてきた。タケンゴンにボルディール・バッグの店をもつ Saledial Kerawang (1964- ガヨ人女性) は、1983年から仕事をしているといい、28人の女性職人を擁してバッグづくりを行ってきた。そのボルディールの技術は、母親から学んだという。

行政およびDEKRANASも、そのようなガヨの特徴ある製品の生産を奨励している。中部アチェ県知事夫人でDEKRANAS長を務めるRahmawati (1955- ガヨ人女性) は、ムスリム女性向けのゆったりしたドレスに、自身がデザインしたガヨのイメージのボルディールを施し、地域内外に広げたいと考えている(写真24)。

またガヨ人の生活から伝統文化がなくなりつつあることを懸念し、伝統文化を保存しようとして活動する人物もいる。Ibrahim Kadir (1944- ガヨ人男性) は、1970年代初めに、ガヨの刺繍の文様とその意味について調べ、記録する活動を行った。ミシンが入る

前には手刺繍が行われていたであろうというが、100年ほど前には、すでにミシン刺繍が行われていたという。ガヨの文様は、太陽、月などの自然がモチーフとなっていて、色も人々の社会階層をあらわしていると語った。彼は、その当時の調査記録を、*Makna, Pengertian, Pilsafat yang Terkandung dalam Ukiran Ukiran Motif Gayo, Kabupaten Aceh Tengah* (『ガヨの彫刻モチーフにおける意味、解釈、哲学』) [Kadir 2007]として残している。

(5) アラス人

アラス人は、アチェ・トゥンガラ県の県庁所在地クタチャネを中心に居住し、民族的にはガヨ人と同系の山岳民族の文化的特徴をもち、バタク系の少数民族である。服飾工芸についても、ガヨ人の服飾工芸に類似していて、ボルディールの衣服の制作、ティカール細工が行われている。

インタビューした Erwin Sadarudw (1973- アラス人男性) は、父親の代である 1980年代からのボルディール工房を経営し、現在この会社は、クタチャネのボルディールの共同組合 KOPINKRA を兼ねている。ここでは1集団 (kelompok) として 40人の近所で仕事する女性職人 プンラジン をまとめている。この工房ではコンピュータ・ミシンを配備し、また大量の注文があった場合、メダンにあるアラス人のボルディール工房に生産援助を依頼するなど、この工房が中心となって、アラスのボルディールを生産している。

ボルディールのほか、クタチャネ郊外の村では、やはり古くから行われてきた棕櫚パندان (pandan) の葉脈による編物ティカールがつくられている (写真 29)。この村で KOPERASI を運営する Salmawati S. (1964- アラス人女性) は、近所で仕事する 41人の プンラジンの長として、ティカール編みの小物のデザインを考案し、近くのブラスタギ (Blastagi) の街の市場に、カロ・バタク (Kalo Batak) 民族の土産などとして卸している。彼女は、このようにクタチャネ産であることを消して異なる産地の土産として販売することを大変残念に思っているが、プンラジンの収入を考えるとしかたがないと思うと語る。

アラス人の服飾については、古くはガヨ人と同じ一枚布を腰に巻く着方があったという。黒地に赤や黄、白、緑の刺繍糸でボルディールをほどこした腰布、また長袖の上衣、頭布が男女の伝統衣裳の基本である。このような伝統衣裳は婚礼時に着用され、アラス人の婚礼の儀式で特徴的なのが、伝統衣裳のような配色でボルディールした新郎・新婦用の傘である (写真 28)。傘のいくつかの布面には、新郎・新婦の出会いから結納、婚礼の儀式、新居での生活までが物語のように刺繍で描かれ、金属片の飾りが房のようにつけられている。インタビューでは、この傘がアラス人の婚礼に欠かせないものであるといい、アラスの民族的アイデンティティをあらわす服飾工芸品であるといえる。

(6) 華人

現在、華人は、バンダ・アチェのプナユン地区をはじめ、北部沿岸地域のシグリ、ビルーン (Biruen)、ロスマウエなどの都市に集住する。人口は統計資料がなく明らかではないが、2004年の津波で多くが亡くなったり、北スマトラの大都市メダンなどに避

難して、華人人口は減少したといわれている。津波前には、バンダ・アチェに 100 軒以上あったタイロールが、現在では 4～5 軒に減少したという。

バンダ・アチェでタイロール「リサ (Lisa)」を経営する Heu Chu Lan (1955 年・華人女性) の例をとりあげてみる。彼女は、バンダ・アチェの華人住民の住む街クタ・アラム (Kuta Alam) に生まれ、父親が中国の広東出身である。彼女は小さい時から衣服を縫っていて、18 歳の時、メダンで中国人の先生にパターンの描き方、縫製のしかたを学んだという。当時メダンでは、華人が、縫製が上手なことで有名だった。縫製を習得した 2 年後の 1975 年にバンダ・アチェにもどり、タイロールの仕事を始めた。顧客は華人のほか、プリブミのイスラーム教徒が多く、顧客の信仰にしたがった衣服をデザインして仕立てるといふ。店内には彼女の好みの描き絵風大柄のドレスが展示されていた。

バンダ・アチェには、このようにタイロールのほか、糸や布などの手芸用品を扱う店がある。Tjong Nyk Sian (1958・華人女性) は、やはり両親が広東出身で、1976 年から 1 年間、メダンで縫製を学んだ。以前写真屋を営んでいたが、1993 年から手芸用品店を営むようになった。メダンで学んだ洋裁の技術を生かして、衣服の仕立ても引き受けている。

アチェ州内の他の地域も含めて、華人住民は、服飾工芸に関して、タイロールの仕事に従事する人がいるだけで、織りや染めなどの他の服飾工芸にたずさわる例は皆無であるといえる。

また華人の衣生活について、インタビューした華人すべてが、アチェ人やタミアン人らのプリブミのような伝統衣裳はもたず、婚礼で新郎新婦は、タキシードとウェディング・ドレスを着用するといふ、中国の文化的アイデンティティを表象する衣服はないといえる。

このような衣生活を営む華人の人々のくらしにも、近年、変化がみられるようになっている。調査した 2011 年 5 月には、華人住民が多く住むバンダ・アチェのプナユン (Peunayong) 地区で、第 1 回目の華人住民による文化フェスティバルが行われ、会場では中国風デザインのブラウスなどの着用がみられた。このフェスティバルでは、華人住民が、アチェ州を構成する 1 つの民族であることの行政・人々の認識が表明されたといえ、華人住民とともに、アチェのプリブミにとっても、踊りや楽器演奏に参加するなどして、大変好評であったといえる (写真 8)。この華人の生活については、別の章で述べる。

以上、アチェ州に居住する主な 6 つの民族の服飾工芸について、先住の祖先をもつ人 (プリブミ) としての範疇に属するアチェ人、タミアン人、アヌク・ジャマー人、ガヨ人、アラス人は、伝統をふまえた服飾工芸品を生産していて、特にアチェ人が、DEKRANAS の活動を盛んに行い、州のリーダーシップをとって、様々な服飾工芸品を展開している。

それに対し、移住民 (プランタウ) として区別される華人住民は、服飾工芸を全くもたず、それはスハルト時代から中国文化の表象が禁じられていたことが背景にあると考えられる。華人住民が服飾生産とかかわるのは、衣服の仕立て、タイロールの仕事だけ

である。このタイロールの仕事だけが行われてきたということは、逆にタイロールが唯一の華人の服飾工芸にかかわる仕事であり、プリブミの仕事よりも定評があり、華人によって占有的に行われていたことも考えられる。しかしこの考察については、さらに調査を重ねる必要がある。

文献

Alamsyah, T., T. Alibasyat Talsya, Tuanku Abdul Jubril(ed.)

1990 *Pedoman Umum Adat Aceh, Edisi 1*: Lembaga Adat dan Kebudayaan Aceh, Propinsi Daerah Istimewa Aceh.

Bangkaru

1997 *A Handbook to Aceh 1998*: CV Penerbit Balohan Haloban.

Brenner, Suzanne

2005 Islam and Gender Politics in Late New Order Indonesia, *Spirited Politics: Region and Public Life in Contemporary Southeast Asia, Studies on Southeast Asia* No.38: Willford, Andrew C. and George, Kenneth M.(ed.): pp.93-118.

Hasan, Ibrahim

2003 *Namaku Ibrahim Hasan, Menebah Tantangan Zaman*: Yayasan Malem Putra, Jakarta.

Hurgronje, Snouck

1985 *Aceh di mata kolonialis Jilid II*: Yayasan Soko Guru, Jakarta.

Kadir, Ibrahim

2007 *Makna, Pengertian, Pilsafat yang Terkandung dalam Ukiran Ukiran Motif Gayo, Kabupaten Aceh Tengah*: Kabupaten Aceh Tengah Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam.

Khan, Sher Banu A. L.

2010 The Sultanahs of Aceh, 1641-99, *Aceh: History, Politics and Culture*, Graf, Arndt, Susanne Schröter and Edwin Wielenga (ed.): Institute of Southeast Asian Studies, Singapore:pp.3-25.

Muhammad, ZZ.

1980a *Seni Rupa Aceh I Kabupaten Aceh Tengah*: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.

1980b *Seni Rupa Aceh II Kabupaten Pidie*: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.

1980c *Seni Rupa Aceh III Kabupaten Aceh Utara*: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.

1981 *Seni Rupa Aceh IV Kabupaten Aceh Barat* : Departemen Pendidikan dan

- Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.
- 1982 *Seni Rupa Aceh V Kabupaten Aceh Timur*: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.
- 1984 *Seni Rupa Aceh VI Kabupaten Aceh Besar*: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.
- 1985 *Seni Rupa Aceh VII dan VIII Kabupaten Aceh Selatan dan Aceh Tenggara*: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.
- Rist, Manfred
- 2010 The Economic Development of Aceh since 1945, *Aceh: History, Politics and Culture*, Graf, Arndt, Susanne Schröter and Edwin Wieringa (ed.): Institute of Southeast Asian Studies, Singapore:pp.99-119.
- Smith, Holly S.
- 1997 *Aceh, Art and Culture*: Oxford University Press.
- Sujitno, H. Sutedjo & Achmad, H. Mashud
- 1995 *Aceh: Masa Lalu, Kini dan Masa Depan* (Aceh: Past, Present and Future): Kantor Sekretariat Gubernur KDH Provinsi Daerah Istimewa Aceh.
- Yunus, M.Ahmad & Tatiek Kartikasari (ed.)
- 1985/1986 *Pakaian Adat Tradisional Daerah Propinsi Daerah Istimewa Aceh* : Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan, Direktorat Sejarah dan Nilai Tradisional, Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah.

Ⅲ アチェの女性のくらしと衣服・布づくり

1. はじめに

本章では、衣服・布づくりが、アチェの女性たちにとってどのような意味をもつのかについて考える。考察のために用いる資料は、先述したように、2009年度～2011年度に行ったアチェ州各地でのフィールド調査において、36軒の刺繍、パティック、織り工房などの服飾工芸工房と、州都バンダ・アチェにある16軒のファッション・デザイナーのブティック、仕立屋および裁縫教室の服飾関連業との、計52の施設でのインタビューで得たものである(表1,2参照)。

次に、まず、各地でのインタビューから、1.衣服・布づくりが生活の支えとなっていることについて、(1)生計の手段、(2)生活のケア、(3)コンフリクト・津波被災から救う、という3つの視点に分けてとらえ、次いで2.衣服・布づくりの中央政治・地方行政・政策およびDEKRANASとのかかわりについて考えてみたい。

2. 各地でのインタビューからみる女性たちのくらしと衣服・布づくり

(1) 生計の手段

アチェ州各地での服飾工芸品生産のしかたをみると、工房経営者が1集団(1kelompok)のディレクター(pengusaha プングサハ)となり、近辺に住む職人(pengrajin プンラジン)の家庭婦人たちを管理し、彼女らは、育児・家事の合間に内職し、プングサハはできたものを集めて市場などに出して売り、売り上げから工賃をプンラジンに渡す方法で、服飾工芸品生産が行われている。

服飾工芸品の生産・流通のしくみを整え、管理するのはDEKRANASである。各地域に住む女性による組織PKK(Pemberdayaan Kesejahteraan Keluarga 家族福祉運動)から選出された家庭婦人たちを、DEKRANASが服飾工芸教室を開設して教育し、彼女らが各家庭でDEKRANASやプングサハから借り受けたミシンを使って内職する。こうして服飾工芸品生産は女性たちの生計の手段となり、生活を支えるものとなっている。そして内職の方法で、生産性を高めながら、より質の良いものをつくり販売する工夫が各地でなされている。次に、その例を5つあげてみたい。

アチェ・バラット県の県庁所在地ムラボに住むEvi Usmanidar(1980・アチェ人女性)は、伝統的な服飾工芸品販売店を経営し、服飾工芸品の生産も行っている。特にムラボでかつてから盛んに行われていた金糸刺繍カサブ生産のディレクターとして、近辺の女性プンラジン40人ほどに仕事を依頼している。昔は自宅に集まって仕事をしてきたが、現在では、プンラジンたちは各家でそれぞれ仕事をしているという。人々の考え方も時間や作業の効率を重視するようになって変化し、家事や育児の合間に自分のペースでできる作業形態が好まれるようになったためであるという。ムラボは津波の被害が大きかったといい、ほとんどの家が津波に押し流され、家族を亡くした被災者の生活支

援が行政の大きな課題であった。Usmanidar の店から 10 キロメートルほど離れたブンダ・スチ (Benda Suci) の街には、こういったムラボの津波被災者支援のために、中国政府が建設した家が 1000 軒ほど立ち並ぶ。ここには、Usmanidar から糸や布などの手芸材料を預かってカサブをする女性プンラジンが 10 人ほど住んでいて、この仕事が生計を援助しているという。彼女らの家には、それぞれテレビ、冷蔵庫などの電気製品があり、こざっぱりした部屋の中で、カサブの作業が行われていた。

アチェ東部に位置するアチェ・タミアン県ランサ (Langsa) (写真 25) に住む Cut Huzaimah (1945- アチェ人女性) は、1993 年からアチェ人の伝統的婚礼衣裳や刺繍した座布団カバーなどの服飾工芸品生産を管理し、販売する店を経営している。周辺に住む 12 人のプンラジンが、育児・家事の合間にミシン刺繍を行っている。この店にあるミシン 6 台は、ユニセフの援助によるものである。Huzaimah は、1980 年代、どうしたら縫製の技術を高くして、優れたデザインで質の良いものができるのかを考え、内職の方法を工夫したという。当時、ランサの東に位置する大都市メダンのプロモ通りに住んでいた、商才があることで定評のあるパダン (Padang) 出身のミナンカバウ (Minangkabau) 人のミシン刺繍の生産方法を調べ、質の良いものを多く生産するには、子どもも含めて、家族がこまめに空き時間に内職することであると考えたという。そしてその方法を「システム・パダン (Sistem Padang)」と名付け、プンラジンの仕事のしかたに取り入れてきたという。こうして生産した服飾工芸品を、Huzaimah は、県 DEKRANAS や県行政府の支援を受けて、県内中心に販路を設けて販売してきた。

古くから服飾工芸が盛んに行われてきたピディ県ガロット村に住む Wathania Usman (1959- アチェ人女性) は、服飾工芸の共同組合 KOPERASI をつくり、プングサハとして、近辺に住む 50 人のプンラジンの仕事を管理している。この KOPERASI は、カサブとボルディールの職人を管理しているが、ここガロット村では、古くからカサブ (写真 16)、ボルディールのほか、アチェ人の男性用盛装帽子コピア・ムクトゥブづくりが行われてきた (写真 17)、服飾工芸の伝統のある村である。その服飾工芸生産の歴史を守るために、県 DEKRANAS から技術教育の援助を受けたり、政府工業局から製品の質を上げるアドバイスを受けたり、ピディ県の県庁所在地シグリの街にある県 DEKRANAS のアンテナ・ショップに製品を展示し、販売促進の工夫をしてきた。それらの活動によって、ガロット村の服飾工芸品生産は、GAM コンフリクトや津波の被災による混乱期にも途絶えることなく継続して行われ、現在までその生産は続いている。

東部海岸地方のアチェ・タミアン県スルワイに住む Mariani (1959- タミアン人女性) は、2008 年から県 DEKRANAS の支援を受けて自宅付近にソケット織工房を設け、周辺の女性に織りを教えている。現在、2 人が学び、8 人が仕事として織りをしている。1 枚織ると 100.000 ルピアの収入があり、ここでは、収入が得られるので織りを学びたいという女性が多いという。このように現金収入の途の乏しいスルワイでは、織りにたずさわることが女性たちにとって魅力的であると感じられるようになっている。2011 年 5 月には、州 DEKRANAS の協力を得て、バンダ・アチェから手本となる質の高いソケットを借り受けて、工房の隣で展示し、近辺の女性たちに見てもらい、この地区の女性の織り技術の向上、また織り従事者の増加を目指しているという。

バンダ・アチェに近いピディ・ジャヤ県トレガデンに住む Nazaria (1968- アチェ人

女性)は、ティカール編みの生産を管理し、地域のチューター的存在である。津波後には、「スク・アチェ (Suku Atjeh アチェ民族)」というティカール細工の共同組合による店の運営にたずさわってきた。この村では、あちこちに自生する棕櫚を使って、100人ほどの女性がティカール編みを行っている (写真 22)。プングサハである Nazaria は、ティカール編みの先生をジョグジャカルタから招聘し、伝統的な敷物の形態からバッグやティッシュ・ボックスなどにデザイン化した製品を考案してきた。デザイン化で、ジャカルタやジョグジャカルタでも流通可能な製品を生み出すことになり、広く販路を広げたことで、津波前よりも多く販売することができ、村の人々の家計を豊かにすることにつながってきたという。ここでは、エビの養殖が盛んであり、主な生業であるが、女性が家事や育児の合間にたずさわられるティカール編みは、良い収入源となり、津波後の生活の改善に大変役立ってきたという。

以上のように、各地のプングサハによって、服飾工芸品の生産方法・技術・デザインの向上、組合組織の運営と販路の拡大が工夫されてきた。このような事例は、他にもアチェ州各地で見られる。このことから、服飾工芸は、各家庭の女性が育児や家事の合間に行うことができ、生計を助け、また支えるものとして適していると、アチェの人々に考えられていることがわかる。

(2) 生活のケア

服飾工芸品生産にかかわるプングサハとプンラジンとの間には、製品製作にかかわる手芸材料および完成した製品と賃金のやりとりだけではなく、「ソウシャル (インドネシア語で sosial、社会貢献的)」な関係の存在が認められる。

先述したランサの Huzaimah は、地元の労働局支援のもとで、近所に住む 12 人の女性職人が病気になると薬を与えたりして、健康的な生活を送れるようにケアしている。また貧しく生活費がなくなると訪ねてくる女性たちに一時的に生活費を援助し、経済的に支援したりもする。さらにイスラームの教義をメッカ詣出する人に教えるという信仰生活のケアも行っている。このようなプンラジンたちの生活全般をケアする Huzaimah は、地元の女性たちのチューター的存在であり、大変信望の厚い人物である。彼女のような地域の指導者の人物が服飾工芸生産にかかわる例を、アチェ州各地で見ることができる。

アチェ・タミアン県スクラック・カナン村に住む Siti Chadiyah (1970- タミアン人女性) は、子どもの頃からミシン刺繍、衣服の縫製が好きで、現在、ボルディールのプングサハの仕事をしている。以前、イスラーム教の先生、幼稚園の先生を経験したことがある。こうした彼女の、地域の人々や子ども達とのかかわりの中での指導者的経験が、そのまま現在の服飾工芸生産でも生かされているといえる。彼女の場合も、プンラジンと服飾工芸生産でかかわるだけでなく、プンラジンの生活のケアも行い、地域のチューター存在になっているのである。

アチェ州の中央に位置するバリサン山脈の南端の小さな町、アチェ・トゥンガラ県クタチャネに住む Salmawati (1964- アラス人女性) も、ティカール編みの共同組合を運営している。彼女も、プンラジンが、生活費が足りなくて困っている場合、金銭面での生活支援をしてきたといい、県の行政府とともにプンラジンの生活を支えてきたとい

える。彼女のティカール細工のデザインは、そのまま村のブンラジンたちに伝えられ、あちこちの家の庭や道ばたで、子どもを遊ばせながらそのデザインにしたがった作業をする母親たちの姿をみることができる（写真 29）。Salmawati は、村内を時々歩いて、気軽に声をかけ、世間話をしながら作業の様子を見回っている。

ここであげたいいくつかの例のように、プングサハは、ブンラジンの生活全般のケアにもかかわっていることが明らかである。プングサハはブンラジンの健康面を管理し、経済面の援助、また信仰生活を支えるといった、仕事と家事・育児のバランスをとりながら生活を営むブンラジン女性たちのチューターおよび母親的存在を果たしていることが、アチェの服飾工芸品生産のしかたの特徴としてあげられる。

(3)コンフリクト・津波被災から救う

次に GAM コンフリクト、津波被災という精神的に負荷を負った人々、特に女性にとって、服飾工芸はどのように位置づけられ、機能してきたのかについて事例をあげて考えてみたい。

まず服飾工芸と GAM コンフリクト犠牲者とのかかわりについて考える。アチェ州での服飾工芸の振興は、先述したように、1986～1993 年に在職した Ibrahim Hasan 州知事時代に行われた。インタビューした Siti Maryam (1940- アチェ人女性) は、当時の州 DEKRANAS の長として、アチェ各地の服飾工芸の現状を調査し、他の仕事をしながら刺繍をしたり、死者が出ると織りを休んだりしてなかなかはかどらない仕事のしかたを改善して、服飾工芸をアチェ州全体の一つの産業として発展させるためにはどうしたらよいかを考えたという。1970 年代半ば、ピディ県の山中から始まった GAM の活動によるコンフリクトは、当時、アチェ州のほぼ全域に広がり、各地で大変激しい戦闘があったという。Maryam は、GAM の兵士として殺害されたり、国軍との紛争に巻き込まれたりして夫を亡くした未亡人を調査し、子どもを養って生活しなければならない彼女らが、ボルディール、織りをずっと続けられるように、バンダ・アチェに織工房を設け、生産性の高い高機を導入するなどして工房の設備を整えたという。Siti Maryam は、各地を調査して歩いた当時にふり帰り、あちこちの地方に行って調べたことで、人々が何を必要としているのかについて知ることができ、彼女はそれを大変幸せに感じたという。そして、この時がおそらく自分の人生で最も楽しい時間であったと語った。彼女のこの語りから、服飾工芸が、コンフリクトの犠牲者の生計の手段となったことと同時に、服飾工芸を推進する女性にとっても、楽しみ・生き甲斐となってきたことがわかる。

次に服飾工芸と津波被災者とのかかわりについて考えてみたい。津波後、DEKRANAS や行政、NGO、民間の服飾工芸教室・洋裁教室開催によって、被災者の服飾工芸教育の支援が行われてきた。

バンダ・アチェの中心地で、民間の洋裁学校「プトゥリ・カスタム (Putri Kustum)」を運営する校長 Ainal Madia (1945- アチェ人女性) は、1975 年にメダンで中国人から裁縫を学んだという。バンダ・アチェに帰って洋裁教室を開くと、学びたいという人が多く集まったので、1980 年代には仕事を少しずつ広げていったという。現在、洋裁のほか、ボルディールの教室もあり、どちらの教室も大変人気であるという。建物は津

波で浸水の被害を受け、ミシンなどの設備・機器はすべて押し流されてしまった。しかし津波後、NGO のスイス・コンテックがミシン、机などのハード面の援助をしてくれた。また BRR が洋裁教室開講の費用を出してくれたという。これらの復興支援が終了した 2009 年 12 月以後、現在も、州の職能向上局 (Dinas Tenaga Kerja dan Mobilitas Penduduk Aceh) が支援を継続して、1 カ月でスカート、上衣、ズボンを制作するコースが開講され、この講座は地元の女性たちに人気があるという。洋裁を学んだことのない女性を対象に、州行政府が一部授業料を負担し、受講料は一人 45.000 ルピアで、裁縫道具と生地が提供されるとあって、いつも教室は満員であるという。

また日本赤十字社とインドネシア赤十字社との共同の洋裁教室は、津波の被害の大きかったバンダ・アチェ北岸の街ウレリー (Ulee Lhee) で 2009 年末まで行われていた。筆者が訪問した 2009 年 12 月には、プトゥリ・カスタムの校長 Madia が講師として洋裁の指導をしていた。受講料は無料で、生地も無償で提供され、近所の女性たちには大変好評である。インタビューした受講者は皆、津波の被災者で、夫や子どもを亡くした女性たちであった。皆洋裁が好きで、それを学んで技術を身につけることで、将来、縫製の仕事をしたいと語った。

アチェ州の DEKRANAS は、津波で被災した女性たちに服飾工芸教室を設けるなどして職業訓練を行い、彼女たちの生活の営みを支援してきた。津波後の教室を主宰してきた副州知事夫人で州 DEKRANAS の長である Darmawati A, Gani (1962- アチェ人女性) は、インタビューで、「服飾工芸が津波でトラウマに陥った人々の心を助けてきた。DEKRANAS がトラウマをうまくコントロールして、服飾工芸は人々の楽しみとなってきた」と語った。

民間の織工房でも同様の話を聞くことができた。先述したアチェ・ブサール県ミレク・タマン村でソケット織工房を経営する Jasmani (40 歳代 アチェ人女性) は、津波後、織りに興味をもって勉強しようとする人が多くなったという。津波で被災した彼女によれば、織りは女性が家族の生活を支えるために家でできる仕事で、織りが彼女の心の傷を癒してくれたという。織る時は楽しいので、彼女はいろいろなつらいことを忘れることができたと言った。

またインタビューで、服飾工芸が、津波被災後、自己を立て直すのに有効であったという語りの例がある。Cut Zunyka Zlkarnain (1978- アチェ人女性) は、バンダ・アチェ中心部に「アニラ・パイエット (Anira Payet)」というブティックをもつファッション・デザイナーで、豪華なビーズワークをほどこす作風に特徴がある。彼女は、津波被災後、多くの人々が亡くなったことをつらく思い、彼女自身、精神的に余裕がなくなり、起き上がれない気がしたという。しかし好きなアクセサリをデザインしてつくことで、勇気をもつことができたと言った。彼女がつくったアクセサリを見たインドネシアの NGO メルシー・コープは、制作を資金的に援助し、そのことで、彼女は自身の心を大変楽しく保つことができたと言った。そして 2006 年には、津波後に会社を立て直したり仕事を活動的にした女性に贈られる賞を受賞した。

このように、服飾工芸生産や振興にたずさわる人々に行ったインタビューから、服飾工芸が、たずさわる人々の楽しみ、生き甲斐となって精神的負荷をやわらげる働きをしていることは明らかである。ここで、2009 年 12 月に、調査票を使ってアチェ州全域で

服飾工芸にたずさわる 14 人を対象にインタビューした結果についても併せて考えてみたい。インタビューからは、津波後、生きる支えとなったのは、縫う仕事であり、それは収入につながったと同時に、縫うことは「心に平穏をもたらし、心を落ち着かせてくれる」「心を楽しくしてくれる (Menyunangkan hati)」、服飾工芸は「心の薬となった (Kegiatan ini menjadi pengobatan hati)」ということばが聞かれた。これらのことばからも、服飾工芸は、生活の糧となって生活を改善し、たずさわる人の心の支え、生き甲斐、楽しみとなってきたことが明らかである。したがって服飾工芸は、被災した人々の生活・心をケアする役割を果たし、人々の自立を支援するものとなってきたといえる。服飾工芸は、「心の薬」と表現されているように、被災した人々の心のケアの役割を期待され、各組織の自立支援プログラムに取り入れられ、また実際にその役割を果たしたと、アチェの人々に評価されているといえる。

3. 衣服・布づくりの中央政治・地方行政・政策および DEKRANAS とのかかわり

アチェの人々の自立を支援してきた衣服・布づくりは、行政によって災害復興の手段として用いられてきたといえるが、各地でのインタビューで、伝統文化としての服飾工芸を再認識し、その保存の重要性について述べる人の例が目立った。そこで、まずそれらの例をあげ、それが個人の意見である場合もあるが、中央および地方の政策によって導かれたものであることを、中央政治・地方行政・政策・DEKRANAS と服飾工芸とのかかわりをみながら考えてみたい。

(1) 伝統文化としての服飾工芸の再認識

まず、今日、アチェ州の代表的な産品となっているボルディールのかばん誕生の経緯について考えてみたい。これについては、第 II 章で述べたが、ここではもう少し詳しくみてみたい。

本共同研究者である Herawati binti Muhammad Zain (1948- アチェ人女性) は、アチェ・ブサール県知事夫人で県 DEKRANAS 長であった 1986 年に、中央山地民のガヨ人の刺繍について調査し、ガヨ人の刺繍をかばんにほどこして発展させようとしたという。しかし当時、アチェ・ブサールに住むアチェ人たちは、それはガヨ人のモチーフだといって反対したという。当時の県知事であった Herawati の夫 Sanusi Wahab は、経営のセンスをもち、「なぜそのような印象をもつのか。われわれはつくればよい。重要なのは収入になることだ」と答えたという。そこで最初、ガヨ人のモチーフを借用したが、それらを現代化し、縫製の方法も独自に考えるようになった。このようにアチェ人とは異なる民族ガヨ人の伝統的文様を用いることで、アチェ州全体を表象するデザインが創作されることになり、このことが、アチェの特徴ある刺繍バッグが誕生するきっかけとなった。現在は、アチェ・ブサール県のクタ・マラカに州 DEKRANAS がバッグ工房を設け、定期的にモデルチェンジしたバッグがつくられ、アチェ州を表象するものとして州内外で評価され、ジャカルタをはじめとする都市で流通している (写真 11)。

また 1986 年に当時の州知事 Ibrahim Hasan によって創始されたアチェのバティックは、2006 年以降、BRR の援助を受けて州 DEKRANAS が振興し、「アチェのバティックの家 (Rumoh Batek Atjeh)」というブランド名がつけられ、生産が整えられてき

た。そして 150 種類ほどのアチェを象徴する文様版型がつくられ、今日、アチェの特徴ある生産品となっている。ジャワ・バティックとの違いをどのように出すのかを、主催する州 DEKRANAS が工房とともに考えた結果、アチェのバティックの特徴を、充填文様のない無地の空間があることとした。先にみたボルディールのように、アチェの特徴ある産品としてのバティックをつくり出す工夫がなされてきたのである。

以上のように、行政府や州および各県の DEKRANAS が、アチェの伝統的民族文化をあらわすものとして特徴ある服飾工芸品のデザインをさらに洗練させ、生産性を高める工夫をしてきた。この背景には、州 DEKRANAS の秘書 Netty Murhani Murp(1966-アチェ人女性)によれば、スハルト元大統領時代、インドネシア全国で各民族文化が振興されたことがある。その振興には、国民に、各民族および自民族の文化に愛着を感じさせるようにする目的と、外国人に、各民族文化をインドネシアの国の文化として示す目的があったという。この政府の方針は、基本的に今日まで受け継がれ、2011 年の州 DEKRANAS の統一テーマは、地方、村の服飾工芸を振興すること、住民が服飾工芸を続けていけるように振興することであるという。

こういった行政府や DEKRANAS の服飾工芸振興事業とともに、民間の工房経営者にも、自らの伝統的民族文化の重要性について認識する例がみられる。バンダ・アチェの住宅街で伝統衣裳制作・販売の店舗と工房を経営する Cut Ainal Marziah (1950-アチェ人女性) は、服飾工芸の盛んなガロット村出身で、伝統的な盛装の金糸刺繍をデザインして施す仕事をしている。彼女は、昔、祖母や母親が刺繍するのを見てそのしかたを学んだという。ガロットでの仕事の経験を生かして、1990 年にバンダ・アチェに家族で移り住み、現在、7人の女性職人を擁して、金糸刺繍や縫製の仕事をしている。彼女が伝統的な金糸刺繍の文様をもとに、デザインを考えてハترون紙に鉛筆で文様を描き、布地に写すと、それを職人女性がミシン刺繍し、その布を伝統衣裳に仕立てていく。昔はアチェの盛装はあちこちでみられたが、今や婚礼衣裳として用いられるだけになってしまったので、Marziah はそれを大変残念に思い、店の名を「伝統に帰れ (Woe Bak Adat)」としたという。彼女は、こうして服飾工芸生産にたずさわることで、アチェ人の失われようとしている伝統文化を守ることができると考えているのである。

つくり手が伝統文化を保存しなければならないという使命感をもって服飾工芸生産にたずさわる例がある。Jasmani (40 歳代 アチェ人女性) は、1990 年代に、アチェ・ブサール県のシーム村にあるソンケット織りで有名な工房ニャク・ムで、緯糸紋織の基本を勉強した後、1年間、アチェの伝統的なモチーフにどのようなものがあるのかを文献などで調べて独学し、さらに色を変えたりして工夫して、1997 年から自身の工房を夫とともに経営してきた。織工房を始めた動機は、ソンケット織りが好きで、アチェの伝統的な文化だからであるという。インタビューでは、ソンケットを愛していて、その文化がなくなってしまうのはいけない、守りたいと思って織りを始めたと言った。

これらの例のように、アチェの民族的伝統を守る使命を感じて服飾工芸にそれを表現する人々がいる一方で、民族的アイデンティティを服飾工芸に表現したくても表せない場合もある。アチェ・トゥンガラ県クタチャネでティカール編みのプングサハを務める Salmawati (1964-アラス人女性) は、ティカール編みのポーチをクタチャネの産品として市場に出したいが、それらの産品は、実際には、市場近くに住む異民族カロ・バタ

ク人のものとして、近郊のブラスタギの街で売られたり、観光地で有名なバリ島の土産物市場に出されて、インドネシア土産として売られているという。本当は、クタチャネに住むアラス人がつくったものなので、アラスの文化をあらゆるオリジナル商品として出したいが、市場を確保するためには、生産者の民族性を消して売るしかないという。この例から、逆に、服飾工芸が、民族的アイデンティティを表出するものとして、つくり手である人々に受けとられていることがわかる。こうして、アチェの服飾工芸は、民族的アイデンティティ・伝統文化の表象・表現の手段として、アチェの人々の中で機能しているといえる。

また、つくり手が自らの民族文化を表現する、あるいは表現できないで服飾工芸品生産にたずさわる例の他に、自らが住む街が、異民族が集住する街であり、行政的視点をもって、その街のデザインを考案する例がある。先述した Cut Huzaimah は、アチェ人とタミアン人の混住するランサの街を象徴する、アチェ人の伝統的文様である花と、タミアン人の伝統的文様である蔓草の文様を組み合わせた文様を考案し、その文様を、金糸刺繍やボルディールで伝統衣裳やクッション・カバーにほどこしてきた。そのランサの文様を創作してきた功績によって、Huzaimah は、2009 年にランサ市から表彰を受けたという。

また行政による同様の例がある。アチェ・スラタン県には、3つの民族、すなわちアチェ人、アヌク・ジャメー人、クルエト人が混住する。県庁所在地であるタバクトゥアンの行政は、アチェ・スラタン県の生業として、バティックを創始しようと計画し、街の中心部に工房を設け、アチェ・スラタン県を象徴する文様を考案し、その版型をバティックの本場ジョグジャカルタに注文している。その県を象徴する文様とは、アチェ人をあらゆる芳香草 (apacuri)、アヌク・ジャメー人を象徴するとうがらしの葉 (daun cabay)、クルエト人を象徴するゴムの木 (buah para) を表す3つの文様を組み合わせた抽象文様である。

これら2つの例は、1つの地域に多様な民族が混住しながらお互いを尊重して共生する様子、また共生する将来の生活への期待を、住民および行政があらわした事例であるといえよう。

(2)衣服・布づくりの中央政治・地方行政・政策および DEKRANAS とのかかわり

スハルト元大統領の新秩序体制の時代は、女性とジェンダーに関してシステムティックな政策化が行われた時代であった。スハルトは、社会・政策の安定と国の発展を築くために、家族を、社会で最も基本的で重要な構成単位であると位置づけ、女性の家庭内役割を重視した。そして新秩序体制が、女性の家庭での貢献と同時に、女性の社会参加をうながしたこと [Brenner 2005:95-96]が、インドネシア国内での服飾工芸品生産振興につながっていったと考えられる。またこの服飾工芸品生産振興は、中央政府による、各地の民族文化、伝統文化、地方文化の尊重の方針と一致し、そのような民族文化の一構成要素として、人が着用したり用いたりして視覚的に文化を表象・理解しやすい服飾工芸品があつかわれたといえる。こうしてスハルト時代の始まりの時期から服飾工芸が振興され、インドネシア全体で P 2 WKSS という家庭および地域での女性の地位役割を確立するための鑑定プログラムが設けられ、各地域が競って優れた服飾工芸生産を行

い、優秀者の表彰が行われた。こういった地域での活動と並行して、1981年には、国・州・県の行政組織と並行して設けられた女性による全国組織 DEKRANAS が、特に女性による服飾工芸品生産振興の役割を果たし、アチェでも同様に服飾工芸が振興されていった。

アチェでは、このような時代的背景の流れのもとで、1950年代後半のスカルノ時代には、アチェの伝統文化が尊重され、アチェ文化祭 PKA が開催されたり、スハルト時代の1980年代には、アチェの服飾工芸が行政による地方文化記録プロジェクトの対象になり、数年かけて調査され、シンポジウムや調査報告書の刊行が行われてきた。アチェ・タミアン県で聞き取ったように、スハルト時代の始まりの時期である1967年に、アチェ州知事のもとで、ボルディールが振興の対象になり、優秀者が表彰されていたことは興味深い。アチェ州で画期的に服飾工芸品が振興されたのは、1986年から1993年まで在職した Ibrahim Hasan 時代である。その夫人で当時の州 DEKRANAS 長を務めた Siti Maryam は、アチェの服飾工芸を振興するための活動を積極的に行った。アチェ州の各地に出向いて服飾工芸品生産の現状について調査したり、染織布を衣服にデザインするために、ジャカルタの現代モードを調べ、実際にジャカルタから多くのファッション・デザイナーをアチェに招聘したという。そうして当時のアチェ・ブサール県 DEKRANAS 長、Herawati らの援助を得て、アチェのモチーフ、ボルディール、ソンケットを発展させたいと思い、州 DEKRANAS の活動をしたという。彼女は、アチェが大きなポテンシャルをもっていると考え、服飾工芸のデザインの面で、アチェを他の地域とは違うようにしたかったという。州知事である夫は、当時、「君はソンケット、ボルディールなどのアチェの服飾工芸を発展させなければならない」と言い、夫にそのようなスタートを任されたので、彼女は調査し、ジャカルタからデザイナーを呼んでデザインの改善について相談した。彼らは多くの経験をもってアチェを見て、その特徴をとりあげてくれたという。かつては、老人だけが織りをしていて、ボルディールや織りの仕事は、他の仕事をしながらであったり、亡くなった人がいると織らなくなったりして、時間を気にせずに行われ、生産がはかどらなかつたという。そこで彼女は、若者も織り生産性を高めるにはどうしたらよいかを調査した。さらにアチェの仕事を調べるだけでなく、ジャカルタでアチェの服飾工芸の展覧会を行い、またアメリカでも1991年に展覧会を行った。3回目の PKA の時に、夫はソンケットを発展させようとし、バンダ・アチェのムラクサに資金を集めて服飾工芸センターをつくり、作業効率のよい高機を装備して、織布の生産性を高める工夫をした。そしてどの地域も特徴あるモチーフをそれぞれにもっていたので、彼女は、それらをもとにしたアチェのボルディールの衣服がいつか市場で販売されるようになることを夢見ていた。しかし今では、それは実現していると、彼女は語った。彼女がアチェにいた時、各地を訪ね、人々が必要なものを知ることができたことを大変幸せに感じたといい、おそらく自分の人生の中で、それが最も楽しい時期だったと思うと語った。

Siti Maryam と当時、共にボルディール振興の活動をした Herawati は、彼女にとって、服飾工芸は趣味であり、発展させることは楽しみであったと語った。どのような服飾工芸がアチェにあるのかを調べ、良いものを探し、市場で売れるようにした。服飾工芸の得意な人を呼び、ボルディール、またそのかばんなどいろいろな種類のものを「ア

チェの工芸品 (Kerajinan Aceh)」としてとりあげた。当初、ボルディールのかばんは、ガヨ人による粗末なものばかりだったので、次第に考案したデザインのサンプルをつくるようになった。また州知事夫人とともに、ボルディールの衣服をプロモートしようと、儀式に出る時には、必ずボルディールの衣服を着用した。いつもどこにでもそれを着て行くと、会う人は皆そのデザインを楽しんでくれたという。こうして活動する Herawati 自身、アチェの服飾工芸を开花させることが楽しみであったという。

1980年代当時のボルディール振興について、州 DEKRANAS がバンダ・アチェで企画した教室に出席して、受講後、出身地にもどってボルディール教室を開催し、地域の女性たちにボルディールを教えてきた例がある。当時、ボルディールは大変人気で、学びたいという人が多く集まったという。先述した Nurjana は、バンダ・アチェでの講習後、地元モンタシで教室を開き、そこで学んだ Crjudan (1960・アチェ人女性) は、現在、自身の工房を設け、地元の女性職人数名を擁してボルディールをつくっている。こうして、モンタシは、現在、盛んな水田耕作と並行して行われるボルディールの村として知られている。

このように、1980年代半ばからアチェでは特にバッグ生産が振興され、バンダ・アチェ郊外のモンタシでボルディールが行われてきた。しかしこれらのアチェの服飾工芸は、特に津波後に振興されるようになった。行政、BRR、日本赤十字社、カナダ赤十字社などの災害復興支援プログラムに、女性の自立をうながすものとして服飾工芸が含められてきたのである。そのような社会環境のもとで、服飾工芸は、生計の手段として、また服飾工芸品生産を通して、服飾工芸品生産にたずさわる人々の健康面や信仰生活のケアのような、生活そのものを擁護する役割も担ってきた。コンフリクトの犠牲者、また津波被災者にとって、服飾工芸は楽しみであり、生き甲斐となって、精神的負荷を改善する役割を担ってきたと考えられる。州 DEKRANAS の秘書で州政府の手工芸貿易振興にたずさわる Netty Murhani Murp が語るように、服飾工芸振興にたずさわる側にとっても、DEKRANAS の活動はソーシャルで直接社会とかわることができ、ネットワークによって、生産者同士、また生産者と振興する側とが互いに援助しあうことができ、それが楽しみであるという。もし一人であれば社会に多くの援助をすることができないが、DEKRANAS に入っていれば、援助できることが楽しみであるという。

以上のように、衣服・布づくりは、たずさわる人々にとって、生計の手段であると同時に、楽しみ・生き甲斐となって、生活改善を導く力をもつものであるといえる。

また服飾工芸は、民族性をあらわしやすく、振興する側、生産にたずさわる人々にとっても、伝統的民族文化を守る使命が認識され、各地で民族的アイデンティティを表象するものとしてあつかわれてきたことは明らかである。このことは、地方行政、DEKRANAS および中央政府の政策が、アチェの人々の意識に作用した結果、服飾工芸が民族的アイデンティティを表象するものと人々に認識され、各地で再興・形成されてきたと言い換えることができる。

文献

Brenner, Suzanne A.

- 2005 Islam and Gender Politics in Late New Order Indonesia, *Spirited Politics: Religion and Public Life in Contemporary Southeast Asia*, Willford, Andrew C. and George, Kenneth M. (ed.), Studies on Southeast Asia, No.38:pp.93-118.

Hasan, Ibrahim

- 2003 *Namaku Ibrahim Hasan; Menebah Tantangan Zaman*, Jakarta: Yayasan Malem Putra.

IV ファッション・イスラーム・伝統文化

1. 服飾をめぐる宗教性と伝統性

—ファッションを求めるイスラーム教徒アチェ人の場合—

(1) はじめに

宗教性と服飾との関係は、人々が自ら信仰する宗教の教えに従い、許される衣服を許される着用のしかたで身につける人々の存在で、明確にされてきた。そのため、着ている衣服に変化がみられず、ある形式を長年保持し続けている人たちに対して、信仰深い敬虔な人々、あるいはその宗教の原理に固執する人々などとみなす見方がこれまでとられてきた。しかし、敬虔で原理主義的な宗教的態度をもっている人たちとみなされている場合においても、近年のグローバル経済の浸透によって、着用のしかたを守りながら、服飾として「ファッション化」させることに興味をもつ人々が増えていること[Brenner 1996, Nagata 1995, Smith-Hefner 2007]、あるいは、社会経済の現代化過程で、宗教的な教えの旧弊さや因習さから逃れた人々の子孫が、かつての形式的なスタイルを「ファッション」の一つとして再び身につける動きが生じるようになったこと[Jones 2007・2010]、が新たな検討対象になってきた。こうした動きは、自らの身体性を自らの判断で操作すること、自らの志向性を軸にすること、ファッション先導者がモデル的に提唱するスタイルを参考にすること、などを通して、これまで形成された境界は無理なく越えてしまう、いわば個の世界の膨張現象が支えていると考えられる。宗教的教えの中で個人の欲望は消滅させる、昇華させる、超越的なものと融合させることで、あるいは許諾を得ることで、問題とされてきたのに対して、近年の動きが示すのは、個人の欲望は宗教的教えと対立せず、両立するもの、あるいは補完するものという考え方の発生である。

こうした見方をとることで、ジャワ島などの都市におけるムスリムの衣服のファッション化の現状を、進展するインドネシアの資本主義社会の脈絡の中でとらえるとすると、信仰とファッションが結びついたアイテムの消費が焦点となる[Jones 2010]。また、ムスリムの衣服に積極的な意味を付与することもつくり出す側の動きとして注目すべき点となる。例えば、デザイナーが、精神的な美 (spiritual beauty) をムスリムの衣服に表現しはじめているのである。信仰に基づいた謙遜と美德を現代的に表現した媒体としての衣服が生み出され、それを人々が消費の対象とするようになったことが指摘されているのである[Jones 2010]。こうした消費とデザイン化と宗教との新たな関連性への注目とは別に、ロンドンに住むムスリム女性が新しい多文化的な都会生活で形成された文脈の中でムスリム・ルックを創り出していることについて考察した Tarlo[2010:17] は、信仰とファッション、伝統と現代、イスラームと西欧という対比で理解するよりも、人々が衣服と創造的で象徴的な関係をもつときに経験することには複雑さがあり、何か

を変える力があるということを理解することの必要性であった。

本研究は、これらの研究で対象とされた、服装が自由でファッション化された社会に暮らすムスリム女性とは対照的に、シャリア・イスラーム (Syariat Islam) によって服装に制限のある生活をしているバンダ・アチェのアチェ人女性たちを対象にとりあげる。彼女らは、公の場で、顔と手掌以外を覆うゆったりしたブサナ・ムスリマ (busana Muslima) ムスリム向けのゆったりした衣服ブサナ・ムスリム busana Muslim の女性用の名称、またはブサナ・イスラミ busana Islami ともいう) の着用が義務づけられているのである (写真5参照)。具体的には、アチェにおいてファッションがどうとらえられているのか、そして、土着の伝統文化を、イスラーム、西洋ファッションとどうかかわるものととらえられているのか、さらに彼女らのファッション観が、宗教性、伝統性とどのように交錯しているのかを検討する。

(2) 調査地の概要

アチェ人の生活や文化についての研究は、20万人を越える犠牲者をもたらした2004年12月のスマトラ島沖地震による災害が起きるまで、アチェにおける長年にわたる対立関係や外国人立ち入り禁止が数年続いたため、限定的にしか行われてこなかった。地理的位置や歴史的資料をもとにすると、この地が9世紀頃すでにイスラーム教の伝来があったと推測され、その伝来経路にあるトルコやインドの文化的影響のみならず、東方からの影響、つまり中国の文化的影響も受けてきたと考えられる。特に17世紀にアチェに栄えた王国は、マレー半島に及ぶ勢力をもつほどであったことが知られている。しかし、オランダとのアチェ戦争が19世紀末から20世紀にかけて長期にわたったため住民生活は疲弊した。それでもアチェ人の自主独立精神は消えずに、その後の分離派運動へと続くことから、その戦争時代の英雄トゥク・ウマル (Teuku Umar) (写真31,32) は、現在でも彼のかぶった帽子 (コピア・ムクトゥブ) とともに、アチェ人の心象世界に生きている。1970年代から1990年代にスハルト政権は分離派に対する制圧を行い、引き続く政権下でも関係改善は進まず、むしろ対立は激化の様相を示した。しかし、この対立も大津波の被災を転機に急速に解決され、アチェは多くの海外支援の場となり復興が進み、現在、アチェの社会と人々の生活はグローバル経済の波の中で変化している (写真1参照)。

アチェは、文化的に一様ではなく、オーストロネシア語族に属する主に5つの異なった文化をもつ人々 (アチェ人、ガヨ人、アラス人、アヌク・ジャマー人、タミアン人) が暮らしてきた。また海岸部の各都市には経済を支える華人も暮らしている。アチェ内の各文化の服飾は、類似性を含みながらも独自性をもっている。

アチェの生活、特に衣服に影響を与える他州にはない特徴として、イスラーム法が公式化されていることがある。イスラーム法の採用は政府が2002年に正式に認め、アチェのイスラーム教徒住民はこのイスラーム法に従わなくてはならない。これは、社会関係やジェンダー関係、そして本章のテーマにかかわる衣服そのもののあり方と着用法に関して、アチェ人に、一般的な日常生活上の規範を与えている。このイスラーム法に従うことは、最近だけのことではなく歴史的にもアチェ人にとって重要な位置を占めてきたので、アチェは宗教性が高く原理的な住民の暮らす地域としてみなす根拠を他の地域

の人々に与えてきた。

(3) アチェの服飾のあり方と現況

アチェの伝統的な服飾について検討した初期の文献[Kartikasari 1986/87:30]に、アチェの伝統文化とイスラーム文化は長い年月を経て融合したことが指摘されている。この融合的な特徴については、アチェの慣習の一つとして服飾に触れた文献[Yunis & Kartikasari 1985/86, Alamsyah 1990, Yayasan Meukuta Alam 1990]の中でも一般的な理解として受け止められていて、アチェ人の生活が古くからシャリア・イスラームに基づいた生活と切り離すことができないものになっていたと考えられてきた。

2002年にインドネシア政府がアチェとの関係改善に譲歩的な態度を示そうとアチェのイスラーム法の公式的採用を認めたことにより、アチェにおいてムスリムの服装の取り締まりが始まり、人々は公の場で、どのような服装でいなければならないのかを明確に知る必要が生じた。そのため州政府は要点を明記したリーフレットを作成し配布している。これには、コーラン(Al-Quaran)にある神Allahが予言者Nabi Muhammad SAWに伝えた条項として次の8つが記されている。①アウラ(aurat 恥部(顔と手掌以外の身体部分))を覆うもの、②穴のあいていないもの、③体の線をあらわさないもの、④男女の異装の禁止、⑤形が特殊でないこと、⑥異教徒の衣服の形でないこと、⑦香水を使ってはいけないこと、⑧媚びたり人気を得たりするためのものでないこと、である。これらに従った、つまりイスラーム法に従った衣服は、女性を苦境から救い、背教を予防し、心を守り神聖に保つものであり、子どもに対する親の模範、家族の自立、イスラーム女性の連携、を生み出すものと述べられている。

アチェの人々の衣生活について検討する上で重要なのは、このイスラームと、イスラーム以前から醸成されてきた民族文化との関係性である。この関係性を具現する好例に、アチェ人の婚礼衣裳がある。新郎新婦が着用する上衣バジェー(bajee)とズボン、シルー(siluweue)、その上から巻く腰布イジャ(ija)は、アチェ人の伝統的な民族文化をあらわすものとして婚礼披露宴で必ず着用されている。さらに、近年の動向にも注意を向ける必要がある。アチェ人女性たちがファッションへの関心を強めているのである。このことは、大津波後の地域内対立の解消を経て被災からの復旧が進む中で、バンダ・アチェ市内にブティックの数が増えてきたことがよく物語っている。国際支援やBRRによる復興が進み、2009年末にそれらが終了することで、市内中心地の主要市場(パサール・アチェ)や中国系住民街(プナユン)の市場の一角に立ち並ぶ仕立屋タイロールの店は活気を取り戻し、かつてより、ファッションやおしゃれ志向に対応するようになっている。

(4) アチェにおける宗教性とファッション

近年、関心の高まるファッションと、アチェ人の宗教性との関係を探るために、まず、衣服づくり、洋裁教育にたずさわる人々の考え方を検討し、次に、アチェ南岸の主要都市ムラボで開催されたブサナ・ムスリマ・セミナーでの言説について検討する。

衣服づくり、洋裁教育にたずさわる人々

アチェのファッション・デザイナーの多くは、アチェの女性たちが概しておしゃれ好

きで、Cut Zunyka Zilkarnain(1978-)は、「アチェ人はフル・カラーが好きなように、アチェのアイデンティティは特別です。ジャカルタはシックなミニマリズムがトレンドなのに対して、アチェでは、すでに金（の装身具）を身につけることが文化としてあるのです。装身具をつけることは、祖先の地位を示すことだったのです」と語った。このような刺繍やアクセサリを好むアチェ人の特徴にインドの影響があると考える Aya Sofiana (1966-) は、「アチェ人はファッションが好きで、インドの様式が好きです。ナチュラルな色は好きではなく、強い色が好きです」と述べた。ここでいう「ファッション（インドネシア語でも fashion）」とは、必ずしも西欧ファッション (fashion Barat) のことを言っているのではなく、グローバル的なものや、国内で現在流行している衣服デザインのことを指している。

近年、アチェ人女性が着るブサナ・ムスリマを、インドネシア国内各地の女性たちが着用するようになっていて、特にアチェ人女性のほとんどが着用している髪を隠して頭を覆うジルバブ (jilbab) が、インドネシア全体でトレンドとなっているという。その背景には、ジルバブを着けることでかわいらしさが増し、より美しく、魅力的であるとみなされるからであるという。一方ジャカルタでトレンドのカフタン・スタイルや袖口の広がったデザインが、アチェでも人気を集めている。デザイナーの Nelly Amin

(1964-) は、「2020年には、インドネシアの衣服のトレンドは、フランスのものでなく、すべてブサナ・ムスリマになっているだろう」と予測した。デザイナーの Syarifah Zuhairah (1979-) (写真4) は、「インドネシア全体がブサナ・ムスリマを好んでいる。それはトレンドでモードである」と語った。実際に、アチェのブサナ・ムスリマはさまざまなデザインに展開されてきていて、インドネシア全体のファッション・トレンドとも合致しているものになっているのである。

服飾デザインへのアチェの人々の関心が高まっていることは、2010年10月に、全国的なインドネシア・ファッション・デザイナー協会 APPMI の支部が、バンダ・アチェの7人のデザイナーによって結成されたことによってもうかがえる。2011年5月にバンダ・アチェの野外展示場で開催されたファッション・ショーは、この支部の主催によるもので「アチェ文化の探求」をテーマに掲げていた。このテーマはアチェの観光事業開発の一つとして企画されたこともあるが、ファッションに関してはかなり遅れをとっていたと考えられてきたアチェが、今後、文化的にもファッションを通して、遅れを取り戻すという意気込みのこもったイベントとなっていた。

こうしたいくつかの背景をもったアチェにおけるファッション・デザインの高揚について、イスラーム法の施行との結びつきがどのようなものか問うと、何人かのデザイナーは、シャリア・イスラームによるブサナ・ムスリマ着用の義務と無関係なものだと述べた。その理由は、衣服の形には制限がなく自由で、衣服の下に、立衿の肌着を着ることでファッションの自由な表現が保たれているからだというのである。

イスラーム法がデザイン上の制限にならないことについては、2つの洋裁専門学校、「カルティニ・カスタム (Kartini Kustum)」と「プトゥリ・カスタム (Putri Kustum)」の女性経営者たちも同様の考えを述べた。洋裁教育をする専門学校や大学では、洋裁の原型についての研究がされていて、作図が容易で体形に合った原型づくりが研究され、彼ら独自につくりあげた原型を使った教育が行われている。洋裁はアチェで人気があり、

女性の職域としての可能性も十分に見込まれる分野となっている。アチェ人が衣服をつくり出す時には、必ずアチェ州だけに存在するシャリア・イスラームの服装制限を満たしたものであるし、アチェの女性たちの嗜好に合ったデザインの衣服となっているからである。アチェでは、ジャカルタなどからの既製服を、アチェ人デザイナーによる衣服より下位にみていて普段着として消費しているだけだからである。

こうしたことから、アチェ人デザイナーの製作態度や考え方のもとには、イスラーム法が、おしゃれに対して寛容であるという解釈があり、人は清潔で美しくあるべきであることをむしろ求めているという解釈があるといえる。デザイナーたちは、西欧のファッションというよりも、ジャカルタや国全体のトレンドを意識の中心に据えて、それを見逃すことをせずに、アチェの人々が好むカラフルな色調、ビーズワークなどによる装飾をほどこしてデザインしているといえる。ここに、アチェ人デザイナーたちが、イスラームとファッションを融合させながらデザインを提案していることの根拠がある。

一方、顧客の希望にしたがって衣服をデザインするタイロール（写真 12 参照）の場合はどうであろうか。その一人である「マンズ・タイロール (Man's Taylor)」店の経営者、Sulaiman (1968・アチェ人男性) の仕事のしかたをみってみる。家族連れが彼の店に自ら購入した布地を持ち込んで、彼の前でカウンターを挟んで、自分のデザインの要望を話して、それを彼は聞きながら、また布地を見ながら、その場でデザインを調整していた。こうした着用者が各自の嗜好に合った衣服をデザイナーとともにつくるという、顧客主導のデザインの実現のしかたがあることがわかる。ここから、アチェ人の中でのデザインに関する関心の高さが示唆される。

一般の人は、どのようにイスラーム法をとらえているのであろうか。20 歳前後の女性に尋ねると賛否の意見を聞くことができた。州立シャー・クアラ大学教育学部で被服学を専攻する女子大学生の一人は、両親の宗教教育が子ども個人の服装観を形成していると考えていて、きちんとした宗教教育を受けた個人ならばイスラーム法に従う衣生活を理解することができると考えていた。一方、反対意見を述べることは容易ではない。イスラーム法違反者はイスラーム警察の取り締まりの対象となり、有罪の場合、むち打ちの刑が科せられることになっているからである。イスラーム法を公に批判することをする者はいない中で、間接的な反対意見を聞くことができた。ある 20 歳代女性が自由におしゃれを楽しみたいと語ってくれた。またデパートの衣料品店の店員が、「皆、心の中では、シャリア・イスラームを好んでいるわけではない。それに従わなくてはならないので、しかたがないと思っている。衣服は個人的なものだと思う」といい、ぴったりの細身のジーンズに T シャツのスタイルが好きだと語った。この点について同様の考えをもつデザイナーがいる。Syarifah Zuhairah は、「実際、衣服は個人的なもので、どれがよいかは個人に任されている」といい、また Syarifah Marinana(1955・)も、「衣服の着用は個人個人に任されている」と語っているのである。このように、ブサナ・ムスリマへの意識、おしゃれ観は、個人によって多様で幅があることは確かである。

ブサナ・ムスリマ・セミナーでの提案と論議

ブサナ・ムスリマに対する考え方の多様な現れ方が明確にみられたのが、次に取り上げる出来事の中でであった。この出来事つまりアチェ州の一つの県の知事の主催によるセミナーが開催された発端は、ファッション好きのアチェの女性たちの間に、近年、グ

ローバルなファッションが浸透し、レギンスの着用や、レースやシフォンなどの透ける素材のブラウスの着用が多くみられるようになったことがあった。こうした服装が多くみられるようになったアチェ南岸のアチェ・バラット県では、知事が、それを女性の服装の乱れと判断して、2009年10月に女性のズボンの着用、ズボン販売の禁止、違反者には対象となるズボンをはさみで切って処分することを検討するという声明を発表するに至った。このことを地元メディア (*Serambi Indonesia* 紙 2009年10月14日付) がとり上げたことが契機になって、県内外で賛否の論議がわき上がった。こうして、県知事が、県庁所在地ムラボで2009年12月に、ブサナ・ムスリマについて考えるセミナーを開催したのである。

このセミナーにおいて、バンダ・アチェに住むイスラーム法学者 M. Jamil Yusuf M. Pd. は、現在の女性の服装について次のように批判する講演を行った。「欲望をあらゆる衣服のモードに従っている。それがグローバルな態度となっている。人間は今、人間社会改革の中のみこまれ、自由な交流、価値、行動も変化している。その変化は、遠い人々とのコミュニケーションを生み出している。衣服は、自由な交流の結果、イスラームではない衣服に近づいている」。また彼は、「今日、精神社会から物質社会へ、獣の欲望があらわされ、現代の衣服がある。人間はグローバルな革命の中で巻き添えになった。人間は食物、ファッション、娯楽の中で変化しているだけでなく、交流・行為も自由になっている。その変化がコミュニケーションを爆発的に進め、コンピュータ、衛生通信、携帯電話が普及し、人間は自由に自己を解放しているが、人間の基本は信仰である」とし、グローバル化しているアチェの現代社会とともに、ファッションを否定し、イスラームの信仰に立ち返るべきであると述べた。

一方、セミナーに参加したムラボ在住の女性 Eka Srimulyani は、「衣服は国際社会に通じるべきものである。学識のあるムスリムとウラマ (Ulama 高僧) とで議論し、女性のズボン禁止について、社会の意見を聞くべきである。西アチェ県の女性は活動的であり、女性の生活について調査すべきである」とし、まず現状と意見を調査してから結論を導くべきであると考え、ズボンの機能性・活動性が仕事着に適していると述べた。

またシャー・クアラ大学教育学部被服学教員 Mukirah は、「衣服デザインの創作は、イスラーム社会において重要であり、イスラーム・モードのデザインは、ユニークでオリジナルで、美しく効果的で、着用目的に有効なもの (mode busana muslim dapat melahirkan pengungkapan yang utik, orisinal, indah, efisien, tepat sasaran, dan tepat guna)」と述べ、イスラームが、人が美しく着ることを肯定していると指摘した。そして、彼女に引率された学生によるファッション・ショーを行い、その中でズボンをはいたモデルを出すなどして、婉曲的にズボン禁止論への反対の意思表示をした。

セミナー最後の質疑応答においても、参加者からのさまざまな意見が述べられた。ある女性参加者は、ズボンが禁止された場合、くるぶしまである丈長のスカートをはかなければならず、そのような場合、自転車に乗ることが不可能になるという意見を述べた。また、男性参加者の一人は、行政は、女性のズボン禁止を議論するより、インフラ整備、福祉の充実をはかるのが急務であると述べた。

このセミナーにおいて結果的にズボン禁止への反対意見が多く出たことから、県知事は、一般女性へのズボン禁止条例の施行を断念し、ゆったりしたズボンで丈長の上衣を

重ねれば着用を許可するという声明を、セミナー終了後に発表した。そしてズボンのかわりに着用するようにとの意図で県知事が用意していた、スカート 7000 着が配布されたのである。2010 年 1 月に、西アチェ県政府は、女性公務員・教員のズボン着用の禁止、違反者は免職となると結論づけ、条例とした。当初検討された一般女性への適用は見合わされたのである。

この一連のズボン禁止論議について、アチェの月刊女性雑誌 *POTRET* の編集者 Tabrani Yunis が雑誌に取り上げ、「女性のズボンはシャリア・イスラームを踏みにじるものではない」(2009, Vol.29:7-9) と述べた。2011 年のインタビューでも、「衣服は個人的なもので、行政が管理するものではない」と語り、行政が女性の衣服を規制することとともに、イスラーム法が法として人々の生活全般を規制することにも疑問を示した。彼は、この雑誌を発行している NGO 組織 Center for Community Development and Education の主要なメンバーとしてアチェの女性の能力開発に尽力している立場から、こうした意見を表明したのである。

このように、本セミナーをめぐる一連の議論から、おしゃれ・ファッション好きの女性を、行政側は否定的にみていて、西欧スタイルやファッションを、シャリア・イスラームを乱すものと否定的にとらえていること、一方、それを、イスラーム法を乱すものとは考えない人たちが存在すること、衣服に関しては宗教の及ぶ範囲というより、個人の領域にあるものとする考え方が存在することが理解できる。

(5)アチェにおける宗教性と伝統性

新しい動向であるファッションとは別に、古来の文化的様式、つまり伝統的服飾(写真 6 参照)と、イスラームとの関係について、検討を進める。ここでは、バンダ・アチェ市近隣のアチェ・ブサール県シブレで観察された婚礼と、バンダ・アチェのファッション・デザイナーおよびタイロールへのインタビューをもとに考える。

シブレでの婚礼

アチェ・ブサール県、シブレ郡 (Kecamatan Sibret)、バイト村 (Kampung Bait) のモスク (Mesjid) で、2010 年 5 月にイスラームにしたがった婚礼儀礼が行われた。新郎・新婦と親族の男性と女性、また部外者の場合、男性のみが、モスク内での儀式に参列できる。儀式では、新郎は、黄色の立衿の上衣とズボン、新婦はクバヤとバティックの腰布カイン (kain) を身につけていた。これは、新郎・新婦とも、インドネシア全土のムスリムに共通した婚礼儀式時の衣裳である。儀式の後、新郎はモスクの外の裏手にあたるところでアチェ人の伝統衣裳バジェーとシルー、イジャに着替え、頭には盛装時の帽子コピア・ムクトゥブ (写真 18) をかぶった。モスクからはバスで参会者は、新婦の実家ある村に移動した。アチェ人は、母系的な親族関係をもつため、新郎が新婦の家に婿入りする習慣に従って、村での婚礼儀式を行うためである。

新婦は、出身の村の自身の家で、やはりバジェーとシルー、イジャの伝統衣裳に着替え、新郎の到着を待つ。新郎は新郎側の親族とともに、新婦の村の入り口で、新婦の親族の祝福を受ける (写真 7)。そして新婦の待つ高床の家に上がり、新郎 (男性) の部屋で、男性親族とともに食事をする。新郎を迎えた新婦は、新婦 (女性) の部屋で女性親族とともに食事をする。それぞれの祝宴の後、新郎が新婦の部屋に移り、二人が同じ

祭壇に座って、祝宴が続き、披露宴は終了する。

こうした一連の儀式での男女の衣服の着分けから、部外者である調査者から判断すると次のような対比構造を提示できる。

モスクでの儀式：村での儀式＝

聖的な聖：俗的な聖＝

ナショナル：ローカル＝

イスラーム：アチェ

このように、伝統を表象する服飾をもっていることで、イスラーム：アチェの対比があると考えられるが、アチェ人に、具体的な服を見ながら質問した時に、彼らが説明するしかたは、アチェはイスラームである、アチェ的なもの（服飾）はイスラームである、という言い方であった。伝統の対比的位置づけが、アチェ人にとって、対比づけになっていないことを示しているのである。

タイロールとファッション・デザイナーの衣服づくり

紳士服仕立専門のタイロール **Abudullah Husen (1944-)** へのインタビューでは、店内を訪問し、実際に陳列してあった婚礼衣裳や他の儀礼用の衣服を見ながら話を聞き、伝統にかかわる例を知ることができた。男性服の場合、婚礼披露宴の新郎の伝統服飾には、金糸刺繍をほどこした黒の立衿・長袖の上衣とシルー（ズボン）が使われる。一方、モスクでの婚礼儀式の衣裳は、白やベージュなどの薄い色に金糸刺繍を施した上衣とズボンであり、インドネシア全域で共通のナショナルな儀礼衣裳と同様のものである。それでは、毎週金曜日のモスクでの礼拝の衣服はどうなっているのだろうか。この場合に着用されるのは、ナショナルな婚礼衣裳のデザインを踏襲しながらも、袖口にカフスをつけたシャツ形式のデザインである。このように、服飾デザインが、イスラームと伝統の間に融合的で中間的な存在を設けている例をみることができる。

このような融合的なつくり方が、バンダ・アチェのファッション・デザイナーたちの場合にもみられるのだろうか。彼らがどのようにアチェの伝統的なものをデザインにとり入れるのかを検討してみる。デザイナーの **Safartiwi Gadeng(1968-)** は、バティックや刺繍を使ってアチェの伝統的なモチーフである「ピントゥ・アチェ（Pintu Aceh アチェの扉）」や「ブンゴン（bungong 花）」の抽象的モチーフを描いていた。彼女は、アチェ人の顧客に向けて、アチェの伝統を強く表現したいと考えていて、特殊で壮麗な（*mewah dan mulia*）デザインを提案することになっているという。しかし、ジャカルタのショーに出品する時は、地方色を強く出さないように工夫して中庸的な表現に努めるといふ。このことにはアチェが地方の一つとして見なされていることへの意識が示されている。別のデザイナーである **Shella Asrisyah(1986-)** は、アチェの地域性を直接的に示すデザインを用いることはほとんどなく、2011年のデザインは、インドネシアのテーマ・カラーである「ワルナ・タブラ（Warna Tablak 補色）」を使ったデザインにしようと考えているという。このようにデザイナーによって、当然ながら、伝統文化のとらえ方はさまざまであるといえる。

しかし、伝統的であると考えられてきたデザインだけが、伝統的であるわけではない。

このことを具体的に示したのが、2011年5月のバンダ・アチェでの APPMI のファッション・ショーであった。これは上述したようにアチェ文化の探求をテーマにしているため、出品したデザイナーたちは、バティック・アチェや19世紀のアチェ戦争時代のヒロイン、Cut Nyak Dhien をテーマにしたデザインを発表するなど、伝統的文化要素をふんだんに用いていた。デザイナーたちは、アチェの伝統文化のデザインへの表出のしかたをどのように操作したらよいか模索している段階であるといえよう。これまでデザイン化されなかったアチェの伝統的な文化的要素が、今後、再創造的に使われていくことが予測される。イスラームと伝統について、Safartiwi Gadeng は、インタビューで、デザインする時、イスラームの文化とアチェの伝統文化は別物ではなく、すでに合致していると考えていると述べたように、伝統とイスラームはファッションを介して新たな融合の道筋がつけられようとしている。

(6)結論

インドネシアでは、Nagata[1995]が述べる、マレーシアなどの近隣のイスラーム教国と同様に、イスラーム意識が高揚し、ムスリムに向けた衣服の着用が近年ますます浸透してきていて、アチェで同様の状況があるといえる。それと同様に、2002年に施行された、公の場でのブサナ・ムスリマの着用を女性に義務づけるイスラーム法（シャリア・イスラーム）が衣生活の基本にあり、人々の生活全般の土台となっていることに注目しなければならない。

そうした衣生活を形成する上で、ファッションの動きは、アチェでも例外ではなく、グローバルなファッション・トレンドとともに、インドネシア全体、あるいはジャカルタのファッション・トレンドに対する意識や、人々のおしゃれ意識、ファッションへの興味はますます強まっているといえる。このことは、近年の人々の生活の向上とともに増加し、盛大化することで、デザイン化されたブサナ・ムスリマの着用の場が多くなってきていることを示す。

一方、普段の生活の中での衣生活を考えた時に、同時に、ファッション化が進展していると考えられる。例えば女性によるレギンスの着用や、透ける素材の上衣などの着用がみられるようになってきた。このような女性の服装を、イスラームに対抗する西洋のファッションとして否定的にとらえていることは明らかであり、行政が懸念する材料となってきたことをみてきた。

衣服づくりにたずさわるファッション・デザイナー、タイロール、また一般の女性たちは、ファッションを、生活を豊かに彩るもの、楽しみとして位置づけているといえる。アチェのファッション・デザイナーたちは、とりどりの色彩、ビーズワークによる派手といえる印象のブサナ・ムスリマを工夫してデザインしている。またアチェ独自の伝統文化に由来する文様、新しく創出されたバティック技法を用いて、アチェ人の文化的アイデンティティを表現し、またタイロールは顧客の嗜好にしたがったデザインの衣服をつくり、女性たちに提供している。このようにみると、Jones[2010]がジャカルタの事例で述べているような、ムスリムの衣服に表現される精神的な美やミニマリズムといった要素は存在せず、インドに由来するとされるアチェ人の原色や金属アクセサリーを嗜好する傾向が明らかにみられる。アチェでは「外見の美」をあらわすことで生活を豊か

にしようとしているといえる。

Jones[2007・2010]がジャワ人について主張しているように、アチェ人は、インドネシア全体における資本主義経済の進展と深くかかわり、信仰とファッションが結びついたアイテムとしての衣服、ジルバブ、クルドウン (kerudung 大判の頭布)、またムクナ (Mukena 祈祷時に女性が頭から被る白い筒状に縫製された布) が百貨店や市場で販売されている状況からは、Brenner[1996]や Smith-Hefner[2007]が述べるように、これらが、アチェにおいても女性の自由な行動を妨げ抑圧している様子うかがわれず、敬虔さを表現しながら自分の魅力を表現するファッション・アイテムとして楽しんで着用する状況がみえてくる。Tarlo[2010]がロンドンの事例で述べているように、津波後の生活の変化という新しい社会的文脈の中で、アチェの女性たちは自らにあった新しいムスリム・ルックを創り出そうとしているといえよう。

このアチェの人々のブサナ・ムスリマ着用に関する意識は、個々人によって差異があることは確かである。若い女性の間には、西洋ファッションにあこがれ、ジーンズやTシャツを着用したいと考える者もいる。Miller[2006:306]によれば2002年初めに、イスラームの服装規制が導入されると、ジルバブ強要に対する異論が増えるのではないかと懸念を表明したアチェの女性組織があったといわれ、また、アチェの大半の女性は、イスラーム法の強要とみて、イスラームの服装規制に憤慨したという。またアチェ・バラット県でのズボン禁止条例に反対する意見が多くみられたように、何を着るかは個人的に自由で、信仰は個人の内面にかかわることであり、法令で取り締まるべきではないと考える人が少なくないことが理解できる。

アチェでは、独自の文化が醸成されてきていて、伝統を尊重しながらムスリムの衣服のファッション化が行われてきた。デザイナーへのインタビューから、イスラームと伝統は対比的関係にあるのではなく、アチェの伝統文化＝イスラームであり、併存的・相互補完的にとらえられているといえる。このことは、Kartikasari[1986/87:30]による、アチェの伝統文化とイスラームは長い間に融合したという考察と一致する。またファッションについて、インドネシア独自のファッション・トレンドの採用、信仰にかかわるファッション・アイテムの消費の浸透などから、アチェの人々にとって、ファッションと伝統とイスラームは対立するものではないと考えられているといえよう。

一方で、衣服のデザイン、形の違いは、イスラーム教の儀礼の場面と伝統的な場面とを区切るという、アチェの人々の生活場面を切り替え、ボーダーを設ける役割を果たしているといえる。デザイナーやタイロールがそのような切り替えの提案を、衣服デザインによって行っているといえる。しかし、このボーダーの概念は、排他的な領域を示すものでなく、生活の中に豊かで多様な領域があることを楽しむための概念となっていると指摘したい。何をどう着るのかは、服装に制限のあるアチェの人々にとって、永遠のテーマである。

文献

Alamsyah, T., T. Alibasyat Talsya, Tuanku Abdul Jubril (ed.)

1990 *Pedoman Umum Adat Aceh, Edisi 1.*: Lembaga Adat dan Kebudayaan Aceh, Propinsi Daerah Istimewa Aceh.

- Brenner, Suzanne A.
 1996 Reconstructing Self and Society: Javanese Muslim Women and "The Veil",
American Ethnologist Vol.1 No.1:pp.673-697.
- Jones, Carla
 2007 Fashion and Faith in Urban Indonesia, *Fashion Theory* Vol.11 Issue 2/3,
 Berg:pp.211-232.
 2010 Materializing piety: Gendered anxieties about faithful consumption in
 contemporary urban Indonesia, *American Ethnologist* Vol.37 No.4,
 University of Colorado, Boulder: pp.617-637.
- Kartikasari, Tatiek (ed.)
 1986/87 *Arti Perlambang dan Fungsi Tata Rias Pengantin dalam Menanamkan
 Nilai-Nilai Budaya Propinsi Daerah Istimewa Aceh*: Departemen
 Pendidikan dan Kebudayaan Pusat Penelitian Sejarah dan Budaya
 Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah.
- Miller, Michelle Ann
 2006 What's Special Autonomy in Aceh?, *Verandah of Violence: The
 Background of the Aceh Problem*, Reid, Anthony(ed.): Singapore
 University Press:pp.292-
 314.
- Nagata, Judith
 1995 Modern Malay Women and the Message of the 'Veil', *"Male" and "Female"
 in developing Southeast Asia*, Karim, Jahan Wazir (ed.): Berg Publishers:
 pp.101-120.
- Smith-Hefner, Nancy J.
 2007 Javanese Women and the Veil in Post-Soeharto Indonesia, *The Journal of
 Asian Studies* Vol.66 No.2:pp.389-420.
- Tarlo, Emma
 2010 *Visibly Muslim, Fashion, Politics, Faith*:Berg.
- Yayasan Meukuta Alam
 1990 *Tata Rias & Upacara Adat Perkawinan Aceh*: Himpunan Ahli Rias
 Pengantin Indonesia
- Yunis, Tabrani
 2009 Bertanya Rok Gratis Bupati, *POTRET* No.29: Center for Community
 Development and Education:pp7-9.
- Yunus, M. Ahmad & Tatiek Kartikasari (ed.)
 1985/86 *Pakaian Adat Tradisional Daerah Propinsi Daerah Istimewa Aceh*:
 Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal
 Kebudayaan, Direktorat Sejarah dan Nilai Tradisional, Proyek
 Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah.

V アチェの衣生活文化へのアプローチと 男性用帽子コピア・ムクトゥブの持続的生産

アチェへのアプローチ

共同研究がもたらしうるプラスの効果を得るために、研究プロジェクトによって、目的を共有して異なるアプローチをとる研究者が成果を集約するスタイルをとったり、異分野の研究者の融合的協力により新しい理論やアプローチを開発するスタイルをとったりするだろう。本共同研究の場合、研究者の間で東南アジアの一地域にたいする関心と衣生活をめぐる人々の生活への関心を共有していることから、そこから外れる領域を互いの強みとして、寄与しあうスタイルをとった。私の主な貢献領域は、観察の視点の補完と、理論的な補強であった。私の場合、民族誌的アプローチを採用しているので、最初の現地調査に参加する前に、直面することが分かっている問題を検討しておかなければならなかった。すなわち、一回の調査期間が1～2週間程の現地調査において、民族誌的調査で通常採用されている比較的長い期間を費やすスタイルの特性をどのように実現させるか考える必要があった。

民族誌的アプローチは、基本的に参与観察とインタビューをもとに記述と分析をすることであるが、それ以上に統一的な手順があるわけではない。しかし、私はその特性として以下のように考えている。手順として、当該地の人々の視点の理解と事象の脈絡内把握を目標にしながら、探索的観察に時間をとったあとに、焦点を合わせた事象について観察を行う段階に移り、その間に事象と課題を掘り下げ、一つ一つこなしながら循環的に別の事象と課題の探究を進めて知見を蓄積し、最終的には諸事象の相関性と諸課題について全体的観点から見直してまとめるスタイルである (Spradley 1980 参照)。そのため、このスタイルを短期の調査期間でどう実現できるかが、現地調査に先だつ事前課題であった。これに加えて、民族誌的アプローチには現地語に精通する機会をもつことも含まれるが、今回はそれを十分に果たすことはできなかった。

事前課題にたいして用意できた答えは、私が担当する2年間のプロジェクト期間中に現地調査する機会が数回(最終的に5回)あることを前提に、できる限り全体の調査期間中に同じ事象を複数回観察できるようにし、少しずつ異なった観点から、観察を続けることにすることであった。その過程で人々の営みに関してできるだけ多くの面を観察する。そして、今後追究すべき焦点を合わせた事象の数を4つ程度に限定し、最初の現地訪問時の観察と聞き取りの経験から、それを特定する。この特定が最初の現地調査の主目的となった。また、現地語(ここではインドネシア語を指す。アチェ語はアチェ人の中で使用されているが、本研究ではアチェ語だけの環境下での調査はしていない)を

使用できない問題は、共同研究者による通訳と、可能な場合に英語を介することで乗り越えることにした。この限定性の極小化を、現地では観察の重視により、国内調査では英語研究書・論文の収集・参照によっておこなった。

プロジェクト期間中をとおしてとくに最初の現地調査時に、意識的に先入観を排除して観察をおこなうことにした。これにより、観察の幅を狭めて集中するのではなく、出会った景観や情景、状況や場面に少し距離をおいた感覚で、見ていくこと、そして、見聞きしたことで、疑問が生じたことや、直感的に重要であると感じたことに、注意を払った。文献での調査にも基本的に同様のアプローチをとった。アチェに関する歴史的研究で知られる A.Reid (1969, 2005, 2009, 2010)の著作・論文は、政治経済・文化社会の多岐にわたる内容を含んでいるので彼の諸研究を手始めにして、必ずしも日常生活や衣生活に関わるものは多いとはいえないので文献の中を探索的に観察するように、関係する記述を探しだした。近年、急増してきた新しい研究成果も収集して、とくに現地観察で得た関心事に関連する記述や論点の把握を続けることになった(Ichwan 2011; Merry and Milligan 2009; Missbach 2011)。

事前課題の答えをガイドラインにして最初の現地調査(2010年5月)でいくつかの関心を引いた事象から、その後も調査活動を継続するのに値する、つまり探究する上で深みを持ち、より大きな社会的文化的事象を理解するための糸口となるような課題を選んだ。この特定は予想以上に円滑に進んだ。その要因は、三点あり、どれもが実際に調査経験から判明したことであり、現地の研究者が共同研究者に加わることの意義を示すものであった。まず、調査の仕方、訪問地(少し集中して観察できたところ)の選択が自分で計画したものでなかったことがある。このことが結果的に初期段階の良い観察、つまり、先入観を持たずに少し距離を置いて観察することを可能にした。例えば、スマトラ島の大都市メダンから、アチェ州の北岸にあたる地域を沿岸にそって車で4日間移動していたときに、沿道の景観を把握できたこと、同行者が共同研究者の日本人とアチェ人、それにアチェ人運転手が同行者であり、インドネシア語でのやりとりの中において、特徴的な表現や行動を把握できた。このチーム構成によって、自分が使える言語(英語)で質問や説明を主体的にできないかわりに、随行者となることで、その分、自らが直接観察する機会が増えたのである。随行中に自分で問をいくつか見出し、一時保留して暖めておき、後に再考していった。二つ目は、アチェ人共同研究者が熟知している訪問地を選んだので、アチェにおける工芸生産の現状とそれを取り巻く組織やその活動の概要を短時間で把握できたことである。三つ目は、アチェ人共同研究者が、アチェ人にとって大切な出来事である農村部の結婚式や、都会の近隣の人たちに馳走の提供をおこなう慣行(クンドリ)に同行させてくれたので、短期間の滞在中でも貴重な出来事に参加できたので、問題の発見に適切な機会と材料を得ることができたことである。

四つの事象

最初の現地調査は前半をメダンからバンダアチェへ車で移動しながら途中の訪問地

での調査をおこなった。この移動の流れの中で事象をすくい取っていきながら、それが取り上げるのに相応しいかどうか移動中に吟味していった。こうして、調査最終日まで事象を選定し終えていた。

その一つは、まず、中国系の人々の存在である。アチェ州における人々の生活を理解しようとしたときに、前提として、現地で観察したり聞き取りしたりする相手は多数派のアチェ人であり、それに加えて山間部で暮らす少数民族の人たちであると考えていた。しかし、スマトラ島のとくに沿岸部の町々に中国系住民が暮らしている事実に、道路沿いに広がる墓地の墓標（写真 27）に中国名が刻まれていることに気づいてから改めて考え直し、彼らの存在を検討に入れることが、比較の視点からすると、アチェ人の生活を理解する上で重要となると考えた。文献でしばしば記述されてきたように、アチェ人の衣生活はマレイ、アラビア、インドのみならず中国の影響も受けているとみなされている。こうした影響について、存在の有無だけでなく、どう影響したか問うとすると、異なる文化的背景をもつ者との相互作用的関係を検討しないかぎり接近できない。そこで、中国系とアチェ人との関係性を理解するためにできるだけ多くの関連資料を集めることにした。中国系の人々が、アチェの衣生活の形成にどのような役割をどう果たしてきたのか明らかにできるような直接資料の収集はむずかしくても、間接資料があればできるだけ集めたいと考えた。その後の現地調査で、中国系の存在を改めて認識する発端となった東海岸（メダンから車で西北に数時間のカランバル）の道路沿いにある中国系の墓地（写真 27）を再訪したとき、比較的大きな川の沿いに連なる丘陵地に展開しているのを知って、その独自の形態に強く印象づけられた。そこから少し離れたスルワイの町には古寺（写真 26）が残されていて、かつて多くの華人が暮らしていた名残であるが、今でも離れた町からお参りにくる人がいたことにも印象づけられた。その後の現地調査で、アチェ州の沿岸部の町々に中国系墓地が存在することを確認し、中国系の存在を抜きにしてアチェについて語ることは、部分を欠いた話になると実感した。

二つ目の事象は、移動中の車中でアチェ人共同研究者が、訪問した工芸品生産者の活動やそれを支援する活動についてインドネシア語で話をしているときにソシアル *social* ということばを口にしたことであつた。そのとき話されていたことの内容を把握していなかったにもかかわらず、そのことばが人間の活動に関して使われていることは推測できた。発音が英語の *social* と関連していると思い、この語のもつ概念について見直すこと（Latour 2005）に関心があつたので、それがアチェの衣生活とどう結びつくのか考えた。インドネシア語には社会を意味する *masyarakat* があり、辞書を参照する限り、「社会的」を表すのに、この語の派生語だけでなく、*social* も使用されている。しかし、学術用語などの類に限られて使用されているようである。人間の活動について表現するとき使用される英語の *social* は、インドネシア語の *social* に近接した語として使用されているようである。もともとのインドネシア語でなければ外来語からの借用であろう。そうであれば、どのような意味が含まれているのかを理解し、明らかにできれば、人々の活動の一つである布、衣服、工芸品の生産に関わることや、それへの支援活動にも、

social 概念で表せる側面が含まれている可能性を確かめることができるかもしれないと考えた。実際の解明には、Latour (2005) が提案するように、どのような人がどのように関わっているかを確認することが必要になるだろうと考えた。

第三に、沿岸の町ランサで、工芸品生産様式に携わっている女性が、工芸品の生産のしくみを作り、それを自らシステム・パダンと呼んでいることに注目した。彼女は、スマトラ島第一の大都会であるメダンでパダン人によるボルディールの生産スタイルを実際に見て、自分でも同様のスタイルをとることにし、このスタイルを他人に伝えるときにシステム・パダンという言い方をしたのである。パダン人はスマトラの中でも商業活動に卓越した能力を発揮していてインドネシア国内各地にパダンスタイルのレストランを見いだすことができる。注文を聞くことなしに、異なる種類の料理が載った小皿を多いところでは数十もテーブルに運びならべておく。客は好きな料理の皿を選んで食べ、食後にウェイターが手をつけた皿をもとに値段を計算する。必ずしも会計が適正になっているかどうかは慣れた者でなければわからない。この食後の会計を計算する技を含めて、料理そのものの種類とその提供の仕方、会計の方法のしくみをシステム・パダンと呼び、それは新聞の紹介記事にも使われることがあるので、ランサの女性が造語したのではない。工芸品生産様式にアチェ人女性が自分のモノづくりのしくみをシステム・パダンと呼んだのは、パダン人が工芸品の生産に、パダン・レストランと類似したしくみを使っていて、それをみたことによるものと推測される。それが、先述した二番目のソーシャルとも関連しているのである。つまり、中心となる人からみると、工芸品を完成させるための分業を、何人かの個人に振り分け、小皿のように配置して、そこで出来上がったものをそれぞれに評価して（レストランでは皿に手をつけたかをみて料金を加算するように）、それにみあった報酬を分配するといったしくみである（類似システムに関して Waterbury 1989 参照）。この仕組みに加わる女性は、それぞれがそれぞれの家庭事情をもって、中心になる女性はそれらを把握して、仕事量や段取りの配慮だけでなく、その家庭へのケアもすることになる。この意味で、この中心女性は、単なる事業をしているのではなく社会的企業をしていることになるのであり、場合によっては、この女性は、このしくみのなかで、自発的なソーシャルな活動をすることになる。

四つ目の事象は、さらにバンダアチェに向けて国道を移動し、最後の訪問地となったガロット村（地図 3; 写真 13~17, 20）で女性たちがおこなっている男性用の帽子コピア・ムクトゥブの生産である。この村は、バンダアチェから車で数時間の距離にあるピディ県の沿岸町シグリから内陸に 8 キロ程入った水田地帯に佇んでいた。アチェでは近年モスクの建設が増え（後章 VII 参照）、建設中のモスクをよくみかけ（写真 15）、この村に向かうまでも、沿岸部を走る国道の沿道に建設中のモスクがたびたび現れ、その近くの道路中央に立って、建設を続けるための寄付金を求める人がもつバケツなどの入れ物に、運転手が窓から腕をだして丸めた紙幣を納めるのをみながら、これは、運転手を日常的に雇用しているアチェ人共同研究者のソーシャルな活動の一部になると推測された。ここでも移動中の観察が、その後の探究に役立ったのである。この行為を見た後

で、男性用の帽子の生産を見ることになったのは、移動の流れで生じた偶然のことである。しかし、その後間もなく、これら二つが結びついた事象になりうることに気づいた。その契機は、コピア・ムクトゥブ（写真 18）の生産を一つの事象として取り上げることに決め、この帽子の実際の使い方の探索中に、頭頂部の形がまさにコピア・ムクトゥブであるモスク（写真 2）がバンダアチェ市内に存在する事実を知ったときであった。このモスクの存在により、モスクを作ること、どのような形にモスクを作るのか、誰がそうした形の採用を決めるのか、誰が建設資金を提供するのかといった問題を、考えるきっかけとなった。その意味で、コピア・ムクトゥブの象徴的な意味は、アチェ人だけでなく、私の研究上の軸の一つとなった。さらに、ランサのシステム・パダンのような生産スタイルとの比較の視点からの関心や、バンダアチェ市内から外れた近隣の村でアチェ人の結婚式（写真 7）に参加し、この帽子が実際に伝統的な服装スタイルの一部となって使われている様子を見て、ファッションにたいする伝統性の考え方を探る関心をもコピア・ムクトゥブがもたらしたのである。この事象が、既述の事象との結び付きをもち、アチェにおける数少ない衣生活に関わる伝統的アイテムとして持続性を考えるための好例であることから、次項から詳しく検討していくことにする。

このように最初の現地調査で観察できた事象の中から、その後の探究対象として選んだ事象は、当然ながら、アチェの衣生活の全体像を捉えるために選択したものではない。それらを選んだのは、日常的な生活の中にある事象から、アチェの衣生活の特徴の把握に繋がると予想されたものである。その後の探究において、それらは互いに関連していることに気づかされることがしばしばあり、その関連性から派生する課題を近年の研究からの知見を学びながら探究することになった。この結果、アチェ地域のもつ多様性の理解と、アチェ人のエスニシティや文化の特性の把握に近づくことができるようになったのである。

コピア・ムクトゥブの生産

いつ頃からコピア・ムクトゥブが作られるようになったのか、それが分かればこの帽子がもつ古さの意義ではなく、それがどのように連綿と作られてきたかの機構を探るのに役立つ可能性がある。古さの意義はアチェ人自らが再解釈したり再定義したりすることで明らかにされるべきことである。ここでの問題は、とくに布を使った衣生活に関わるアイテムとして、この帽子をみたときに、独自の形状と独自の作り方を一見しただけでも関連が推察できる、アチェ人のアイデンティティとエスニシティ形成、材料資源の獲得法、組立の技術、需要を広めた要因といった多面的な問題である。それぞれの問題を検討できれば、モノが功利的機能だけで存在するのではなく、社会文化的存在としてどのように存在するのか、また、人間とソーシャルな関係をもつ機構やプロセスを明らかにすることができると思う。

この帽子が持続的に作られてきたことが興味深いことは、江戸時代初期に着用されていた被りものが、現在でも使われることがあるのか、あるいは、明治時代の社会上層部

の男性が着用していた帽子を現代男性がかぶるか、考えてみると分かる。幸運にも我々はアチェでそうしたものをみることができる。アチェ地域は長い間、対立の場であったし、ときには激しい武力衝突があったにもかかわらず、コピア・ムクトゥブの生産地はそのままの形で残っている。伝統的な工芸品の生産が現在に残される場合、生産地の拡大で需要の増大がまかなわれ、重要な減少で生産は周縁僻地に残される例が日本の例で知られている(Cort 1989; Sano 1997)。コピア・ムクトゥブの場合、確かに農村集落に残っているように見えるが、もともとそこが生産中心地であった可能性も否定できず、生産地の位置の問題は丁寧に比較材料を集めて検討すべき問題である。

生産地は少なくとも二つあった。スマトラ島北岸の町シグリから内陸に入った水田地帯にあるガロット村と、スマトラ島南岸の町ムラボ(写真 31)である。悲劇はムラボに起こり、2004年12月に大津波が襲来したとき、コピア・ムクトゥブの生産者たちすべてが犠牲となってしまった。現在、再興の動きはみられるものの、その生産は止まった状態である。一方、ガロット村は、そこからさらに内陸に入った大学施設が完全に対立時代に破壊されて再建されずに残された廃墟で、授業が再開されているものの、この村周辺一帯は、昔のまま残っている。ガロット村の高齢女性の中に、ムラボでの生産を知っているものが出て、ガロットからムラボに技術・知識が女性の婚姻をとおして伝わったと考えている。ガロット村が所在するピディ県一帯にはかつてイスラーム王国があったことが知られていること、古い交易港であったムラボよりも人口の集中度が高いこと、米を中心とした農業生産地として安定していたことを考えると、ガロット村が帽子生産の発祥地であった可能性は高い。おそらくムラボには、徒歩あるいは馬車や牛車で移動していた時代に、山を越える街道がシグリからガロット村周辺を經由してムラボまで続くルートがあったことが推察される。当時スマトラ島の北海岸と南海岸をつなぐルートの一つで、人々の移動にともなって、この帽子の製作技術が伝わったことは確かだと思われる。

この帽子の存在は、確認できる写真資料からすると、少なくとも1880年頃には存在していた。19世紀末に、ムラボ出身のアチェの英雄とされるトゥク・ウマル Teuku Umar(写真 32)がオランダ軍との戦闘で被っていた帽子がこの帽子であった。この時期に、この帽子が生産されていたことは、ガロット村での聞き取りからも確かめられた。80代の女性が子ども時代に自分の祖母がこの帽子を作っていたことを話していて、この祖母が若い時代に、帽子の製作方法を習っていたとしたら、この女性が10代のときが1940年代頃で、祖母がそのとき50代とすると、10代で習っていたならば、およそ1900年前後のことになる。さらに、この帽子が作られた時代の推定根拠として、アチェ人が独自のエスニシティを形成して、周辺の他の文化集団との違いを明確にしていた時代に、アイデンティティを表すアイテムとして、この帽子が使われたとすると、その時代は、Andaya(2008)によれば、マラッカ海峡地域の勢力としてジョホール王国がアチェの王国にとってかわった17世紀終わりから18世紀にかけてである。この間に、アチェ人は、マラユ的特徴から脱して独自の特徴をもつ文化を作り上げていったと考えられている。

そうであれば、コピア・ムクトゥブが今のような形に作られ始めたのは、おそらく 17 世紀終盤から 18 世紀をとおしてであったと思われる。ガロット村の住民の中には、16 世紀のアチェ王国時代に作られるようになったと語る者もいる。

独自のエスニシティを形成していったことは、とくに近くに存在する別の文化集団との差違を明確に示すのに衣服は大いに役立っていたと考えられる。Andaya (2008)がアチェ人と同時にミナンカバウ人も独自のエスニシティを形成していったと考えている。こうした文化的独自性を表すのに、男性の帽子あるいは被りものは絶好の差違を具現化するものであっただろう。文化的張り合いが、実際に隣り合わせ存在する異なる文化的背景をもつもの同士で顕著に現れるとしたら、アチェの場合もこうした例の一つになると思われる。

Andaya (2008:136) は他にも、この帽子の生産の初期に関わる状況を示唆する資料を示している。それは 1640 年にバタビアのオランダ総督に宛てられた手紙の引用であり、スルタン・イスカンドル・タアニの偉大さを、象に着装する黄金の布、戦闘用の象、そして馬の多さと結びつけていた。アチェが他の国との交易で送り出したものの一つが象であった。そして、取り入れたものがインドの布であり、スマトラ島北岸の町サムデラ・パサイを中心とした地域で大きな需要があった (Andaya 2008: 137)。そして、アチェが独自のエスニシティを形成している 18 世紀に、自らの国の生計維持のために農業を重視しはじめ、とくに水田耕作地を拡大していった (Andaya 2008:142)。Andaya は農業に関連して、現在、コピア・ムクトゥブが生産されているガロットが所在するピディ地域に関する当時の様子を知る記述をしている。アチェの北海岸沿いの内陸部を治めて灌漑水田農耕地としていった流れの中でピディでは良い土地を地元有力者が保持し、王のための土地にしたのは貧しい土地であったことで、王が叱責したという。その後、このピディの地は農耕地として名声を博すようになった。こうした経緯がアチェのエスニシティ形成過程にあったと考えられる。こうしたことを背景として考慮すると、コピア・ムクトゥブに関する現状と歴史的な流れとの結びつきがより鮮明になり、その生産のあり方や文化的意味についての検討がより明確にできる。

生産地の特徴

ガロットは現在も豊かな水田農耕地 (写真 13、地図 3 参照) にあり、この地域一帯を車で巡ると、前述の農耕地としての名声を誇るようになった景観の一端を目にすることができる。オランダ統治時代に作成された地形図でこの一帯をみると水田で埋め尽くされていて、大きな水田地帯として歴史的に続いてきたことがわかる。ガロットの中心地に橋がかかり、その一帯の道路沿いに市場があり、規模は小さいが地域住民にとっては十分にいろいろな品物を手に入れることができる。コピア・ムクトゥブの材料もここで買えるのである。ここから、バンダアチェ方面に向かう道路が延びていて、オランダ時代に作られた街道の名残である街路樹がところどころで続く街道の存在からもわかるように、ガロットは内陸にあるクロスロードとして、人々が集まった場所であったと思われる。12 月末に訪れると、田おこしの時期にあたり、水をはった田んぼには男性

が水牛に鋤を引かせていて、午後遅くになると、田仕事で土のついた仕事着姿の 4~5 人の女性たちが一団となって家路についていた。女性たちは、水田の仕事にそれぞれに関わっている。田植えなどの作業では数人の女性が寄り合い一つの田んぼの作業を助け合うことが行われていてソシアルの一つとみなせるとインドネシア人共同研究者が話してくれた(Nazamuddin, Agussabti, and Syamsuddin Mahmud 2010: 83 参照)。村の家々は一つの集落にまとまり、水田の中に小島のように浮かんでみえる集落もある。

ガロットは 10 の集落 *desa* からなり、そのうち二つの集落、ガロット・チュットとトゥンコップでコピア・ムクトゥブが作られている。互いの集落は水田を横切る道で繋がっている、いわば隣接する集落であるが、互いの集落の生産者が互いに知り合いであるという様子はなく、また、同じ集落内でも生産者同士が互いに知っている場合もあれば知らない場合もあるようであった。最初の現地調査で訪れたのはガロット・チュットの東端にある家で、家の前に四角の台上の作業場兼憩いの場があり、そうした場所が近隣の女性たちが集まって休憩したり作業したりする場となっている。私は初めて訪問する家だったが、アチェ人共同研究者は既に何度か来ていて、知り合いであったことや、ここに来る前に、この地方の中心都市シグリの地域産業振興担当の役場部署の事務所で現況や今後の振興の話聞き、その職員が同行して訪問したため、事前に連絡があって、女性たちがこの家に集まって作業の例をみせてくれたようである。実際には共同で作業をすることがあっても、各家の中や家の前で作業をするのである。

この地域では、コピア・ムクトゥブだけでなく、他の工芸品であるカサブ（金糸刺繍）やボルディール作りもあり、そうした工芸品に関する専門店が、街道からガロット・チュットへ入る道の近くにある。女主人（51 歳）は小学校教員をしながら店をもち、自分の店で作ったものや地元一帯の住民が作ったものを集めて販売することに加えて、地元のカサブの組合組織の組合長を 1985 年に 60 歳程になった前任の女性から引き継いだ。当人はカサブ作りが上手で、午後 1 時で学校が終わってからの時間を使えることから、組合の世話もできたのである。こうした地元の有能な女性が、全国組織デクラナス（別稿参照）による支援を得て 400 人程の女性を中心とした地元の工芸品生産の振興に関わっている。しかし、彼女は、この地域で生産されるコピア・ムクトゥブについて直接関与することはない。

この地域の特徴を地元の人々がどう捉えているのかを知るのに、最初のガロットの訪問時にはコピア生産者に十分に尋ねることができずにいたが、その後の訪問で集落内を歩きながら異なる生産者から話を聞くことで、徐々に、生産の全体像がわかった。コピアについての歴史的文化的な知識を知っている人は、実際の生産者ではなく、村の知識層の中にいて、最初のガロット訪問時と最後の訪問時に出会うことができた。最初の訪問時に出会ったのは、高齢女性で、まだガロットの市場近くの集落に暮らしていて、自宅に訪問してインタビューした。この女性は、全国組織のデクラナスが発足した 1981 年に地元の組合組織の長となったチュット・アジャ・アインシャ(85 歳。写真 20)で、数年後には高齢を理由に後任者に長の座を譲った。

彼女はガロットで生まれ育ち、結婚し、三人の息子を育てあげ、子どもはすべてジャカルタで仕事をもち生活しているので、現在は一人で暮らし、ヘルパーもいるし、近隣には親戚が住んでいる。女性が生涯にわたり生まれたところに暮らし続けることは、この地域でよく見られることで、いわゆる母系的な居住形態を保持しようとする慣行があることを示している。親族関係が母系であるとアチェ人知識人でも明言しない人がいるように、アチェが母系社会であるとは定義できない。しかし、同じ土地あるいは家に女性をとおして代々暮らす慣行があることは、工芸品の製作技術の伝承の点からすると、持続的な生産を支えるために有効に働いていると考えられる。実際、アインシャの場合も、自分の家の女性たちが代々カサブを作っていた。

アインシャに再度、最後のガロット訪問時に、自宅でインタビューし、現在、この地域では、工芸品の生産がデクラナスの活動などが始まって以来、増大してきたものもあるが、それ以前には、それまで生産されていたものが途絶えていった歴史があることがわかった。かつては、この地一帯でソンケット織りがよく行われていた。しかし今では途絶えている。他に、現在では生産されなくなったものに、装飾品、指輪、腕輪、そして小刀（レンチョン）があったという。コピア・ムクトゥブの頭頂部に飾られる装飾品 **Tampok** も現在は安価な模造品となっているが本来は金と宝石で作られていて、この飾りもガロットで作られていたという。このように長年同じ土地で暮らしてきた女性からの語りから、この地がさまざまな工芸品の産地として存在していたことがわかってきた。こうしたさまざまな工芸品の生産があったことで、コピア・ムクトゥブの発祥地がガロットであったと断定はできないが、この帽子の生産もかつてはガロットの生産品の一部として古くから存在してきたことは確かだろう。そうであれば、何故、この地域から他の工芸品は途絶えていったのに、コピア・ムクトゥブは生き残ったのだろうか。以下で、この帽子のいくつかの側面について検討していきながら、この帽子の持続的生産のあり方に接近していくことにする。

コピア・ムクトゥブの形状

チュト・アジャ・アインシャ(85歳)を最初に訪問したとき、彼女が手元にもっていた、コピア・ムクトゥブに関する手書き資料（末尾の資料一覧の 10）の提供を受けた。この資料は一見して、作成者がこの帽子の独自の模様や形に関する解釈を試みていることがわかり、他の文献で集めた資料の情報とは異なっていた。この資料の作成者は、最初の訪問時では明確ではなかったが、2回目の訪問時に、歴史を教えている 90 代男性であることがわかった。それが作られた時期は、スハルト時代であり、アインシャによれば、その時代に伝統的なものの保存のために各地でどんなものがあるかの掘り起こしが行われたという。この掘り起こしは、1970 年代末頃にインドネシア各地で実施されたものであることを、1980/1981 年に公表された地方文化調査記録プロジェクトのアチェ特別州に関する報告書（末尾の資料一覧の 2）が物語っている。おそらく、このプロジェクトの結果、あるいは、それが進行中に各地の工芸品を振興させるための組織化の一環として行政指導によるカサブ組合などが 1981 年頃に発足させられて、ガロットでは

年長格のアインシャがその長に推されたのだろう。この報告書をみるかぎり、プロジェクトは各地を網羅的に調査して、潜在的な資源の掘り起こしをしたようすがみえる。ガロットの場合、地理、人口、経済、社会、歴史、文化、を記述している。この資料には、ガロットは宗教教育に歴史的に重要な人物や教育機関があったこと、その領域で長けているために芸術面では精彩を欠いた地域で、唯一アチェの慣習服の刺繍と、アチェの慣習服の一部である帽子コピア・ムクトゥブの生産地であることが記されている。この記述は、アインシャのインタビューでの語りであったように、1970年代にはすでに、かつておこなわれたさまざまな工芸品の生産がガロットから失われていたことを示している。かつて生産されたものについても、宗教教育の歴史について詳細な調査をしたように、調査が実施されていれば、今日、我々にも参考になる記録が残されただろう。

失われたガロットの工芸品に関する調査はおそらく十分になされてこなかったと考えられ、そうした品々の生産については、アインシャのように80歳代以上の高齢者でとくに女性の記憶のなかにしか残されていない可能性が高い。それを補うかのように、彼女の手に残されたコピア・ムクトゥブの特異な形状の意味に関する探究資料は貴重な情報源となった。残念ながら、この資料がまとめられた時期は不明である。アインシャ自身の言にあるように、これは1980年前後以降にまとめられたと考えられ、時折訪れるコピア・ムクトゥブについての情報を求める人々に、アインシャがこの資料を参考に説明したり、この資料そのものを示したりしてきたようである。

この帽子の外形は、「ひさしのない山高帽」のような本体部分と、その下縁部を一枚の布で後ろが三角になるように巻いた部分である。ガロットで作られているのは本体部分で、それに巻く布や、頭頂部と側部につける飾りは、バンダアチェの職人が取り付ける。本体に巻き付ける布は、現在では形式化されて部品として本体につけられるものとなっている。しかし、かつては、男性が実際に一枚の布を巻き付けていたと考えられる。ガロットで最後の現地調査時に出会った男性が昔の着用法をみせてくれたおかげで、実際の着用法がわかった。この一枚の布を頭に巻くことは、男性が特定の場面で、例えば両親や義理の両親と話しをするときに必ず頭を布で巻いて縛り、敬意を示さなければならなかったことと関係している。男性が頭に布を巻いたり縛ったりして正装に使ったりすることは、東南アジアのテキスタイルを網羅的にまとめた大部の文献(Maxwell 1990)に紹介されていて、東南アジアでは一般的といってよいだろう。しかし、この大著にも、ひさしのない山高帽のような帽子本体の形状の例をみることはできないほど、この帽子は特徴的である。

山高帽と外形は似ていても、その構成は山高帽の場合、単純に一体化されているのに比べてコピア・ムクトゥブは複雑に上下に五つの層状をなし(頂点の装飾を除くと四層)、横にやはり層状をなしているだけでなく色も白・黄・赤・緑・黒と五色が組み合わせられている。なぜ、こうした複雑な構成が可能なのか。それは、布をなるべく切断しないで使用する文化ではなく、布を小片に切断して、それを組み合わせながら縫製しながら組み立てる文化の所産だからである。いわば、綿入りキルト(邦語キルト)をつくるパッチ

ワークの仕事である。ただし、色が決まっているので、どのような布地の端布を使って良いというわけではないので布の節約的使い方にはなっていない。こうした材料の使い方とそれを用いた作り方の意味は、この帽子的持続的生産と密接に結びついているので再び後に論議する。

コピア・ムクトゥブは、アチェにおける慣習的儀礼的な服装の一部とする資料がある一方で、アインシャの保有していた資料に、帽子表面にある模様をイスラームの教義と結びつけて解釈している。そこでは、コピア・ムクトゥブの語源として、コピアはアラビア語を語源とし、頭に巻き付けられたものを意味し、ムクトゥブのクトゥブは、人民の代表の人のことを意味して、合わせて、民の代表によって着用された頭に巻き付けられたものの意味とされると述べている。各色についても黄=偉大さ、赤=勇気、黒=決断、白=神聖とし、緑の説明はない。この帽子には唐辛子状の模様があるとされ、その意味合いは、アラーを描いたものとされ、アチェ人にとって、コピア・ムクトゥブにきちんと模様を描きだすことはアラーを敬うことであるという。別の文字のような模様一つが、くずされ単純化されて、そのプロセスを数段階にわたって示そうとした。結局このデザインが、高い知識をもった人によって創造されたと主張している。これが創造された時代はアチェ王国時代で、その当時、さまざまな帽子があり、それらの呼び名のリストを示しながら、アチェ以外の他の国々の名をもつ帽子があることから、この資料の筆者は、アチェが国際都市としての特徴をもっていたと指摘した。多様な文化がみられる状況のなかで、アチェのエスニシティが、他とは異なる独自の形状をもつコピア・ムクトゥブの創造によって具現化されたと言いたかったのかもしれない。それは不思議なことではなく、エスニシティ形成のプロセスと、コピア・ムクトゥブの発生は、互いに関係していたとみるのがよいからである。

この資料と同様に、この帽子をイスラームの法と結びつけて説明している資料がある。例えば、「アチェの婚礼装飾様式と儀式」(末尾の資料一覧の 6) には、黄=王、貴族、陛下の象徴/緑=平和をもたらすイスラーム/赤=勇気と英雄の象徴/黒=人民、という色の意味づけをし、四層の段については、一段=イスラーム法、二段=慣習法、三段=規範(カノン)、四段=規則(一般)と説明している。

水平方向にみられる細い段々は、側面の下から上まで繋がり、中にカポックの綿が棒状に固めて上に行くほど細くなるようにして、しっかりと小さな布の連なりの中に納められている。この工程では、帽子の裏面を表にして縫い上げがおこなわれる。一本一本が横に連なっていくことで、厚みのある筒状の形となる。それに頂上部分を蓋のようにして筒状の部分と縫い合わせる。それを一挙に裏返すことで、黄、赤、緑、黒の布片がうまく配置されてモザイク状の模様をもつ表面が出てくる。この段々は全周で 96 あり、下から一層目と三層目は、唐辛子の模様をだすために、4 本ずつの単位で周囲に 24 個の唐辛子の模様が、二層目と四層目は、小さな鍵穴模様をだすために、6 本ずつの単位で周囲に 16 個の模様が、浮かび上がる。この 96 という数字に、本体の下段、中段、頭頂部のパーツを合わせて合計 99 の部分からなることが、アラーの 99 の名前と重なって

いることを、つまり、イスラームとの結び付きがあることを、ガロットの年配の女性作り手たちは覚えている。実際に、現在生産している女性たちに、そうした部分に意味合いがあることを尋ねると、現在作っている者にそうした意味を理解している者はいないという。しかし、宗教的な祈りや教えでよく知られていることとの結びつきを言われてみれば、生産者たちはそれらを理解することはできるようである。

コピア・ムクトゥブは、アチェの慣習的儀礼的な服葬体系の一部であるとする見方は、明確に区分できる服装体系の一つの分類のしかたである。しかし、この帽子の形状に込められた意味の再確認の過程で、この帽子は、イスラームとアチェの慣習が一体化されたものとみようとする意識があることが、この帽子の解釈のしかたによく表れている。分類は衣服の違いによる基準で簡単にできるが、意味の解釈では、アチェはイスラームであり、イスラームはアチェであるという両者一体の認識のしかたが、伝統的な帽子や衣服にあてはめられているといえる。そして、現在流行し始めているファッションにもあてはめられていると考えられる。

形状に関わる残された問題として、アチェ人の気質との関係性がある。アチェ人が「尚武剽悍且民族意識旺盛」な民族であるというイメージは日本占領時にも知られていた（明石編 1998:404）。おそらくアチェ王国時代に勢力をマラッカ海峡の両側にまで拡大し、マレイ半島での戦闘での武勇や、後のオランダとへの抵抗などがもとになって、このイメージが定着したのだろう。アチェを統治した日本軍はジャワを統治した部隊ではなくシンガポールに本部がある部隊であったのは、地理的近接さと、海峡の両側の歴史的関連性からだったと推察される。この勇猛果敢さや民族意識の高さは後の分離独立運動にも繋がる気質であるだろう。しかし、男性の帽子であるコピア・ムクトゥブがどのようにこの尚武的気質に合っているのか、もし合っていないならば、合っているのは民族意識を示すことに限られているのだろうか。現在、政治家が積極的に着用して公の場に登場することから考えると、その説明が妥当に思えるが、さらに検討が必要な問題である。

生産の特徴と女性生産者

ガロット村へ 2010 年 5 月から 2011 年 12 月にかけて 4 回にわたり訪問し、後半 2 回の訪問では村の中を歩いて観察した結果、コピア・ムクトゥブを生産している女性たちの多くは農業従事者で、朝早くから昼まで農作業をした後、午後に帽子作りをしていること、村の中での生産者の分布が村全体に広がっていることがわかった。生産に関わる女性の関わり方が柔軟性をもっていることもわかった。例えば、帽子の材料購入から最終産物までを一人で作る者、水田などの農作業の合間に生産工程の一部を行い、すでに出来上がった部分を他の女性から購入している者、一人で生産している者、数人のグループで分業しあって生産している者、と生産過程の技術面での工程は一樣であっても生産様式は多様で柔軟性をもっているのである。農作業にしる、コピア・ムクトゥブの生産にしる、日曜といった決められた休日はないといい、結婚式などの出来事が生じると一日仕事を休むという。こうした生活リズムの中で、自分の技術や得意な領域に合わせ

て、単独で生産したり、共同して生産したり、工程の一部に携わったりと、個人に合わせた柔軟な生産様式は、持続的な生産を支える重要な要素の一つとなっていると考えられる。コピア・ムクトゥブに関する資料（末尾の資料一覧1）に、1つ作るのにかかる時間は、細かい材料を扱うことから2～3ヶ月だと記されている。これがいつの時代だったかは不明である。現在、そうした時間をかけて生産されているわけではなく、数週間である。この時間の短縮は、製作作業の単純化（これが洗練さの低下に結びついているだろう）だけでなく、ライフスタイルの変化（農作業に必要な時間の減少、照明の普及など）も関わっているだろう。

アチェ人のいわゆる母系制的な家族制度のもとで、男性は外に旅にでて雇用を求めたり取引したり、あるいは修行したりして、外での働きや成功に高い価値がある（Aspinal 2009: 93; Schröter 2010: 162）のとは対照的に、女性が家に残った場合、帽子や他の手工芸品の技術を少女時代から祖母の世代から見聞きして身につけるようになる。今から140年も前から生産がおこなわれていたとすると、それ以前においても、王国の中心地として装飾品の精巧な手仕事による生産がおこなわれていたことが、ジャカルタの国立博物館で展示(2012年12月現在)されていたアチェの帽子から窺うことができる。それをよく観察すると、現在のコピア・ムクトゥブよりも高さが低いが外貌が同一で、布で形成された本体部分が繊細に丁寧に仕上げられていて、帽子頭頂部の装飾品は本物の金と豪華な宝石でできていた。これとの単純な比較からすると、現在生産されているコピア・ムクトゥブは大衆化され、洗練さが低下していることがわかる。

しかし、こうした洗練さの低下は、粗悪品の増産を意味しているというよりも、むしろ、生産者が熟達した職人から一般の農家の女性に移行したことによるもので、このことによって持続的な生産が可能になったと推量される。この変化があったとしたらいつ生じたのか。十分な根拠がないため、仮説的な説明を試みる。一般市民の結婚式に上層階級の服飾の一部を使用することが許されていることが多くの社会で知られている（写真3、7）。その日だけ王様になることが許されるのである。そのとき、そのものの質は本来のものより劣っていてもよいのである。アチェにも同様の過程があったと仮定すると、それが生じたのは、この帽子が社会上層部のもの（大統領がアチェ訪問時にも着用した。写真6）として定着したあとであったと思われる。アチェ人のエスニシティの独自の形成期（17世紀後半から18世紀）に、国の基盤としての水田を中心とした内陸の農業が振興され、農村が安定的な社会を支えるようになって、この帽子も対外的にアチェ人のアイデンティティを示すものとなっていた。国のあり方が外交や外政から内政に向かっていき、対内的に一般男性が、自らの社会の文化的由来やアイデンティティを示すのに、この帽子を使えるようになったと思われる。結婚式だけであっても、この帽子が一般的に使用されるようになると、社会上層部のみが使用したような洗練された帽子は必要でなくなり、現在に近い出来映えの帽子が広く求められるようになったと考えられる。さらに、しばらくして19世紀末に、コピア・ムクトゥブは単に王ではなく英雄としてのイメージの付加があった。オランダ時代におけるアチェの自立的存在をかけた英雄トゥ

ク・ウマル（写真 32）が常に頭にしていたことからコピア・ムクトゥブが英雄と独立のシンボルとなったのである。そしてさらに、その後、短期間の日本統治の後（ガロット村の近くにも日本兵の宿営地があった）、それまでの上層階層構造が払拭され、旧来の村落の権力者がいなくなることで、彼らと結びついていたコピア・ムクトゥブは完全に、庶民の慣習の中に残されたと考えられる。こうして、伝統的な慣習が世俗的に一般化し、コピア・ムクトゥブの頭頂部の飾りは宝石から金属工作物にかえて、誰にでも手の届く品物に変わった。この帽子の世俗化は、神聖さを失うことにもなる。しかし、近年の地域文化資源の掘り起こしのなかで、再解釈がおこなわれ、イスラーム王国時代の産物としてのコピア・ムクトゥブがイスラームと改めて結びつけられて説明されるようになった。

この帽子の生産技術は家屋内の作業というよりも庭先の屋根付きの休憩場・寄り合い場や高床式家屋の下の空間（写真 14）での作業がよくみられ、その家の子もだけでなく近隣の子もみることができる。おそらく、肝心の細かい工夫の場所は口頭での伝承が必要であると思われるが、基本的な技法の習得は見まねでなされてきたことのようにあり、その家の娘だけでなく、近隣の少女もそうした作業に触れる機会は今でも少なくない。これは技術伝承性に柔軟性があることを示している。また、生産自体は、70代の高齢女性も毎日の日課として針仕事をしていて、一方では若い 20 代の女性も専門的に生産している場合があり、ここにも年齢を問わずに生産するという柔軟性がある。つまり、生産者、生産様式、技術伝承に高い柔軟性があることが生産の持続可能性を保証してきたと思われる。また、これを背後から支える事実として、近隣に小規模ながら市場が古くから存在していて材料（布、糸、針、綿棒など）の入手が容易になっていることがある。

生産による収入についてみると、以前は 1 個 100 万ルピアであったのが、現在では 20 万（約 2 千円）に下落しているという。しかし、生産は続けている様子が明確にある。それはなぜであろうか。これまでにない要因があると考えられる。コミュニケーション手段の発達で携帯電話が全土で浸透し、アチェの各地から直接、生産者に完成品の取引の連絡が入るようになったことによる効果は少なくないと推測される。また、津波の犠牲となってスマトラ島の反対側の海岸沿いの町ムラボの生産がなくなったことによる影響から注文がガロット村に集まっているはずである。

分離独立運動が続いたコンフリクトの時代においても生産は、中断しなかった。とくにアチェ分離派の動きが活発で、中央政府とのコンフリクトの激化を招いた時期には、物資の流通が困難になりコピア・ムクトゥブの場合も同じだった。それでも生産自体は続けていて、女性たちは完成品を自分の家にストックしていたという。こうした困難な時期に、ガロットを含む一帯は分離派を多く輩出した地域であり、コンフリクトの時期には部外者が立ち入ることが禁止されていた地域であったにも関わらず、この帽子の生産自体が壊滅させられたり、休止に追い込まれたりする事態は生じなかったという。その背景の一つとして推測されるのは、分離派がアチェ伝統文化の擁護者であったことで

ある。事実、この運動の指導者で、ピディ地方の出身者であるハッサン・ディ・ティロは、宗教以上にアチェのエスニシティを強調していた(Aspinall 2009: 44)。実際に、分離派が対立の場面や実戦のときに使用したり、旗やピンにシンボルとして使用したりすることもなかったが、少なくとも果敢な抵抗による独立のシンボルとして、自らのエスニシティについて考えるときに欠かせないものとして扱われ保持されてきたと推測される。

布の加工

コピア・ムクトゥブを作るために必要な布は、現在、地元の市場にある商店で購入することができる。必要とする布は、白と黒の布は一般的で常に入手でき、黄と赤の布は、儀礼でしばしば使われるので備わっていて、緑はイスラームと結びついているため入手できなくなることはないと思われる。つまり、これまで材料不足の事態、つまり持続的生産を途絶えさせる事態はなかったといえよう。こうした布以外に必要なものも少なく単純で、糸と綿、そして裁縫道具であり、特別な道具として綿入れの時に使う特別の竹製の道具（サイズの違うものが少なくとも二種類ある）があり、これは参考にするものがあれば微妙な幅の付け方を真似て竹を削って作ることが容易な道具である。他に必要なのは、技である。それは「昔からの (asli 本来の) やり方」と表現され、技の修得は直接、作っている年長の女性のそばで観察しながら覚えていく。年配の女性は、農作業の時間も少なくなるので、おそらく、祖母から孫娘へと技が伝わるが多かったであろう。現在、農業をしない家の女性もコピア・ムクトゥブ作りに携わっていることから、母や叔母や親戚の女性から直接、教わるケースもあると思われる。

仕入れた布と最初に向き合うときに、昔から踏襲されている技がある。布を8ミリから1センチ角に裁断するとき、布を広げ、折り紙のように三角形に二つ折りして、底辺部に直角にハサミをいれる技である。技というほど修得を必要とする布の切り方ではないが、これを技といっても過言でないのは、この切り方がなければコピア・ムクトゥブの形は成り立たないからである。この切り方で、切り出された布片はバイアス状、つまり布の織り糸の方向が各辺に並行しているのではなく、45度斜めになっているのである。これにより布片をモザイク状に縫い合わせ、中綿を包み込む形でさらに縫い合わせていくことで堅固な構造物に仕上がるのである。

このような布の取り扱い方を、日本でよくみられるように織り手の思いが込められた布を切り刻むことを避ける慣行がある文化で行うのは容易でない。布を裁断して使用することはアチェにおいてむしろ一般的な布の扱い方であるように見える。例えば、布に裁縫を施すことや刺繍することはよく観察できるが、布を織ることはアチェで現地調査を重ねても、それほど多く観察できなかった。要するに、多少短絡的であるが、布は作るものではなく、仕入れるもの、交易によって手に入れるものという考え方があり、入手した布は使用目的に合わせて加工するものという考え方が基本にあるように思える。これは、アチェが独自のエスニシティを形成しているときに重農主義がとられていった時代に、布を自給するために農村での生産が普及したのではなく、この時代以前に、交

易が盛んに行われた時代に、布は外から手に入れるものという考え方が定着し、その後農村社会が形成されていったと考えられる。一つの根拠として、16から17世紀にかけてアチェ王国時代に、象、コショウ、錫、その他の香辛料が資源として輸出される一方で、この時代にインドの布（例えば、コロマンデル商人のもたらしたコロマンデルの布）の需要が高く、米、鉄、インディゴや奴隷とともに、この地域にとって交易で得られる大切なモノであったことがある(Andaya 2008: 121-122)。おそらく奴隷以外にも、布を扱う仕立て人も交易人と一緒に渡来したにちがいない。インドからそれほど容易に布が手に入るとしたら、アチェにおける布の生産は限定的になっていても不思議でない。布を裁断すること以外にも、コピア・ムクトゥブの製造過程には、綿を詰めて一旦布を切り離してから、再度、布を縫い合わせるといった組立状の特異な技がある。この技もこの帽子の独自性を理解するために、今後の検討に値する。

コピア・ムクトゥブの現在

ガロットは、標高は数メートルしかない平坦地であるが、2004年12月の津波で被害を受けた沿岸の町シグリから8キロ内陸に入っているため、直接の被害を受けてはいない。スマトラの反対側の海岸沿いの町ムラボのコピア・ムクトゥブ生産者が皆津波で失われたのと対照的である。直接的な海からの災害がない土地であることが、連綿とコピア・ムクトゥブの持続的生産を可能にした背景となっていると言ってもよいだろう。津波以降の急速なコンフリクト状態の解消とともに、かつて国際都市であったバンダアチェに各国からの支援者が滞在するようになり、期間としては数年間だけだが、国際都市に蘇った時期を経て、州政府やその下部にある県が、アチェの観光化に取り組むようになった。観光担当部署や、産業担当部署による「アチェらしい」製品のプロモーションの対象として、コピア・ムクトゥブが再発見されたことは不思議ではない。実際の大きさの帽子がおみやげ物に入るかということ、かさばることから難しく、ミニチュアがおみやげ用に製作されはじめた。真性さの雰囲気は保たれているが本体の段が二段のみの簡略化されたミニチュアである。こうした効果は、今後の持続可能性に、プラスに作用するのか、逆の作用があるのだろうか。最近の1個の値段の下落は、作っても収入源としての価値が下がっていることを示している。また、人口の増加で、結婚する男性が増えていると思えるが、花婿が各自、結婚式用に新しいコピア・ムクトゥブを購入するのではなく、他人から借りたり、レンタルで済ませたりしていることから、必ずしも需要が急増しているわけではない。こうした需要の波があってもガロットの女性生産者たちは、柔軟に対応しているようである。個々に、別の町の仕入れ人からの連絡を得て必要な数を出荷していて、あくまでも生産は個人の副収入の価値付けで行われていると考えられる。このような対応のスタイルは、この帽子の持続的生産を可能にしてきた一要因と考えられる。

他にも現在の生産から判明する、生産の持続性に関わる特徴がある。これまでの現地調査でコピア・ムクトゥブの製品とその生産にたいして規則や規制があるという話を聞

いたことはない。おみやげ品としてのミニチュアが簡略化された形をしていても、真正な形状をしていないということで規制を受けることはない。この帽子の色の組み合わせとデザインを基調にした女性用のバッグが販売用に試作されていた。この品の写真をみて、知識階層のアチェ人女性は、本来のデザインである帽子は頭に被るもので、イスラームでは頭部とそれを覆う物は神聖さをもつと考えられることから、バッグにデザインを転用することはしてはいけないことだと語った。しかし、試作した人が、そう考えたとしたら、試作することはなかっただろう。このように、アチェにおいては衣生活に関わることは現代生活の変化の中で議論を生み出す源泉になっていて、いくつもの解釈が提出され議論されることがある（例えば、Yunis 2009: 7-9 参照）。少なくともコピア・ムクトゥブの場合、生産に関して、ガロット・チュット集落を中心に、水田を隔てて隣の集落で、かつての中心地であったトゥンコップの二つの集落で生産されているだけであるが、他の場所での生産が禁止されているわけではない。生産地や生産者を限定する規則はなく、色や材料の選定を含めて作り方一般も昔ながらの技法が踏襲されているだけである。作り方がすべて決められていて、それから外れるものは規格外あるいは規則違反と判定する者がいるわけではない。生産の調整役や流通・販売を担う人物や組織も存在しない。このようにコピア・ムクトゥブの生産に関して規則に縛られていないことは、生産に関わることも、生産工程のどの部分に関わるかについても、女性自身の自由にまかされていることを意味している。この地域の他の工芸品であるカサブ（金糸刺繍。写真 16）の生産には組合がかかわり、生産者に支援したり振興策を講じたりするのと対照的である。

建造物の頭部へ、イメージへ

本稿では、ガロット村における生産の持続可能性の源泉の探究を中心としているので、コピア・ムクトゥブがイメージとして、あるいは、建物の一部に使われることについては、簡単に触れるだけにする。現在、アチェにはバティック生産がなかったので、導入がはじめられていて、工房の一つでは、コピア・ムクトゥブのイメージをした型（チャップ）をつくり、布へ、このイメージを描くことが始められている。ビジネスで使う名刺の端にも、コピア・ムクトゥブのイメージを描いて、ビジネスの所在地がアチェであることを主張する人が少なからずいる。町の道路の脇や道路を横断するバナーに、政治家がこの帽子をかぶっている姿が描かれたり、英雄トゥク・ウマルの記念日を喧伝する看板にも当然ながらコピア・ムクトゥブをかぶった姿が描かれたりしている。その他にも、大きな催しの知らせなどのイラストの中に、アニメ的に描かれた若者の頭に、この帽子が描かれていて、現代生活の中にも、この伝統的な帽子がいかされている様子を見ることができる。

平面イメージでなく、立体イメージとして、全体の形を大小そのままに再現することも街の中でみることができる。家屋や建物の頂上部に据え付けたり、一般住宅の囲いの柱の上に小さなコピア状の飾りをつけたりしているのをアチェ各地でみることができる。その中でも 1970 年代に、バンダアチェ市内の中心部から南西に伸びる主要道路（ト

ック・ウマル通り)の一角に建設されたモスク(写真2)は、屋根全体が巨大な形をしたコピア・ムクトゥブになっている。本稿の始めに述べたように、このモスクの存在を知り、実際に訪れて、ほとんど正確に再現された巨大な帽子と、モスクとの結びつきに強く印象づけられ、神聖な場であるモスクの屋根の形状がモスク毎に異なる多様性がアチェにあること、また、伝統的あるいは慣習的といつてよいアイテムが神聖な場と結びつけてもかまわないという柔軟性がアチェにあることに気づかされた。津波以後に整備され国際空港の体裁を整えた地元の空港に進入する道路の脇に、一見バス停のような小ぶりの建物もコピア・ムクトゥブの形をしている。その製作意図はなんであれ、空港整備の一環に、この帽子をつかって、空港に出入りする人々に、この地がアチェであることを伝えようとしていることはわかる。こうして、アチェの人々は、個人であれ行政であれ政治家であれコピア・ムクトゥブをイメージ化して、現代生活の中に定着させようとしている。

結論

アチェの衣生活文化にアプローチするために民族誌的調査で使われる探索的観察と取り組むべき事象の直感的な特定をとおして、事象間の相互関連性を最初の現地調査で見いだした。そして、歴史的に長く持続的に生産されてきたと考えられるアチェの衣生活の一つのアイテムであるコピア・ムクトゥブに焦点を合わせ、その後の現地調査と文献調査で得た知識、資料をもとに、さまざまな面からこの帽子の特性について検討してきた。現在の産地ガロットではかつて他の工芸品も作られていたが、その工芸村的性格の名残となっているのが、コピア・ムクトゥブであり、その持続性は、16世紀にまで遡る可能性があるが、おそらくアチェの同時のエスニシティの形成期で成熟し、一般化あるいは世俗化が進み、生産者も特定の職人集団ではなく、農村の女性たちで、農作業の合間に生産してきたと思われる。生家に代々残ってきた女性たちが安定した農村生活と、技の伝承をおこない、この帽子の生産の持続性をもたらした。おそらく世俗化の過程で、この帽子の生産に関わる規制がないのは、イスラームの服装体系でなく、慣習的服装体系の一部と見なされ続けてきたからだろう。現在の生産のしかたをみると、生産者の技だけでなく、農作業に関わる時間的なちがいなどから、生産のすべてを一人でおこなったり、5人ほどで互いに部分を協力しあったり、ある段階までの材料を買って、その後の段階すべてを自分でおこなったりと、多様で柔軟性のある関わりかたができていて、流通が困難の時代でも作り続けて、ストックしておき、需要があると数個ずつ売りに出してきた。こうした需要にたいする鷹揚さ、柔軟さも持続可能性を支えてきた一つであろう。イスラームとの象徴的な意味上の結びつきも解釈され、慣習的なものが、イスラームのものとなっている一例になっている。しかし、現在の生産者が宗教的、あるいは神聖さを認めて生産に従事しているとはいえない。それに加えて、1個の値段がかつての5分の1になっても生産を続けるのは、女性の副業的収入源であることだけが理由ではないようである。技について「昔から、そうしてきた」というように、ガロッ

トの女性は昔からそれを作っていたからという意識が底流にあるように見える。その意識には、アチェ人の結婚式に欠かせないものという意味や、アチェ人の歴史に刻まれた誉れがあるという意味が互いに結びつき、絡み合っていて、残すべきものとしてではなく、作り出していくものとして、この帽子がみなされていることが持続的生産を支えていると思われる。

アチェにおける社会文化的変化の中で生き延びてきたモノであるこの帽子の形状的特徴とその生産の特徴から、この帽子の持続的生産可能性を支えてきた要因は複合的であることがわかった。その生産が残されてきたことで、今後のアチェにおける社会・文化のあり方の模索の中で、当面、かつてと同様にアチェらしさを表象するイメージとして使われ続けられるだろう。この探究をとおして、アチェにおける衣生活文化の布に関わる側面の一端を推測、仮説を交えて理解する一歩が踏み出せた。

文献

- 明石陽至（編）1998『渡邊渡少将軍政（マラヤ・シンガポール）関係史・資料』第三巻、五巻、南方軍政関係史料②編集復刻版、龍溪書舎。第三巻 354 頁、362 頁、第五巻 33-36 頁、402-406 頁。
- Andaya, Leonard Y. 2008 *Leaves of the same tree : trade and ethnicity in the Straits of Melaka*. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- Aspinall, Edward 2009 *Islam and Nation: Separatist Rebellion in Aceh, Indonesia*. Stanford University Press.
- Cort, Louise Allison 1989 *The Changing Fortunes of Three Archaic Japanese Textiles*. In In Annette B. Weiner and Jane Schneider (eds.) *Cloth and Human Experience*. Washington and London: Smithsonian Institution Press. Pp.377-415. (邦訳：ワイナー／シュナイダー『布と人間』佐野敏行訳、ドメス出版、1995年、所収)
- Ichwan, Moch Nur, 2011 *Official ulema and the politics of re-Islamization -- the Majelis Permusyawaratan Ulama, Shari'atization and contested authority in post-new order Aceh*. *Journal of Islamic studies* 22(2): 183-214.
- Latour, Bruno 2005 *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*. New York: Oxford University Press.
- Maxwell, Robyn 1990 *Textiles of Southeast Asia: Tradition, Trade and Transformation*. Oxford University Press.
- Mc. Suprapti (ed.) 1980/81 *Pola Pemukiman Penduduk Pedesaan Daerah Propinsi D.I. Aceh: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah*. (「アチェ特別州の地方居住区の形態」、教育文化局の地方文化考察記録プロジェクト)
- Merry, Michael S. and Milligan, Jeffrey A. 2009 *Complexities of belonging in democratic and*

- democratizing societies -- Islamic identity, ethnicity and citizenship in the Netherlands and Aceh. *Journal of Muslim Minority Affairs* 29(3): 311-323.
- Missbach, Antje 2011 The Acehnese diaspora after the Helsinki Memorandum of Understanding: return challenge and diasporic post-conflict transformations. *Asian Ethnicity* Vol. 12, No. 2, pp. 179-201.
- Nazamuddin, Agussabti, and Syamsuddin Mahmud 2010 Economic Modernization and its Influence on the Social System in Aceh. In Graf, Arndt, Susanne Schröter and Edwin Wieringa (eds.) *Aceh: History, Politics and Culture*. Singapore: ISEAS Publishing.
- Reid, Anthony 1969 *The Contest for North Sumatra: Atjeh, the Netherlands and Britain 1858-1898*. Oxford University Press.
- Reid, Anthony 2005 *An Indonesian Frontier: Acehnese and Other Histories of Sumatra*. Singapore University Press.
- Reid, Anthony 2009 Escaping the burdens of Chineseness. *Asian Ethnicity* Vol. 10, No. 3, Pp. 285-296.
- Reid, Anthony 2010 *Imperial alchemy: nationalism and political identity in Southeast Asia*. Cambridge University Press.
- Sano, Toshiyuki 1997 Women and Revival of Traditional Cloth Making in the Philippines and Japan. In *Proceedings of International Conference on Women in the Asia-Pacific Region: Person, Powers and Politics*. Department of Geography, South East Asian Studies Programme, Center for Advanced Studies of National University of Singapore.
- Schröter, Susanne 2010 *Acehnese Culture(s): Plurality and Homogeneity*. In Graf, Arndt, Susanne Schröter and Edwin Wieringa (eds.) *Aceh: History, Politics and Culture*. Singapore: ISEAS Publishing.
- Spradley, James P. 1980 *Participant Observation*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Waterbury, Ronald 1989 *Embroidery for Tourists: A Contemporary Putting-Out System in Oaxaca, Mexico*. In Annette B. Weiner and Jane Schneider (eds.) *Cloth and Human Experience*. Washington and London: Smithsonian Institution Press. Pp.243-271. ((邦訳: ワイナール/シュナイダー『布と人間』佐野敏行訳、ドメス出版、1995年、所収))
- Yunis, Tabrani 2009 Bertanya Rok Gratis Bupati. *POTRET* Vol.29: 7-9. *Media Perempuan Aceh*.

コピア・ムクトゥブ **Kopiah Meuketob** に関するインドネシア語資料

1. ZZ. Muhammad 1980 *Seni Rupa Aceh II Kabupaten Pidie*: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh:47-50. (「アチェの芸術II ピディ県」、文化省教育文化局)
2. Mc. Suprapti (ed.) 1980/81 *Pola Pemukiman Penduduk Pedesaan Daerah Propinsi D.I. Aceh*: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi

- Kebudayaan Daerah. (「アチェ特別州の地方居住区の形態」、教育文化局の地方文化考察記録プロジェクト)
3. ZZ. Muhammad 1981 *Seni Rupa Aceh IV Kabupaten Aceh Barat*: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh. (「アチェの芸術IV 西アチェ県」、文化省教育文化局)
 4. M. Ahmad Yunus, Tatie Kartikasari 1985/86 *Pakaian Adat Tradisional Daerah Propinsi Daerah Istimewa Aceh*: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Direktorat Jenderal Kebudayaan Direktorat Sejarah dan Nilai Tradisional Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah: 23,33. (「アチェ特別州の伝統的慣習衣服」、教育文化局の歴史と文化調査における地方文化の考察記録プロジェクト)
 5. Tatiek Kartikasari, H. Ahmad Yunus 1986/87 *Arti Perlambang dan fungsi Tata Rias Pengantin dalam Menanamkan Nilai-Nilai Budaya Propinsi Daerah Istimewa Aceh*: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Pusat Penelitian Sejarah dan Budaya Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah:46. (「アチェ特別州の文化価値における婚礼の象徴的意味と装飾様式」、教育文化局の歴史と文化調査における地方文化の考察記録プロジェクト)
 6. Yayasan Meukuta Alam Himpunan Ahli Rias Pengantin Indonesia “Melati” Yayasan INSANI 1990 *Tata Rias dan Upacara Perkawinan Aceh*. (「アチェの婚礼装飾様式と儀式」、インドネシア婚礼装飾協会)
 7. T. Alamsyah Talsya, Abdul Jalil (ed.)1991 *Pedoman Umum Adat Aceh Edisi 1*: Lembaga Adat dan Kebudayaan Aceh (LAKA) Propinsi Daerah Istimewa Aceh:31. (「アチェの一般慣習案内 第1巻」、アチェ特別州アチェ教育文化局)
 8. Museum Negeri Propinsi Daerah Istimewa Aceh 1991/92 *Pameran Khusus Pakaian Adat Aceh dan Perkembangannya*: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Bagian Proyek Pembinaan Permuseuman Daerah Istimewa Aceh: 62. (「アチェの慣習衣服とその開花展」:教育文化局におけるアチェ特別州の博物館推進計画)
 9. H. Badruzzaman Ismail, S.H, M. Hum 2009 *Panduan Adat dalam Masyarakat Aceh*: Diterbitkan oleh Majelis Adat Aceh (MAA) Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam:4-5. (「アチェ社会における慣習案内」、アチェ社会における慣習会議 (MAA))
 10. 筆名不詳 n.d. *Penafsiran Lukisan* (manuscript「絵の解釈」) (保有者 Cut Aja Ainsyah より 2010年5月複写で提供される)

VI 変容するアチェ社会における伝統性と衣生活の理解に向けた試論 — 飲食物にたいする若者の認識特性からのアプローチ —

文化変化を理解するためのモデルとして、同時代における世代間比較、ある世代の継時的追跡による時代間比較が考えられる。それ以外にも、経験の記憶をもとにした個人のライフヒストリー上の比較や、そうした口述の集合的とりまとめによる共通経験の比較などが可能であろう。こうした過去から現在の変化を確認づけるためのモデルは、それによる変化の要因の解明がよりの確にできるかどうかは別にして、時間軸の異なる2点間の単純比較に陥りやすい。これを乗り越えるには、その時点である事象がどのような脈絡で生じているのかを理解することが必要とされる（例えば、クロノン 1995 [1983]: 238-240）。同じ地域内でも、ある変化が一様に一齐に生じる場合はむしろ少なく、その地域内にある不均質性によってモザイク状に生じることがあり、対抗や張り合いを経ながら生じることもある。一齐に生じるのはむしろ強い力によるものと考えられる。モザイク的な生成は地域内にある階層、ジェンダー、エスニシティの違いが主な要因となっていると考えられる。

一方、現在から将来にわたる文化の変化を知るモデルには、過去に生じた変化に関して明らかにされた機構をもとに、関連すると思われる要因が現在どのようなもので、提示されている機構にある要因と比較すると、どのような変化をもたらさうかを予測するものがある。あるいは現時点の現状を出発点として、ある期間において追跡的にその時点での現状を把握し、かつての現状との継時的比較をするモデルもある。しかし、これらは、急速に変化する社会における事象の理解に果たしてどれほど大きな役割を果たすことができるだろうか。すでに知られた機構に関与する要因が変化の中で大きな影響力をもたなくなってしまうたら、どうであろうか。新しい要因が、例えば新しい技術革新によって生み出され、次の変化の要因として影響力を強める場合ではどうであろうか。すでに知られた機構の適用では、十分な理解を得ることは困難になるだろう。そうであるとすれば、変化の機構を理解するモデルは、新たに別に見いだすことが必要となるであろう。

そのために、急速にライフスタイルが変化している地域の事例をもとに、新たなモデルの探究を始めなければならない。ここでは、そうした地域の一つであるアチェを取り上げ、現地調査でアチェ人の衣生活における伝統観に特徴的な文化的差異をとらえたことから、アチェ人の伝統にたいする考え方の様態と、それがどのように変動しているのかを研究上どのように捉えたらよいか探究することにする。急速の変化をもたらした一要因である大地震と津波の被害を受けた後、アチェに関する研究が増加する中で、復興支援の仕方に関する研究の一つ(Kitzbichler 2011)では、伝統的家屋との違いなども検討しながら、新しい住居の建設のプロセスを検討している。多額の支援費が投入され、住居を目にすることが容易であることから住生活は研究対象として取り上げやすい状況がある。しかし、他の生活面の研究はまだ進んでいない。衣生活に関しても、伝統にたいする考え方の変化をとらえた研究が必要となる。例えば、伝統的価値観が現代の衣生活にどのように影響を与え、ど

のように反映されているのだろうか。逆に衣生活の変化がどのように伝統にたいする考え方に影響しているのだろうか。アチェにおける急速な生活変容とは、世界的にしばしば言われる経済のグローバル化の波を受けていることから生じる世界共通の生活変容がみられることのみを指すのではなく、この地域の地域的、歴史的特徴が絡んだ他のインドネシア地域と異なる背景から生じた生活変容のことも含まれるのである。

近年のアチェの生活変容を特徴づける主な背景に次の三つがある。2004年12月の大地震と大津波による打撃からの復興、20世紀後半から大地震・大津波に被災するまで連綿と続いたアチェ分離派とインドネシア政府との武力的対立、そして、アチェの多数派でムスリムであるアチェ人の生活の基本をイスラーム法（シャリア・イスラーム）におく慣行である。二つ目の対立は、一つ目の被災後に急速に解消に向かい、政治的軍事的対立から平和な生活環境の回復によって社会経済的な発展の道筋が作られた。言い換えれば、それまで、急速な生活変容をもたらす基盤が整っていなかった。対立の一方の当事者である分離派の指導者はあくまでも古くから伝来するアチェ独自の固有性を主張し、伝統性を守る立場を表明しつつけていた (Aspinal 2009)。一方、一つ目の復興過程は生活変容の推進役となった。多くの外国からの支援があったことで、新たな資金資材が、災害で失われた額以上に投入され、機関・団体の活動に必要な雇用を生み出しただけでなく、他のインドネシア地域と比較して物価が高くなり、その後もそれが維持される結果をもたらした。そのこともあって、金銭感覚が普段の生活感覚の中にそれまで以上に大きな位置をしめるようになったといわれる。イスラーム法については、それを守ることを大前提に、守り方の解釈が多様化してきていて (Ichwan 2011)、ファッションの興隆にみられるように、基本規則を守りながらも生活スタイルの可変な面では、むしろ、生活変容の促進要因にもなりうるといった柔軟性を含んでいるとみることができる。社会的論議をもたらすと同時に生活変容を巧みに生み出す後ろ盾ともなりうるのである。

伝統的な生活要素の認識の仕方を把握する試み

こうした状況において、アチェの人々の生活は過渡期にあるといえる。そこで、現時点で、変容していると考えられる生活の一端を把握する試みとして、生活の中の伝統的なものにたいする認識の面から探るために、衣食住および家族生活の生活要素からここで取り上げるのは、飲食物である。その理由は、飲食物には伝統的な性質をもつアイテムがかなりの数があり、一方、非伝統的あるいは新規なアイテムもかなりの数があり、それぞれが単独で取り上げて判定の対象にすることができるためである。また、バンダアチェ市内には2010年時点でファーストフード店が数店しかなく今後増加が予測され、この変化の中で食生活を送っている若者層に新しい飲食物にたいする好み浸透し始めていると考えられることから、今後の変化の追跡を追うことで変化の機構を将来さらに探るのに基礎的資料を提供できると考えたからである。若者の中でも十代半ばの中高生は伝統といった社会概念の理解がすでにできていると思われ、今後10～20年後の生活変化の主な推進役を果たすと考えられることから、15歳前後の生徒に調査の協力を得ることにした。バンダアチェには、アチェ人の他に、歴史的に華人住民も生活してきたことから、特徴の把握を的確にするために、エスニシティの異なる両者を対照させることにし、文化習慣や宗教が異なる華人の同年齢の若者にも協力を得た。

調査期間（2011年11月初旬の4日間）中に得られる協力者の数が限られることから、この資料収集の主目的は、食生活における伝統的なものにたいする認識の全容を解明するのではなく、個人間の多様さと連続的な変化の様相を示唆する資料を得ることであった。このための方法として、飲食物のメニューから、決められた数のメニューを選び、一つのメニュー一つのアイテムとして一枚のカードにその名称を記し、一揃いの束にして、協力者が全体のカードをグループ分けしたり、順位（ランク）づけしたりするフラッシュカード法を採用した（c.f., Jenike et al 2011）。この方法は、ある文化の一領域から一揃いのアイテムを使用し、それぞれのアイテムの分類や順位付けをすることにより、その人の認識地図を各アイテムの相対的な位置関係から知るのに役立つ、また、数十人の結果を比較対照させることで共有された認識の仕方や文化的知識のあり方を把握するのに、使われている。今回、協力者がおこなうことは、フラッシュカードを使って分類とランク付けすることであり、その基準として、「伝統的である」ことと、「好みである」ことを用いた。

カードに記載する飲食物の選定をするために、雑誌、書籍およびインドネシア料理を知る人から、よく知られた飲食物のメニュー91種を選んだ。そのうち、先行研究(Jenike et al 2011)でアメリカ中西部の十代の生徒に用いたアイテムの数を36種にしたのを参考に、今後この先行研究との比較も視野にあることから、バンダアチェでも36種のアイテムを選んだ。その手順は、まず事前調査でよく知られた飲食物91種を表にし、そこから華人およびアチェ人の15歳前後の生徒数名に、よく食べたり飲んだりするものに印をつけてもらうことから始めた。この結果から頻度の高いアイテムを取り出し、また、飲み物も先行研究に合わせて二割程含まれるようにして36種を選び出した。華人とアチェ人との間で頻度の大きさに違いがあり、共通のアイテムは36種中24種となった。カード（10x15cm）は、同時に複数の協力者がカードを操作できるように華人用とアチェ人用に各3組作った。

協力者によるカード操作は、最初に、伝統に関する分類操作と順位付け操作、次に、好みに関する分類操作と順序づけ操作からなる。具体的な操作は順に、(1-a) 伝統的なもの、そうでないもの、どちらともいえないもの、にグループ分けをした後、(1-b) 伝統的なもの、そうでないもののグループそれぞれに、より伝統的か、より伝統的でないかの基準で、順位づけをおこなう。続けて、(2-a) 好きなもの、そうでないもの、どちらともいえないもの、にグループ分けした後、(2-b) 好きなもの、そうでないもののグループそれぞれに、より好きか、よりそうでないかの基準で順位づけをする。

これら一連の操作を、華人11名(13~16歳、男8、女3)と、アチェ人15名(12~18歳、男1、女14)にしてもらった(表1)。アチェ人は、バンダアチェ市内から少し西に所在する学校の教室を借用している語学教室に参加している十代である。男子生徒がいても17歳以下が一人だったので、この一人以外のアチェ人協力者は女である。華人の協力者はバンダアチェ市内中心部に住み、調査日が祭日だったので、数名は公共の場で、それ以外は各自の家でカード分類とランク付けをしてもらった。祭日のため女子生徒の不在が多く、結果的に男の数が多くなった。

現地で得た資料は、Y軸を好み軸（好きを+、そうでないを-）、X軸を伝統軸（伝統的なものを+、そうでないを-）とする散布図として、食物別および個人別にまとめた。これらの散布図の比較検討によって、アチェにおける伝統的なものに対する認識仕方の一端を明らかにし、衣生活における伝統の捉え方を理解するための洞察を得ることとする。

ここで先に進む前に注意しておきたいことは、協力者である十代の若者に依頼した作業は、個人が伝統を的確に認識しているかどうか、各自が伝統の意味を的確に理解しているかどうか、といった能力の差を明らかにするためのものではない。それは、伝統的なものの選別と、選別したもののランクづけをとおして、各自の伝統的なイメージが飲食物をとおして認識地図にどう配置されているかを明らかにするためのものである。

以上の方法で得た資料を散布図にまとめ、それをもとにタイプ分けした結果が表3である。この表の検討を以下でおこなう。アチェ人と華人の共通アイテムの24、アチェ人と華人それぞれに個別のアイテム12、計48の散布図は、本稿では紙面の都合で例示的に散布図1～6のみを示す（各アイテムの内容説明は表2を参照）。

表1 調査協力者一覧

アチェ人			華人		
	年齢	性別		年齢	性別
A1	15	女	C1	15	女
A2	13	女	C2	16	女
A3	12	女	C3	15	男
A4	16	女	C4	16	男
A5	14	男	C5	15	男
A6	17	女	C6	16	男
A7	14	女	C7	14	男
A8	17	女	C8	14	男
A9	16	女	C9	13	男
A10	15	女	C10	16	男
A11	14	女	C11	14	女
A12	15	女			
A13	13	女			
A14	16	女			
A15	13	女			

伝統的アイテム

普段の食生活の中に伝統的とみなせるアイテムがあるかどうかみると、確かに、アチェ人と華人それぞれに存在する。明らかにそう思うとするアイテムは、アチェ人が7、華人が5で大きな差があるとはいえない。しかし、不明とする者がいながらも伝統的であるとみなす者が多いアイテムは、アチェ人が6、華人が0で差がみられる。さらに、どちらかの見方に分かれるが伝統的とみなす者が多いアイテムをみると、アチェ人が2、華人が10と、逆の差がみられる。このように、散布状態が異なり不明者がいたり伝統的ではないと考える者もいたりしながらも、伝統的であるとみなす者が多いアイテムと、明確に伝統的であるアイテムとを合わせるとアチェ人で15、華人で15となり、一見して差がなくなる。このようにみると、身近な飲食物アイテムの4割程が伝統的とみなされたものであることが示唆される。しかし、散布状態が異なることに注意する必要がある。例えば、アチェ人と華人の十代に共通して「伝統的である」グループに入れている「ミー・アチェ」(散布図1)と「テンペ」(散布図2)の散布図を比較してわかるように、散布図の散布状態は異なる。これらから、好き嫌いは別として、伝統的とみなされるアイテムには、その土地で生活する者に共通した認識でとらえられているアイテムがあるといえる。

伝統的でないアイテム

一方、普段の食生活に伝統的とはいえないアイテムがあるかどうかみると、明確にそう判断されたのは、アチェ人で3、華人で6と差がみられ、アチェ人に少ない。しかし、不

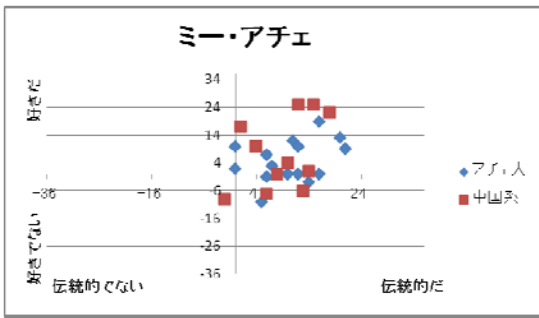
明の者がいながら伝統的でないとする者が多いアイテムをみると、アチェ人で12、華人で2であった。これだけでは、アチェ人に伝統的でないアイテムが多いと思える。しかしさらに、どちらかの見方に分かれるが伝統的でないとする者のほうが多いアイテムをみると、アチェ人で0、華人で8となり、再び逆の差がみられる。伝統的であるアイテムでまとめたように、散布状態が異なり不明者がいたり伝統的ではないと考える者もいたりしながらも、伝統的といえないとする者が多いアイテムと、明確に伝統的といえないアイテムとを合わせてみると、アチェ人で15、華人で16となり、伝統的といえるアイテムと差がない。このことは、身近な飲食物アイテムの4割程が伝統的といえないとみなされていることを示している。

ここで着目しておきたいのは、アチェ人に、華人とは対照的に、不明（あるいはどちらか判断できない）とされたアイテムが多いことである。この点は、伝統的であると見なしたアイテムにも不明の者がいたアイテムがありながらもアチェ人と華人の間に差がなかったことと大きく異なっている。

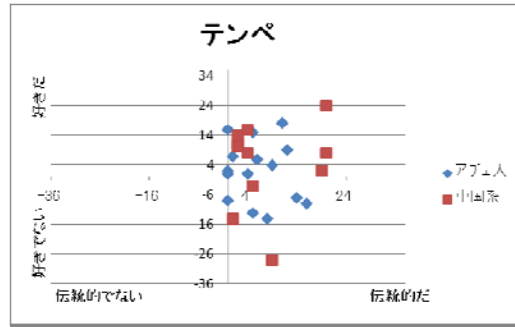
伝統的かどうか分かれる、あるいは不明のアイテム

以上で取り上げた以外のアイテムは、アチェ人で6、華人で5あり、これらは、伝統的かどうかの見方が二つに分かれたアイテムと、不明とするものが多くそのためばらつきが少ないアイテム（表1で#を付した）からなる。前者のアイテムはアチェ人で3、華人で3みられ、後者のアイテムはアチェ人で3、華人で2みられる。前者は、基本的に見方が大きく二つに分かれていることから一見すると曖昧なアイテムと思える。一方、後者は基本的に不明であることで一致していて、一見すると曖昧さはないといえる。しかし、前者にしる後者にしる、字義通りの曖昧さをアイテムそのものが華人とアチェ人で同じようにもっているとは、生活習慣や宗教の違いを考慮すると考えにくい。

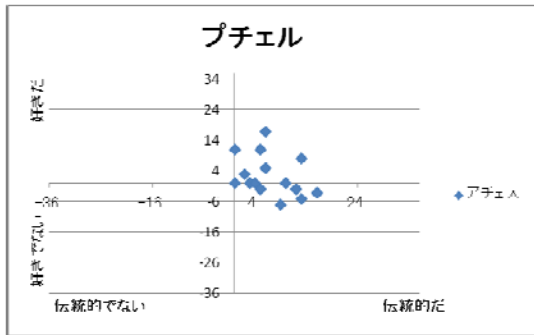
この点について、アチェ人と華人に共通したアイテムの「シオ・マイ」（日本のシュウマイに近い）を取り上げてみる。これは、アチェ人にとって、伝統的かどうか不明であることで大半の者が一致したアイテムである一方で、華人にとっては、伝統的とする者と、そうみない者に分かれる。アチェ人の見方の一致は、このアイテムは、おそらく自分たちのものではなかったが、最近新しく存在するようになったものでもないという理由から、伝統的かどうか明確でない、つまり彼らにとって曖昧なアイテムとなっているといえよう。華人にとっては、伝統的とする者も、そうみない者も明確にそうみていることで、個々人の華人にとって曖昧なアイテムではないといえる。その理由は、おそらく華人の間に家族の出身地の違いによる食生活の違いが関係したり、インドネシアに滞在している期間の違い（二世、三世など）による馴染みの違いが関係したりしていると思われる。あるいは、おそらく、華人の間で、インドネシア人として生活していて、アチェあるいはインドネシアの脈絡からすると華人のアイテムであるので、伝統的でないとした者もいる可能性がある。実際にこうした理由が当てはまるかどうかは今後の調査の課題である。



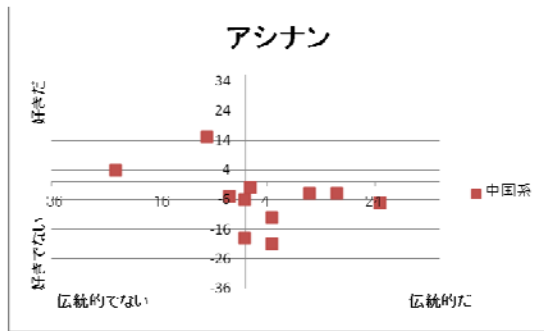
散布図 1



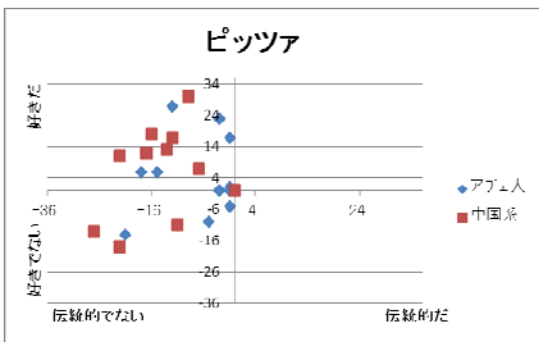
散布図 2



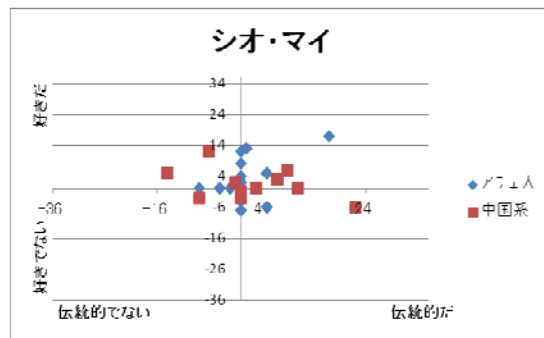
散布図 3



散布図 4



散布図 5



散布図 6

表2 飲食物の説明	
飲食物名ー共通 24種	
アイル・ジュルック	オレンジジュース
アイル・クラバ	ココナッツジュース
アイル	水
アヤム・ゴレン	鶏の骨付き肉のから揚げ
アヤム・タンカップ	フライドチキン
バクソ	肉や魚のつみれ
ココ・コーラ	コココーラ
ドーナツ	ドーナツ
ゴレン・ビスティク・アヤム	鶏胸肉を薄くのばして揚げた料理
ジュス・ジュルク	オレンジジュース
クンタン・ゴレン	フライドポテト
マルタバ・アシン	小麦粉で作った生地を玉ねぎやひき肉などと一緒に卵で包み焼いた料理
マルタバ・マニス	中にチョコなど好みのトッピングを入れて焼いたパンケーキのような料理
ミー・アチェ	肉や魚介の入った甘辛く酸味のあるアチェの麺料理
ミー・アヤム	鶏肉がトッピングされた麺にスープをかけて食べる料理
ミー・パンシット	ワンタン麺
ナシ・ゴレン・トゥールール	卵入りの焼き飯
ブルメン	餡
ピサン・ゴレン	バナナの揚げ物
ピッツァ	ピザ
ルジャック・アチェ	ルジャックにアチェならではの材料を使ったもの
シオ・マイ	しゅうまい
スス	牛乳
テンベ	大豆の発酵食品
飲食物名ー華人(バンダアチェ) 12種	
アシナン	野菜や果物の漬物
バク・バオ	肉まん
バクワン	キャベツのかき揚げ
ブブル・アヤム	鶏のお粥
ドドル	ココナッツともち米を練って作った甘い餅菓子
エス・クリム	アイスクリーム
カチャン・ゴレン	フライドビーナツ
クルブック	えびの揚げせんべい
ミー・クア	ラーメン
ナシ・ゴレン	焼き飯
ルジャック	様々な果物を甘味料やスパイスで和えたデザート
タフ・イシ	豆腐のはさみ揚げ
飲食物名ーアチェ人(バンダアチェ) 12種	
アヤム・バカル	鶏肉のグリル
アヤム・ルバス	スパイシーな鶏の唐揚げ
エス・チャンプルー	練乳またはココナッツミルク入りのシロップに氷やカラフルなゼリー、果物が入ったデザート
グライ・アチェ	アチェ風スープカレー
イカン・バカル	焼き魚の一種
ロントン	小さく切っておかずとともに食べられる調味されていないちまき。
ミー・バソ	牛肉団子入り麺
ナシ・クニン	ターメリックライス。祝いの席やレストランでも出される
プチェル	いろいろな茹で野菜をココナッツやビーナツ、タマリンドなどで和えた料理
ロティ・バカル	本のように開いた1斤の食パンにマーガリンを塗ってこんがり焼き、ジャムなどを挟んだもの
サテ・カンビン	山羊の串焼き
ソト・アヤム	鶏肉のスープ

表3 アチェの十代による飲食物の分類・ランク付けから作成したアイテム別散布図のタイプ分け

	伝統的でない	伝統的でない>伝統的	伝統的でない<伝統的	伝統的	伝統的でない/不明	伝統的でない/不明/伝統的	不明/伝統的
アチェ人十代				ナシ・クニン ブチェル グライ・アチェ ソト・アヤム サデ・カンビン	アヤム・バカール アヤム・ルバス ロティ・バカール スス# アヤム・ゴレン アヤム・タンカップ アイル・ジュルック ドーナツ クンタン・ゴレン	イカン・バカール ミー・パソ#	エス・チャンプール ロントン テンベ ピサン・ゴレン アイル・クラブ マルタバ
共通	ゴレン・ビスティック・アヤム コココーラ ピッツァ			ミー・アチェ ルジャック・アチェ	ミー・インスタン ブルメン ジュス・ジュルック*	シオ・マイ* (アチェ人#)	
華人十代	ドーナツ クンタン・ゴレン エス・クリーム	ナシ・ゴレン・トゥルール アヤム・ゴレン アヤム・タンカップ ミー・アヤム ミー・パンシット スス ナシ・ゴレン**	アイル マルタバ パソ アイル・クラブ ピサン・ゴレン クルブック** バク・バオ アシナン バクワン タフ・イン	テンベ ドドル ルジャック		アイル・ジュルック# カチャシ・ゴレン# プブール・アヤム ミー・クア	

注 網かけ部分：アチェ人と華人で共通のアイテムのうち、散布図のタイプが異なるアイテム。

*：散布図のタイプは同じだが、分散の仕方がアチェ人と華人とで異なるアイテム。

**：飲食物の数を36種に限定したため、アチェ人にもなじみだがアチェ人の選択肢に含まれていないアイテム。

不明が多い

が無いのは、不明が少ない

表4 バンダアチェの十代の個人別散布図のタイプ

		不明が少ない			不明が多い		
ランク範囲		->+	-/+	-<+	-/?	-/?/+	?/+
ア チ ェ 人	不明に集中					A1, A6	
	±10以内					A2	
	±15以内					A3, A10, A15	A12
	±20以内	A5*		A7, A11, A14		A8, A9, A13	A4
	±25以内						
華 人	不明に集中						
	±10以内						
	±15以内					C4*, C8*	
	±20以内	C11	C2, C10*	C3*, C6*	C7*		
	±25以内	C1, C9*		C5*			

注

・ * : 男。無印 : 女。

・ ランク範囲の説明

数値は、分散図のX軸（伝統的（+）、そうでない（-））上のランク値を表す。
大きい値ほど不明のアイテムの数が少なくなる。

・ 記号の説明

伝統的かそうでないかについて不明が少ない場合

->+	: 伝統的なものが、そうでないものより多い。
-/+	: 伝統的とそうでないものを等分。
-<+	: 伝統的でないものが、伝統的なものより多い。

伝統的かそうでないかについて不明が多い場合

-/?	: 伝統的でないものが多い。
-/?/+	: 不明に集中、あるいは、伝統的とそうでないものを等分。
?/+	: 伝統的なものが多い。

知見の要約 ここで、これまで明確になったことをまとめる。

- (1) アチェの十代の間で、身近な飲食物の中に、明確に伝統的であると認識しているアイテムがあり、また、明確に伝統的でないと認識しているアイテムもある。そのいずれのアイテムにも、少数ながらアチェ人と華人で共有するアイテムがある。アチェ人と華人を比較すると、アチェ人の間に、より多くの伝統的とみるアイテムがあり、中国人の間に、より多くの伝統的といえないとみるアイテムがある。
- (2) 伝統的とみる者が比較的多いアイテムと、そういえないとみる者が比較的多いアイテムを、アチェ人と華人で比較すると、アチェ人では、後者がより多く、華人では前者がより多い。
- (3) 上記(1)と(2)で述べたアイテムを、アチェ人と華人で別々に合わせると、身近な飲食物のうち、より伝統的なアイテムと、より伝統的といえないアイテムがそれぞれ4割程をしめていて、両者間に違いがない。残りのアイテムは、どちらか分からないアイテムと、見方が二つに分かれるアイテムである。
- (4) アチェ人と華人との間で明確に対照的なのは、上記(2)で述べた、伝統的であるとみる者が比較的多いアイテムと、そうでないとみる者が比較的多いアイテムに、伝統的かどうか分からない（表中では不明と記されている）とみる者が、アチェ人のほうに多いことである。

これらの知見は、過渡的な状況の中で変化している衣生活を含めたライフスタイルの諸相を、部分的であるにせよ、反映していると考えられる。これから、衣生活の面にしぼって、これらの知見がもたらすことは何かを検討することになるが、その前に、これまで使

用した飲食物の資料を別の角度から、つまり、個人を中心にして分析することで、一人一人の生活環境における伝統性のあり方についてみておくことにする。これにより、モノを中心にする視点から離れ、人間を中心にした視点から、個人にとって伝統的なモノがどれほど身近にあるのか、あるいは、ないのか、また、伝統的であることをどう認識しているのかの一端を明らかにすることができる。この知見は、アチェの人々が衣生活を見るときの見方を理解するときに役立つだろう。

個人別の散布図をもとにした検討

これまでアチェの十代の協力によって得られた伝統と好みの認識の仕方に関する資料を、食生活のアイテム別に整理して、散布図にまとめ、そのタイプ分けをとおして、いくつかの知見を得てきた。同様の資料のまとめ方を、協力者個人別におこなうことで、これまでで得た知見を補強する知見を得ることができる。先に進む前に、資料収集の過程で生じた資料にかかるバイアスについて検討し、それらが後の知見の解釈に与える影響を吟味しておく。まず、協力者の性別について、全体では偏りが少ないが、エスニシティ別では、華人は女にアチェ人は男に偏っている。この違いは、エスニシティ間の比較対照にどう影響するだろうか。個人別散布図のタイプ分けの表4から、アチェ人男子生徒1人と中国人女子生徒2人が興味深いことに、より多くのアイテムを伝統的といえないとみているタイプに入っている。一方、アチェ人女子生徒には、そうしたタイプに入る者がいない。彼女たちは、等分に伝統的なものとそういえないものを認識しているか、より多くのアイテムを伝統的であるとみている。華人男子生徒の場合は、こうした見方のすべてに分散している。つまり、今回の協力者のエスニシティ別の性別の偏りに着目すると、アチェ人女子生徒と華人男子生徒の違いは、アチェ人に、より多くのアイテムを伝統的といえないとみる者がいないこと、中国人男子生徒に、そうみる者がいることにあるといえる。こうした性別の偏りからくる特徴の把握は、この偏りが資料をゆがめているとみるよりも、興味深い検討項目の示唆につながると考えるべきである。そうした項目については後述する。

さらに、別なバイアスとなりうることをみしてみる。それは、比較すべき資料の基盤が、アチェ人と華人との間ですべて共通でないことについてである。飲食物アイテム36種類の選定過程から結果的に、アチェ人と華人とで共通したアイテムが24種となり、それぞれ独自のアイテムが12種となった。上限が設定されていることで、独自といっても、共通して馴染みのあるアイテムのものが別個に含まれていて、エスニシティ的に限定的なアイテムは華人のアシナンやタフ・イシのようにわずかだった。こうしたエスニシティ間で異なるアイテムにたいする認識の仕方を資料として、伝統性のあり方を比較するとき、個別のアイテムの中に伝統的である、あるいは、そういえないアイテムが、比較する相手より多い、あるいは、少ない場合、結果にもその多少が影響して、結果の分析が歪むという疑問が生じる。今回の場合、飲食物別の散布図のタイプ分けをした表が示しているように、幸いなことに、アチェ人に独自のアイテムも、華人に独自のアイテムも、それぞれに、伝統的であると見られているアイテムであった。このことから、すくなくとも今回の資料の基盤に伝統性の認識の分析にゆがみをもたらすものではないと考えられる。

表4に個人別の散布図のタイプ分けを示す。この表から、アチェ人と華人との間に、二つの関連した顕著な対照点があることがわかる。一つは、性別による対照点として既述したように、アチェ人は、身近な飲食物のアイテムを伝統的であるものとそうでないものと

に均等して認識している者と、より多くのアイテムを伝統的であると認識している者からなっている。言い換えれば、より多くのアイテムを伝統的といえないと認識している者がいなかった。一方、華人の生徒には、より多くのアイテムを伝統的と認識する者、より多くのアイテムを伝統的といえないと認識する者、そして、伝統的であるアイテムとそうといえないアイテムを均等に分けて認識する者がいた。言い換えれば、華人のほうがアチェ人よりも認識の幅が広いといえる。これらから、アチェ人は身近な生活アイテムを伝統的なものとしてみならず傾向があると短絡的に結論づけることはできない。アチェ人にも、飲食物アイテムを伝統的であるものと、そうといえないものとを均等にわけている者がいるし、伝統的といえないものを明確に認識している者がいるからである。アチェ人の傾向は、むしろ次の二つ目の対照点から導きだせると考えられる。

二つ目の対照点は、アチェ人の中に飲食物のアイテムを伝統的であるかないか区別しない者が華人よりもより顕著に存在することである。一見これとは別の対照点にみえること——華人で散布図のX軸（伝統的である／そういえない）上での分散がアチェ人よりも幅広くなっている点——は、この二つ目の対照点から生じた特徴である。不明とみるアイテムが多くなればなるほど、残りのアイテムが少なくなり、それらをランク付けする幅が狭まることになるのである。

この対照点は、認識できるかできないかの違い、つまり能力差を示しているのではない。その理由は、飲食物のアイテム別にみたとき、不明の者がいるものの大半の者が伝統的であるとみたり、そうといえないとみたりするアイテムがそれぞれ全体の4割あり、このことは大半の者の判断が明確になされていることを意味しているし、また、個人的にみた場合、不明とするアイテム数に幅があり、何か一つの傾向があるというよりは、比較的分散しているといえるからである。それでは、この対照点は何を示しているのであろうか。

個人間の能力差が多少関与していることは今回の資料収集の過程で観察したことから否定できないが、瞬時に分類したりランク付けしたりする操作を同様におこなった結果もたらされた、アチェ人と華人との間の対照点は一つの発見である。予想していたことは、植民地化への抵抗や中央政府からの分離運動をとおしてアチェらしさが意識されてきたことから伝統性の保持志向が日常生活の中にも連なってきたのではないかと考え、伝統的な事物を色濃く残しながらも新しい事物が入ってきていることがアチェ人十代の認識にみられるのではないかとということであった。一方、華人にたいしては、インドネシア国内でのルーツ的文化表象が抑制されてきた経験の中で、また、出来事があるたびに移動（待避的を含む）と再移動（回帰的を含む）を繰り返してきた経験をもつことから、地域的にアチェに限らずインドネシア的な生活様式の保持があるなかで近年のエスニシティに関わる文化表象の自由化に合わせて、日常生活に彼らにとっての伝統性を見直しの兆候がみられるのではないかとということであった。

区別できない「あいまい」なものとみることについて

飲食物のアイテムの中に、「あいまい」なものとみる者がアチェ人の中に必ずいること、アチェ人個人をみても、多少の差があっても、各自の身の回りの飲食物のなかに必ず「あいまい」なものが存在することは、伝統のとらえかたに関して、どのようなことを示唆しているのであろうか。ここで、推測できることは、瞬時に判断できないことは、判断しないでよいものとして置いておいても差し支えないという認識的な態度が存在するのではな

いかということである。その前提のもとに、以前からそこにあるものとしてみなせるアイテムがあるとすると、インドネシア的や華人的といえてもアチェだけのものとはいえない場合は「あいまい」なアイテムとなるだろう。こうしたときに、もし、アチェの要素が明確に入っていれば、その他の文化的、地域的要素が入っていたとしても、伝統的なアチェらしさをもったものとなるのと考えられる。

他方、華人の間で、明確に伝統的であるものとそういえないものを分ける態度がみられることはどのように解釈できるだろうか。アチェの華人十代は、1998年までの言語をはじめとする中国的要素を公的な場で使用できなかった経験や、その後も軍事的対立が激化する状況にアチェ人とは異なる立場で対処しなければならなかった経験をもつ世代を親にもつが、彼ら自身は、そうした生活上の困難さを経験しないで成長してきた。しかし、家庭内において親世代は、生活上の自由さが増していく中でも、将来に不透明さが残る社会的状況のなかで慎重に堅実に生活を送る態度を堅持してきたと思われ、十代の子どもたちもそうした態度を成長過程でみにつけていると思われる。分離独立派と政府との対立が続いていたとき状況判断はあいまいにすることはできず、明確に判断して、メダンを中心に親戚・知人のいる別の町に一時待避することは生活を守るために必要であった。また、メダンの華人の工場経営者が述べたように、アチェの華人は「朝に政府軍兵士が来て、夕方には GAM (自由アチェ運動)の兵士が来てお金をせびられてきた」ことに対処するには、相手を明確に区別し、それぞれのために用意しておくべきものを用意しておかなければならなかっただろうし、相手から疑われないように明確な態度を示す必要があっただろう。一時的にしる、ある事物を「あいまいな」ままに残しておくことはできず、もしそうすればかえってリスクが大きくなることが予測されたと思われる。

こうした過去の経験が生活態度を形成すると考えるアプローチには、今後さらに根拠づけるための探究が必要である。しかし、今回提示した資料のまとめは予備調査的な段階にありながら、興味深い示唆に富んでいる。過去の経験が現在の生活態度の形成に影響を与えていることはアチェ人と華人とで同様に考えてもよいであろう。ただし、過去の経験が一律にアチェ人の間で共有されていると考えられても、華人の間ではそう考えることはできないだろう。アチェ人はアチェにおける定住生活者であるのにたいして、華人は祖先の出身地が異なり（アチェには客家（ハッカ）が多く、海南や福建、広東などの出身者もいる）、インドネシア（あるいはマラッカ海峡地域）で何世代暮らしてきたかに違いがあり、状況変化に対応した親戚・親族・知人のいる移動（待避的）先の違い（メダン、ジャカルタ、その他）などもあり、多様である。こうした点でのアチェ人と華人との違いが、飲食物アイテムの認識にみられた個人間の違い——アチェ人は華人よりも個人間の違いが少ない傾向がみられる——に反映されているように見える。

さらに、別の興味深い示唆について触れておく。既述のように、アチェ人と華人ではカード操作協力者の性別人数に偏りがあった。この偏りそのものでなく、この偏りにより人数が少ないながらも性別による伝統性の認識の違いが、アチェ人と華人の間に性別によって異なる移動性と結びついている可能性が示唆される。アチェ人男子生徒と華人女子生徒は、伝統的といえないアイテムとして身近なアイテムをより多く認識する点で共通していた。人数が少ないために個人差が影響している可能性が大きいですが、もし、その影響だけではないことがあるとすれば、考えられることは、アチェ人社会は比較的母権的特性をもって

いるのにたいして、華人社会は父権的特性をもっていて、この特性により、アチェ人では男性が成人するときに自分の故郷から離れたところで成功することが期待されている (Schröter 2010: 162)。女性が定着的な役割を果たすことになる。一方、華人では女性が比較的自由に移動でき、男性が誰でもではないにしろ、定着的（あるいは後継的）な役割を果たすことが期待される。こうして、アチェ人では男性が、華人では女性が比較的自由に移動をとおして新規なもの、伝統的とはいえないものを、みる見方が備わっていると考えられる。そうであるとする、伝統的な要素をもつものを、そうした見方が備わっていなければ、伝統的とはいえないとはい切れず、備わっていれば、新しいものに伝統的な要素を加えたとみることで、新規なものであり、伝統的とはいえないものになりうる。

これまでの検討結果とアチェの衣生活

アチェ人の衣生活を理解するとき、人々が口にする「アチェ人の伝統的な服装は、イスラーム的である」という言い方に出会う。この言を単純に、アチェ人の服装はイスラームの教えに合っていると解釈することは間違いではないが、この言はそれ以上に探求すべき課題を提起している。生活の一部である衣生活の伝統的な側面に、アチェ人が形成してきた文化の一部としての特徴が伝えられていると考えると、イスラーム教の浸透以前からの文化的特徴を残す服装もあるのではないかと推量にいきつく。しかし、アチェ的なものは、イスラーム的なものであるという言い方もよく口にされていて、両者は一体のものであるという認識が存在している。このため、この推量を確かめる手立て探ることは容易ではない。アチェにおける対立を文化面からアプローチしようとした *Aspinall (2009)* も、上述の言が含意するようにアチェのエスニック・アイデンティティがイスラーム的アイデンティティと同一に認識していることに直面して、アチェ的なエスニシティをより明確にしようとしたにもかかわらず、明確な把握に至らなかった。結局、それは明確なものではなく、むしろ柔軟性をもったものとして把握すべきだと思われる。

こうして、歴史的に、アチェ的なエスニシティが確立していくとき、イスラームらしさを取り入れ、1511年にポルトガルがマラッカを破壊した後から、ジョホールが勢力を伸ばしてアチェの影響力が衰退する17世紀後半まで、ひろくマラッカ海峡地域に君臨した時代 (*Andaya 2008*) に、タイ的なもの、インド的なもの、中国的なもの、マレイ的なもの、トルコのなもの、アラビア的なものが交易活動の流れのなかで交叉しながら、組み込まれていったと考えられる。しかしながら、*Andaya (2008: 129)*が指摘したように、アチェ社会の基盤はあくまでもイスラームにあり、マラッカからジョホールにつながる王国が代表する文化が、土着の考え、ヒンズー的・仏教的考え、そしてイスラーム的考えが混合したもの（アマルガム）であるのと対照的なのである。*Andaya (2008)*がアチェのエスニシティ・アイデンティティの形成について議論したことも含めて彼の議論を参照しながら考えると、現在に至るアチェ的なあり方がより特徴づいたものへと形成されたのは、ジョホールをオランダが占めるようになり、このスルタンの勢力が強まることをきっかけとして、アチェは、スマトラ島において、ジョホール王国とは異なる独自性を築くことに専念したと考えられる。

こうした過程で、柔軟に、組み込んだものを分けられないものとして認めること、分けられないものは分けられないものとして認識すること、それが可能なのはイスラームが基

盤にあるからであるという認識のしかたが形成されていったと考えられる。こうして、イスラーム以前に生み出されたアチェ的なものがあったとしても、そうした過程でイスラームの基盤にのるものへと変容して伝わることになり、アチェ的なものはイスラーム的なものと考えられることに繋がる。このことに関連して、Andaya (2008: 137) が、「アチェは16世紀初めに一つのイスラーム王国として創建され、それから約2世紀をかけて、イスラーム教を宮廷と一般社会におけるライフスタイルの中に統合させた」と述べているように、王国を支える国民の生活様式の変容があるなかで、彼らの衣生活も食生活も変容した。

筆者が共同研究者とアチェ各地で現地調査を行ったときの聞き取りと観察からいえることは、アチェの衣生活の中で、我々が想像するようなその土地に伝わるアチェ的なものは、男性用の場合、公式な場に着用する正装用のジャケットと帽子（コピア・ムクトゥブ）に限定されるということである。最近では政治家が選挙用の看板などで着用している写真が目につく。こうした政治とアチェ的服装との結び付きは1993年に発行された雑誌の写真が示すように、少なくとも20年以上に遡る。しかし、この衣装は一般的には婚礼時にモスクでの儀式的後に、花嫁の実家で行われる儀式で男性が着用すると考えられている。この正装に装具としての小刀が装着され、アチェ的なものとみなされていることからそのデザインが服、布、壁などに使われている。これ以外にアチェ的な服飾には女性の実家での婚礼衣装がある。他にも実家に花婿を迎える出迎えの女性集団が着用するカラフルな服装があるが、アチェ的というよりも、その土地に限定されたものであると思われる。その理由は2011年8月のラマダン明けの祭事で各地区から出場した大太鼓を載せた山車の後に従う男性集団のユニフォームも各グループで異なっていたからである。さらによく知られたアチェ的なものとして、アチェ風の扉（ピント・アチェ）がデザインとして装飾品や服・布に使われている。

Smith (1997)が『アチェ——芸術と文化』の中で工芸品、建築物、文芸、パフォーマンスと多岐にわたるアイテムを紹介し、衣生活にかかわるものにデザインや、先述の小刀がある。しかし、そこで紹介している服は、パフォーマンス用の衣装といえるものであり、男性正装用の帽子について簡単に述べているのみで、先述した正装用の服装そのものの紹介をしていない。なぜ、男性の正装であるジャケットと帽子（コピア・ムクトゥブ）をアチェらしいアイテムとして、より詳しく紹介しなかったのだろうか。その理由として考えられることは、その発行年が示すように当時は、スハルト政権下でアチェにおける対立が続いているなかで、政治的指導者や知識人がアチェらしさを表明するために着用していることが多い服装を紹介することは、政治的色彩が濃くなる恐れがあった可能性があるということである。内容を芸術と文化に絞り込んだためであるともいえる。

こうしてアチェの衣生活は、共同研究者の松本が各地の服飾に関する知見をもたらしたように丹念にみることで多様なありかたが見えてくるが、一見して一般人の注目を集めるような特異で奇抜な製法、着装法、色彩、デザイン、形状が存在するわけではない。それにもかかわらず、地域的、歴史的、交易的、宗教的、政治的な興味深さ、そして、文化接触やアイデンティティ形成、華人を含めたエスニシティ間の関係性の特徴は、アチェの衣生活を理解する上で欠かせないものであることが明らかになってきている。アチェは、他の地域と同様に、布や服と人間経験についての探究に、興味深い事例を提供しているのである。

結論

現在、幸いなことに、アチェの文化・社会に関する研究が、政治、経済、紛争、平和、防災、復興支援などの研究の増加とともに、増えてきて、アチェの生活の過去のみならず今後のあり方について、検討する材料が次第に整ってきた。そうした研究蓄積の一端として、本稿は、アチェの衣生活に関する理解の深化をめざして、そのための基本的な理解を的確にするための基本として、衣生活から離れた領域である食生活に関する現在の若者の認識についての知見を予備調査的段階ではあるが整理し、衣生活に関わる伝統性に関する考察を切り開くための試みをおこなった。現在変動する社会の中で、華人と比較することで、変化にたいしてより敏感な十代の若者においてアチェ人の認識する伝統性のあり方が限定的ながらも「あいまいさ」を受け入れる柔軟性をもつものと特徴づけられた。その結果を検討するときに、近年の研究で議論されたことを参考にすると、アチェ人のエスニック・アイデンティティの形成過程で、マレイ半島側の混合した文化形成とは異なり、基盤にイスラームの特徴を据えた上で、さまざま異なる要素の組み込みがあったと考えられた。その面で見ると異なる要素を組み込むことに柔軟性をもっているといえよう。認識上、そうした異なる要素の組み合わせの受容のしかたは、我々が考えるような「あいまいさ」を認めることになり、アチェらしいもの、言い換えれば伝統的なものが具体的なものとしては少ないながら、組み入れられたりして混合的なものにたいして、アチェらしくないとはいえないとみる見方がある可能性があるといえる。このことは、アチェ人の衣生活の捉え方である、アチェの伝統的な服装はイスラーム的である、二つは同じものであるという認識のしかたを説明していると考えられる。これらのことから、変化の機構を新たに見いだす材料が調べられたことにはならないが、少数派の華人の若者にとっては、自分の選択肢の拡大と、明確なエスニシティの見直しが進むことで、活動的に新しい役割を果たすようになることが予測される。多数派のアチェ人の若者にとっては、あいまいさの判断を柔軟性の源泉として強みとしてさらに活かすことでライフスタイルの多様化に積極的に参加すると予測される一方で、イスラームに埋もれがちなアチェらしさの再定義がしばらく必要になると思われる。

注

本稿は、文化ファッション研究機構による助成を受けた共同研究課題「衣服・布作りと人間の自立についての研究——インドネシア・アチェ州の事例調査」における分担者として実施した現地調査および文献調査からの知見、及び、それを発展させるために、2011年11月に筆者と木村沙弥香（当時、奈良女子大学生）がバンダアチェで収集した十代の飲食物にたいする認識に関する資料の分析結果をもとにしている。散布図は木村が作成したものである。アチェ各地でおこなった資料収集に快く協力した方々に感謝します。

文献

- クロノン、ウィリアム 1995[1983] 『変貌する大地——インディアンと植民者の環境史』勁草書房。(Cronon, William 1983 *Changes in the Land: Indians, Colonialists, and Ecology of New England*. New York: Hill and Wang.)
- Andaya, Leonard Y. 2008 *Leaves of the Same Tree: Trade and Ethnicity in the Straits of Melaka*.

- Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Aspinall, Edward 2009 *Islam and Nation: Separatist Rebellion in Aceh, Indonesia*. Stanford University Press.
- Ichwan, Moch Nur, 2011 Official ulema and the politics of re-Islamization -- the Majelis Permusyawaratan Ulama, Sharī'atization and contested authority in post-new order Aceh. *Journal of Islamic Studies* 22(2): 183-214.
- Jenike, Mark R., Kelsey Lutz, Celine Vaaler, Sarah Szabo, and John E. Mielke 2011 Thinking About Food, Drink, and Nutrition among Ninth Graders in the United States Midwest: A Case Study of Local Partnership Research. *Human Organization* Vol. 70, No. 2, pp.139-152.
- Kitzbichler, Stephan 2011 Built back better? Housing reconstruction after the Tsunami disaster of 2004 in Aceh. *Asian Journal of Social Science* 39, pp. 534-552.
- Smith, Holly S. 1997 *Aceh: Art and Culture*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Schröter, Susanne 2010 *Acehnese Culture(s): Plurality and Homogeneity*. In Graf, Arndt, Susanne Schröter and Edwin Wieringa (eds.) *Ache: History, Politics and Culture*. Singapore: ISEAS Publishing.

VII アチェにおける華人の存在とアチェ人の衣生活文化との関係

東南アジアの華人・華僑研究で知られるアメリカ人の文化人類学者 G.W. スキナーによる、中間的華人社会 *intermediate Chinese societies* の比較研究 (Skinner 1996) は、アチェの衣生活文化研究にいくつかの重要な示唆を与える。彼は、衣生活文化そのものを検討しているわけではないが、マレイ半島の海峡沿岸、フィリピン、ジャワにおいて華人住民が生み出し発達させた中間的社会的盛衰機構を詳細に検討し、分析の中に基本生計領域(食物、衣服、住居)を加え、これらについても混交化(クレオライズ)されているようだと言及した。先行文献 (cf. Tang 1988) の衣服に関する記述は多くないが、それらを拾い出し参考にししながら、それぞれの社会の特徴を示した。彼はまた、その社会出身者、中国からの移住者、地元の住民(非華人)の三者の結びつき方とその性別による違いに注意して、中間的華人社会の再生産機構を明らかにした。

スキナー論文が、アチェの衣生活文化の検討に与える示唆にはいくつかある。一つに、これまでアチェの歴史研究をしてきたレイド (Reid 2009) が、スキナーのこの論文を近年の東南アジアにおける華人研究の高まり (Reid 1996; Lee and Tang 2000; Suryadinata 2004; Lindsey and Pausacker 2005) のなかで、とくにアイデンティティについて多様なあり方の検討をする上で、理論的モデルを提供する役割を果たすとしているように、アイデンティティとそれに関連する服装の問題を考えるのに、いくつかの手がかりを与えてくれることがある。タイでの融合的傾向、フィリピンでの非同化的傾向があるのにたいして、インドネシアでは混交的創出傾向がある。スキナー論文は、主にそれぞれ異なった傾向をもつジャワとペナンの場合を検討していて、それらを、アチェの場合のアイデンティティの保持・再形成について検討するときや、アイデンティティの問題と関連した人間生活と衣について検討するとき、参考すべき分析モデルを提供するのである。

アチェの社会文化研究は近年ようやく盛んになってきた。これまで、アチェについては主に歴史研究が Reid などによって蓄積され、その政治、経済、宗教、社会、他の地域とのつながりなどの側面が明らかにされてきた。文化芸術の面については 1959 年に宗教、慣習、教育の領域で特別に自治が認められると、アチェ州で自らに関する知識を、人材を教育育成するためにも必要となり、情報収集や文化祭の活動を経て 1988 年にアチェの慣習に関する集大成が公刊された (Teuku Alibashah Talsya 1993)。しかし、基本的にそれらは百科事典的な特徴の記述が多く、特徴がどのように脈絡や背景で形成されてきたのか、文化的アイデンティティの問題がどのように交錯しているのか、といった問題が、内外の研究者による取り組みが進むのは、対立の継続や激化、そして 2004 年の被災後のことであった。とくに、アチェにおけるアチェ人や華人のエスニシティの問題は最近探究されはじめたばかりである (Aspinall 2009; Graf et al 2010)。そこで、筆者は、これまでしばしばアチェの特徴を説明するときに使われてきた「アチェの文化は、アラビア、中国、ヨーロッパ、ヒンドゥーの影響を受けて形成された」という言説について掘り下げて検討するための一つの試み

をしたいと考えた。現在のアチェにおいて、インド系、アラビア系、ヨーロッパ系よりも華人住民が多い事実から、「中国の影響」に限定し、それがどのようにアチェ文化、とくに衣生活文化と相互作用的に結びついているかを明らかにする道筋について検討したいと考えた。本稿で、この検討を、スキナーの論文が示唆することを参考にしながらおこなうことを目指している。

スキナー論文が示唆することは次のようなことである。彼が検討している中間的華人社会は、フィリピンを除くと、ジャワと、マレイ半島の海峡沿岸部（主にペナン）で、とくに後者はアチェと海峡を隔てるのみで、歴史的変化を並行してみることができる。実際に、彼の推定によると、これらの社会は古くとも16世紀からであり、これはアチェ王国の最盛期と並行し、19世紀後半に最盛期になっている。17世紀後半から18世紀におけるアチェのエスニシティ形成期にも存在していた。三つの地域のおおよその最盛期は、時間的にずれていて、スキナーによると、フィリピンのメスチソで1850～70年、マレイ半島のババの人たちで1880～1900年、ジャワのプラナカンの場合は1890～1910年である(Skinner 1996: 59)。最近、マラッカ海峡を挟んだスマトラ島側のプラナカンについて、とくにこの島の第1の都市でアチェの隣の北スマトラ県に所在するメダンの華人について見直され、メダンの文化資源として、プラナカンの歴史的実力者のTjong A Fie (1860-1921)の邸宅の一部が博物館化され、一般に開放された観光地の一つになっている。さらに、彼の兄でメダンやペナンの町の発展だけでなく中国の潮州・汕頭間鉄道建設に貢献した客家系の張榕軒Tjong Young Hian (1850-1911)の生涯と業績について写真資料とともに中国語と英語で最近まとめられている(Chandra 2011)。この地における華人住民の多さは、Franke (1987)の調査対象にメダンの華人寺院が17カ所と華人墓地3カ所が含まれていることからわかる。

スキナーは、マラッカ海峡の半島側のマラッカとメダン、シンガポールの知見 (cf. Tang 1988) をみていて、スマトラのプラナカンについては触れていないが、現在、両側のプラナカンが交流しあい、類似した生活様式を形成したことが知られているので、彼の分析によるババの生活様式の特徴はメダンの華人にもあてはまると考えられる。メダンの実力者たちの活躍年代が、ペナンの最盛期と合致していることや、アチェの海岸部に点在する地方都市には華人の墓地があるように、歴史的に多数の華人がいた時代もあったと考えられるからである。こうしたスマトラ沿岸都市の実力者に華人がいた可能性がある。その可能性があるとする、アチェ人と華人との間の相互作用も時代により変化しながらも確実に存在したと想定できる。しかし、それについては、記録の確認を含めて、今後の調査に委ねるしかない。

このように、アチェ人と華人の歴史的な相互関係について考える可能性を開くことに加えて、スキナー論文が示唆するのは、アイデンティティと服装との関係に関することである。これに関してスキナーは直接的な議論をしたわけではなく、中間的華人社会の形成と存続の機構を明確にするために、誰が誰と婚姻し、その子孫は誰と婚姻し、どの社会に属するかといった問題に取り組んだのである。さらに彼は、その存続に関わる改宗の問題を検討して、とくにイスラームとの関係を議論するとき、正統派イスラームが比較的定着している地域としてマカッサル、アチェ、スメネツ（マドゥーラ島）を挙げ、改宗した華人の子孫が地元社会に吸収されていったと述べた。依拠した事例はマカッサルとスメネツのみで、オランダ人観察者の記述であることから、対立の激しかったアチェに関する記述は

なかったようである。属する社会のアイデンティティに合った着装を想定すると、中間的華人社会の存続に関する彼の示した機構（婚姻、改宗を含む）は、アチェに関する検討を少しでも促すことになる。

スキナー論文では、東南アジアにおける華人の親族や婚姻、子孫に関する行動様式が、論点によって示され、場所や歴史的時点で様でなく、概要としてまとめることで誤解を招くおそれがあるが、アチェの場合への参考を考慮すると、そうした特徴について要点を把握しておく必要がある。(1) 定住を決めた中国人男性は、地元の女性と婚姻する者が多い。(2) 娘を地元の人に養子にだすことが多い。(3) 離婚や中国人夫の帰国などで夫婦別れがある場合、息子は父親に、娘は地元妻である母親についていく。(4) 華人的父権主義が薄れ、双系的特徴をもつ。(5) 息子は父親の華人エスニック・アイデンティティを保持し服装もそれに合ったものを着用する一方で、娘は母親のエスニック・アイデンティティを受け継ぐことで、華人の服装を着用する必要はない。(6) 息子は婚姻時に実家を離れ、娘は実家に残って中国出身の男性と婚姻することがよくみられる。(7) 1890年代以降、東南アジアへの華人移住者に、それまで少なかった女性が多くなり、華人男性は地元女性を妻にする必要がなくなった。(8) 中間的華人社会は福建出身者とのつながりが深いのに、移民に客家や広東出身者が多くなった。以上のような機構が、周囲の状況とかみ合い、交易を中心とした役割が存在する限り、中間的華人社会が保持され隆盛を迎えることができたと考えられる。しかし、その後、大きな世界経済の変容の中で、マレイ半島のプラナカン福建人との提携関係の中で華人社会に吸収され、フィリピンのメスチソの場合は新生フィリピンに不可欠な存在として主流の一部としての役割をもつようになった。ジャワの場合のみに中間的社会が残されたが、それまでの阿片交易の消滅で中間的存在としての威勢を失っていった。

華人住民の現状とアチェの衣生活文化

こうした機構のあり方を参考にすると、現在、バンダアチェには客家を背景とする華人が多い事実と、現在一カ所に統合された華人墓地の墓標に刻まれた出生年代に19世紀終わり以前のものがないことから、現在、バンダアチェに暮らす華人は二世か三世で、おそらく男性と同じような数の女性が移住してきた時代の子孫であるだろう。また、バンダアチェの場合は、沖合の小島サバンに自由貿易港が置かれた時代に多くの華人住民がそこで交易に従事していた関係で、後にバンダアチェに移った者もいる。このように、現在、バンダアチェで生活する華人と、歴史的に遡ってアチェ王国時代の衣生活の形成・保持に関連した問題をつなげて考えることはできないが、テイラーとしての華人の存在を考える上で、華人住民の現況と背景を理解しておく必要がある。

現在、宗教的に三つの寺院があることからわかるように仏教・道教・儒教の混合的宗教信仰者が多いが、華人の若者はほとんどが、華人街の一角にあるキリスト教会の敷地に建てられたキリスト教系の学校で教育を受けている。住居は華人街を中心としているが、現在でも、歴史的にみても、小さなまとまりであっても、散らばりがある。華人墓地が十数年前に統合された以前は数カ所に墓地があったことから、華人の居住地は華人街以外にも散らばっているようである。例えば、現在、市内中心から数キロの、そこから伸びる幹線道路の沿道にコピア・ムクトゥブの形をした頂上部をもつモスクが所在する裏手に、華人

住民の住居があり、50代の男性主人にインタビューしたところ、この所在地ではモスクが建てられる前に、豚を飼育していた話を聞いた。現在では市街地の延長になっているが、当時はおそらく市街から外れた場所で、豚の飼育がアチェ州で禁止される前に、そうした生業をたてる中国人がいたのである。このこと一つをとっても、少なくとも20世紀におけるバンダアチェの歴史において華人がどのように存在したかの知識は、未だ少なく、彼らがテイラーであったとしたら、あるいは他の衣生活文化に関わることをしていたとしたらどのようなことであるか、に関して地道な調査を重ねていかないと、歴史の彼方に置き去りにされたままになるだろう。

バンダアチェの華人街にあるキリスト教系学校の30代の若い副校長(妻も教員)がジャワ人でクリスチャンであることから、彼なりの観察をもとにインドネシアの三つの都市の華人を比較して、それぞれの特徴を語ってくれた。彼の部外者としての視点にたいして、当時、筆者はアチェに数度目の訪問をしていて滞在の仕方に慣れ自らの部外者としての利点の活用に鈍化を感じていたので、アチェの理解に有益な糸口を与えてくれたと感じた。ジャワ人教師の経験と観察では、ジャカルタの華人は現地のことばをしゃべり、地元社会に入り込んでいるのにたいして、メダンの華人は、塀を高くする傾向があるように、地元社会にあまり入り込んでいないと、二つの対比のあと、バンダアチェの華人はこれらの間にある、という。各都市の過去数十年にわたる状況を考慮すると、メダンの場合、犯罪の多い町というマイナスイメージがガイドブックにあったように、防衛的な塀が必要であったのかもしれない。しかし、このジャワ人教師の経験は、スキナー(p.93)が論文の終わりに触れているように、三つの地域の中間的華人社会はその発足に共通点があるのに、その成り行きは異なっていて、ペナンのプラナカン子どもにもマレイ語や中国語よりも英語を習得させることを選択し、ジャワの場合は現地社会に同化する傾向が強く、フィリピンの場合はメスチソとして独自に新生社会の構成員となっていると違いを指摘していることに符合しているように思える。メダンの華人で50代前後のビジネス経営者には、台湾の大学に留学した経験をもち、子どもに英語を習得させていたり、子どもを海外に留学させていたり、本人自身が生活に拠点をオーストラリアなどの海外に移してビジネスでメダンに来ている者もいる。彼らは必ずしもペナンのプラナカンの末裔ではないが、彼らと似ている面があるのである。前述したようにメダンには、対岸のプラナカンに相当するプラナカンが存在し、現在でもスキナー論文で指摘されているようにプラナカン的な生活をしている者も残っていて、メダンにもそうしたライフスタイルを残している人もいる。同じインドネシアでも比較をすることで、異なった地元社会との結びつき方があると考えても良いであろう。アチェの場合はどうであろう。

アチェの地理的領域は広範で、文化的多様性も顕著である。ここでは沿岸の平地に主に暮らしている多数派のアチェ人と、同様に沿岸の各町に暮らす華人について考えることにする。華人の場合、アチェの西南部でメダンにも車で数時間の距離に、大きな華人墓地が丘の斜面に展開している場所がある。こことバンダアチェ、そしてその間の町における調査の必要性を感じるが、ここでは主にバンダアチェの華人の観察をもとにして検討を進めていく。彼らは、アチェの他の町の華人も同様に、小企業的なビジネスの従事者が多く、メダンの華人に小企業のみならず中規模な工場経営や会社経営に従事する者がいるのと対照的で、一般的に、経済的にゆとりがあっても、外面的には地味な生活をしていて、富裕

層がいるようにはみえない。とくに2004年12月の大津波に直接的に華人街が打撃を受けていることから、この印象は間違っていないだろう。調査期間中、華人を主な対象とはしていなかったため、華人ムスリムに出会ったのはピディ県の港町であるシグリだけであった。妻がアチェ人で本人の服装はサロンでアチェ人と同様のライフスタイルを取っていることが窺えた。スキナーが論文で述べていたように、アチェにおける中国人の改宗は、まとまった華人コミュニティの形成を生み出すことはなかったと考えられる。現在、確かなことは、過去数十年の人口割合の変化をみても、ピディ県における華人の存在を示す人口の多さは、バンダアチェの華人人口数と比較すると僅かではない。このピディ県一帯の地域は、別稿で述べたように、アチェ人の人口が他県よりもかなり集中的に多く、農村社会が形成され、歴史的に政治的実力者を輩出し、イスラーム学校などが先駆的に設立されたところである。こうした地域で暮らす場合、華人たちは地元への同化を選択することも頷ける。しかし、既述のように各町に華人墓地があるように、このシグリにも存在した。墓碑にある死亡年と出身地の資料収集による比較検討が課題となっている。

シグリ出身のアチェ人と、アチェにおける衣生活文化の繋がりが、予想以上に深い事実がある。バンダアチェの中心地のビジネス街の一角に数十軒の仕立屋（テイラー）が並んでいて、彼らの出身地を尋ねるとほとんどがシグリである。アチェの他の町で、テイラーをみつけて訪ねると、シグリ出身者が多いことに気づく。シグリ出身者は、アチェにおいて、商売にたけている人たちと考えられている。テイラーはそうした商売のうちの一つにすぎないであろうが、アチェの衣生活を考える上で、地域性があることを考慮に入れる必要があることを示している。この地域性とはいうまでもなく布から服を作る者の背景にある地域限定性である。ここには、華人との結びつきはないように見える。しかし、ここで敢えて推測をすると、シグリー帯のピディ地方において、イスラーム王国の存在と、宮廷人のためのさまざまな職人の存在が想定され、外国からの渡来者、とくにここでは華人の渡来者の中に布の加工者、仕立て人がいて、徐々に、彼らが地元社会に吸収されていった可能性があると思われる。マラッカ海峡一帯の統治から後退して、地元スマトラでの農業主体の建国精神とエスニシティの形成期に、こうした華人の職人が交易人と渡来して定住者になったかもしれないのである。

この推測の一つの根拠は、バンダアチェの華人居住地区が市内中心に近い主要河川の脇に所在し、そのため大津波の被害を直接受け、華人の犠牲者も多かったが、現在、避難していた人が戻り、新規ビジネスで移入する人が増えても、華人の仕立人は僅かしかいなくて、災害前に100人程いたのに及ばないというアチェ人の話にある。この数字は大雑把で未確認であるが、かなりの数のテイラーがバンダアチェに存在したこと、つまり、アチェの衣生活文化を形成する一員である仕立人として華人が寄与してきた事実があるようである。実際に、あるアチェ人女性は馴染みの華人の仕立て人に服の新調をずっと依頼してきたという。1996-1997年版の電話帳で、バンダアチェで固定電話をもつテイラーを調べると13軒あり、その内一軒は二店舗を構えていた。当時は公に華人の名称を使えなかったため、店名で華人かどうか判別できないが、住所で華人街の店かどうかの推定はでき、少なくとも数軒は華人であると推定できる。しかし、100人程の数と結びつけられる程の数ではないので、今後の調査を待たなければならない。

相当数の華人テイラーがバンダアチェにいたと仮定して、アチェ人の服を製造してきた

としたら、彼らをとおして、アチェ人の衣生活に中国的要素の影響が及ぶ経路が想定できるだろう。しかし、この問題を考える前に、華人がテイラーという職になぜ関わるかについてみておく必要がある。彼らがこの仕事に関わった可能性があることを根拠づける資料はないが、間接的な知見があるので、それらから推測されることを述べる。イスラームをもとにしたアチェ王国の隆盛した16世紀に、すでにマラッカ海峡一帯に華人の人々が到来し定着し始めていたと考えられ、こうした華人は王国のあった町の中で暮らし、多くが改宗し、子孫が地元社会に吸収していった可能性が高い。彼らは町の中で暮らすとするとどんな職業がありうるか考えたとき、交易人ではなく、交易人と対応する職であったり、交易品として移入された品の加工に携わったりしたと考えられる。当時、インドの布がアチェ人の欲しがる品の中にあり、インド系は布を裁断しないとすると、裁断して裁縫する技術を持っていたのは、アラビア系か華人であった可能性が高い。アラビア系は宗教者や、イスラームの教育者などの学識者が多かったと考えられる一方で、華人は日々の生活を支える職人が多かったと推測される。宮廷の人々あるいは社会的上層の人々にとって、イスラームの国に相応しい服装を必要としていただろう。世俗的な慣習的な衣装よりも、組み立てられた「文明的な」服装を求めていただろう。そうした組立に携わる職人は、改宗せずに定着者にならず、技術と簡単な道具だけを所持して、直ぐに移動できる人でもかまわなかったかもしれない。そうした華人もいたかもしれない。いずれにしろ、布を裁断し裁縫してどのようなものが作られていたのかは不明である。

16～17世紀から現代までを結びつける根拠はないが、現在アチェ各地のテイラーはシグリー出身男性が多く、この町を含むピディ県にはかつて王国が存在した。こうした王国の生活を支える華人の存在が高いとすると、彼らが改宗することで、地元の女性と婚姻し、子孫男性がテイラーの技術を伝承したことが推測される。そうした技術が世代を越えて現在に繋がっている可能性を否定することはできない。シグリー周辺一帯は、アチェ王国隆盛の後に農業主義的な国造りに移行したとき水田地帯で後に名声を挙げたところで、平地が多いことと王国があったことで、人口が集中していたことで労働力の豊富さが、この土地の農業を支えた一方で、人口が稠密となり、農業以外に商業の領域に従事し地元以外の土地で職をもつことが男性に課せられた生き方となったと推察される。おそらくシグリー一帯でテイラー技術が伝承されてきたというよりも、各地でテイラーの仕事が一定の必要性があり、外に出たシグリー出身男性が、出先で技術を習得して、その後新たな土地に移り住むといったことがあったと思われる。この点の解明も今後に残されている。

これまで歴史的な機構について推測の域をでない説を述べてきたが、アチェにおける華人は、現在、とくにエスニシティを表す服装をもっていないといえる。アチェ人が結婚式の新郎新婦として着用すべき慣習的な衣装をもっているのにたいして、華人の場合、結婚式で花嫁がウェディングドレスを着用し、新郎とともに西洋スタイルの服装をする。これは、近年まで、華人のエスニシティを示す言語や服装の使用は禁止されていたことの影響が強かったことを示している。しかし、台湾でも中国でもウェディングドレス主体の衣装が一般化していることと並行していると考えれば、服装の問題が極大化することはないだろう。

一方、バンダアチェでもエスニシティの回復の動きが華人にみられるようになった。エスニシティに関する規制が廃止され、文化的多様性を強調する政策がとられるようになって

て、2011年5月上旬にバンダアチェで最初の華人街のフェスティバルが開催された。アチェの観光推進年の行事の一つとして行政が主導して財政的支援をしたこともあり、多くの華人住民が協力し、学校生徒によるパフォーマンスも華人の振り付けと衣装を着たものがいくつかあった。とくに女子の服装に中国風の衣装が使われる機会となった。マラッカ海峡対岸のペナンに残るプラナカンの館が博物館として開放され、その一室にプラナカンの衣装の変化を示す展示に現代ではより明確に中国風とわかる衣装を着用した女の子のマネキンが含まれていた。現在、女の子が中国風の服を着るようになってきているとガイドが解説したように、マレーシアと同様インドネシアの華人における衣生活文化の変化の一つとみてよいだろう。この華人エスニシティの回復と呼べる現象は、中国語を習う生徒が、中国語個人教師が生業となりうるほどに増加していることにもあらわれている。

アチェの華人の人口推移

本研究プロジェクトの三年目（2011年度）に、現地調査での観察・聞き取り項目の中に訪問各地で華人の住民と墓地の存在確認をおこなった。マラッカ海峡に面する沿岸部の主な町に華人住民が暮らすことは、対岸のマレイ半島側の歴史的都市であるペナンやマラッカに多くの華人住民が暮らしていることから予測できるように、どの町でも商業地に華人店舗があり、規模の大小を問わず、華人の墓地や寺院の存在が確認できた。一方、インド洋側の沿岸部の主な町でも同様であった。このように、華人がアチェにおいて、大きな町だけでなく沿岸部の各地で主に商業活動に従事して暮らしている。沿岸部に比べて、内陸の山間地の町では、店舗や墓場などの目につくほどに多くの華人住民がいるわけではないが、クタチャネで出会った女性に自宅に招かれた際、成人した子どもたちとの話で、女性の亡夫が華人であることがわかった。これから、アチェの山間部の主な町では、商業活動をして住み着いている華人住民がいることが推測される。つまり、アチェ全域の主な町に、華人住民が暮らしているといえる。

この現況でイメージされる華人住民の姿は、歴史的にアチェにおける華人の存在を示すのに、19世紀後半の世界経済の変化に伴う、プランテーション契約労働者としてまとまった華人の流入や、中国本土の業者による斡旋システム、契約に伴うトラブルの問題などを含めて、スマトラにおける華人の存在についてレイド（Reid 2005）が描き出したことからイメージされる姿とは異なる。労働力として流入した華人の人々は、契約終了後に帰国した者が多かっただろうし、生活上の問題から流入先や別の町に移動してアチェに定着するようになった者もいただろう。その実態は解明されていない。

現時点にアチェに暮らす華人住人と、歴史的に定着した華人住人、そして、歴史的に流入・流出・再流入した華人の人々との関係を把握するために、人口関係資料を用いることにする。人口動態を知ることで、そこに暮らす人々の社会的位置、ライフスタイル、外界との関係性の理解を深め、スキナーがおこなったように、婚姻形態、夫婦関係、世代間関係についての知見と結びつけることで、人々が示す衣食住を含む生活様式の特徴の背景をより明確に把握することができる。このとき、歴史資料が示す人口がどの場所・地域のものかに注意して、年代間比較、地域間比較をする必要がある。アチェの場合、現在のバンダアチェ市域は、かつてクタラジャと呼ばれた植民地時代以前の範囲とは異なるだろう。また、行政区域の変更がしばしば実施されてきたので、同じ地域の年代比較に慎重さが必

須であり、とくにアチェで人口密度が高い地域は、アチェの首都が所在し、都会でもあるバンダアチェ市とその周辺郊外を含めた地域と思いがちであるが、実際はバンダアチェから東方の車で数時間離れた北岸沿岸にあるピディ県であり、近年の行政細分化で大きく二分されているが、この地域は、アチェのスルタン王国の中心地として栄えた地域で、その中心地は沿岸の町シグリである。

第二次大戦前のアチェの人口資料はどのように得ることができるか。一つの手がかりはオランダが実施したセンサス調査にある。そこでは集約単位としてスマトラ地域があり、アチェのみ、あるいは、アチェの各町の実際の数値を得ることはできない。しかし、1930年のセンサス資料 (Department van Economische Zaken 1935) に「華人とその他の非土着のオリエンタル人」を分けて集計結果が印刷物になっているので、この資料をもとにみていく。

表VII-1. 1930年のジャワとスマトラの中国系人口

	ジャワ	スマトラ
男性	319,931	310,467
女性	262,500	138,052
合計	582,431	448,519

(1930年センサス p.104 の表から作成)

表VII-2. 1930年のジャワとスマトラのアラビア人とインド人の人口

	ジャワ	スマトラ
アラビア人		
男性	22,905	3,827
女性	18,825	3,406
合計	41,730	7,233

	ジャワ	スマトラ
インド人		
男性	3,744	13,811
女性	1,702	6,238
合計	5,536	20,049

(1930年センサス p.105 の表から作成)

表VII-1は、スマトラとジャワの華人の人口の対比を示している。1930年ではジャワだけでなくスマトラにも同程度の華人がいたことを示している。性比をみると、スキナー論文が指摘しているように、ジャワではすでに女性の移住者が多くなり、男性との比が極端な違いを示さなくなっていて、男性は現地の女性と結婚する必要性が低くなっていることがわかる。一方、スマトラではアチェに限った資料はないので、アチェの状況のみを把握することはできないが、スマトラでは、プランテーションなどの労働力として移入した華人男性が多く、その移入の規模に伴うほどの女性の移入がまだない状況を示している可能性がある。また、性比が男性よりであることの理由に、スキナー論文が指摘したように、華人男性の婚姻相手が現地女性の場合、息子は父親のエスニシティを背負うが、娘は母親

のエスニシティを表明できることが性比の不均衡に寄与している可能性がある。

表VII-2は、ジャワとスマトラにおけるアラビア人とインド人の人口を示し、華人と比較するとどちらの地域でも圧倒的に少ないことがわかる。このことから、アチェ人の文化社会に、アラビア系、インド系、華人の影響があることの一つの根拠を与えてくれる一方で、1930年においてすでに、華人の人口の多さからすると、アラビア系とインド系以上に華人の影響の強さがあつた可能性があることを示している。スマトラでは、アチェが正統的イスラームの強い地域でありながらもアラビア人との結びつきがジャワほど多くないことに、何か理由があると思われる。一方、インド人は、ジャワよりもスマトラに居住する者が多い。インド人の場合もスマトラの華人の場合と同様に、性比からすると男性が多い。これは、夫婦で移住したりするのではなく、男性が交易などに従事して一時滞在者的な存在であつた可能性を示している。この点で、アラビア人の場合は夫婦で滞在することが多かつた可能性が高い。

表VII-3は1930年のスマトラの中国人の出身地を性別に示している。性比をみると蘭領東インド生まれの男性と女性の間では大きな違いがなく、外国出身の場合のみ男性の移民が多いことがわかり、表VII-1の性比の違いのところで述べたような娘の帰属のしかたの違いを反映している可能性が少ないことを示している。外国出身者（中国以外にも他の東南アジア出身の者も含まれていると考えられる）として、移入して来る中国人は20世紀初めにおいてまで、外国へ移動することが男性のみに許されていたことが影響していたことは確かであるようだ。

表VII-3. 1930年のスマトラの出生地別文化背景別華人人口(1930年センサス p.291 から)

	蘭領東インド内		外国出身	
	Male	Female	Male	Female
Hokkians. [福建]	31,975	31,213	40,670	15,396
Hakka's [客家]	19,835	19,574	36,480	6,177
Tio-Tsjoe's	9,178	8,362	35,556	6,343
Kwongfoe's [広東]	11,472	10,709	40,352	7,692
Overige Chineesche landaarden	20,595	20,253	61,727	6,493
Inheemsche landaarden (土着の人種)(内訳略)	27	3,492	4	48
Andere niet Chin. landaarden	-	4	2	29
<u>Onbekend [unknown]</u>	<u>820</u>	<u>1,580</u>	<u>633</u>	<u>159</u>
合計	93,902	95,187	215,424	42,328

表VII-3はまた、文化的背景別に人口を示していて、スキナー論文にあるように、中間的華人社会をつくっていたマレイ半島のババの場合、福建出身者とのつながりが強かつたとされているように、スマトラの華人も福建出身者が多い。しかし、それに劣らず、客家系も広東系も多くなつていて、外国出身者の性比からすると客家系と広東系でまだ女性が少ないことから、福建系よりも遅れて移住したことがわかる。アチェの場合、客家が多いことが知られていて、現在の華人住民は、比較的新しい移民の流れの子孫である可能性が

高いことが明らかである。

バンダアチェの場合

ジャカルタの統計局で収集した統計資料をもとに、バンダアチェの1980年代以降の人口変化と、宗教別、宗教施設別の統計資料による変化をみながら、アチェにおける華人の動向から推測できることを明らかにする。華人の存在を知るために、ここでは、宗教に関連する資料から、「仏教」に関わる数値を拾うことにする。華人住民にはキリスト教徒も少なくなくイスラーム教に改宗した者もいる。また、宗教的に厳密に「仏教」とは限らずそれを中心とした混合宗教である場合が多いが、ここでは便宜的に「仏教」関連資料をもとに検討する。インドネシアでは、古くからこの地域に暮らしたムラユ系の子孫をプリブミ Pribumi とし、華人は、アラビア系やインド系などとともに数世代を経ても非プリブミに分類される。こうした分類は、各州の統計局での資料にも反映される形がみられることから、これらを手がかりにして、人口動態を把握し、その変化の意味をみていく。

アチェ州の近年の人口動態を信仰の種類によってみると(表VII-4)、ムスリムの増加が顕著であったのが1984年から1988年にかけて約53万人の増加、1990年代前半の40万人弱の増加であるのにたいして、仏教徒の場合、顕著な増加は、1979年から1980年にかけて倍増していて、増加の時期が異なっている。また仏教徒は、1990年代に半数以上が減少し、1998年にもとのレベルに戻っている。この時期に外国やその他の地域に逃れて、華人排斥の動きの激化に対応したことが主な要因である。

表VII-4. アチェ州の宗教別人口 (1977~2010年)

Year 年	Islam ムスリム	Protestant プロテスタント	Katolik カトリック	Hindu ヒンドゥー	Budha 仏教徒	Konghu Chu 儒教	Other その他
1977	2,236,374	45,854	8,854	1,105	5,751	n/a	1,409
1978	2,300,036	45,537	8,202	797	4,909	n/a	1,626
1979	2,300,036	45,537	8,202	797	4,909	n/a	1,626
1980	2,452,378	42,529	8,330	686	11,843	n/a	776
1981	2,014,127	41,666	3,181	959	11,590	n/a	675
1982	2,546,315	42,509	3,452	734	13,355	n/a	656
1984	2,651,470	42,538	3,790	844	13,567	n/a	703
1988	3,181,516	45,162	5,814	887	11,890	n/a	77
1989	3,254,273	45,162	5,803	887	11,890	n/a	77
1990	3,351,407	45,230	5,604	581	12,673	n/a	380
1996	3,740,056	44,368	3,964	248	4,993	n/a	-
1998	3,767,962	45,045	5,957	791	11,341	n/a	-
2010 (%)	98.51	1.19	0.11	0.01	0.17	0.01	-

ソース： Aceh Dalam Angka (Aceh in Figures) 1981, 1982, 1983, 1984, 1986, 1987, 1988, 1989, 1990, 1997, 1998, 2010, 2011 をもとに作表。

こうした人口変動のうち、1984年から1988年にかけて増加したムスリム人口のうち約6分の1がバンダアチェでの人口増であった(表VII-5)。1990年代前半の増加では、バンダアチェのムスリム人口の増加にあまり反映していないことから、アチェの他の地域に労働力や軍人などが移入してきたと思われる。一方、仏教徒の場合は、1979年から1980年にかけての増加の有無を示す資料がないのでバンダアチェでの増加傾向を確認できない。しかし、1990年代の人口激減はバンダアチェでも明確に示されていて、スマトラ全域の華人が敏感に反応していたことが推測できる。この華人の避難的移動に関して、興味深いことに、バンダアチェ周辺の県で、1990年代に華人人口の激減がみられた県があるなかで、アチェ・トゥンガラ県では、華人人口が急増し、1998年に急減している(付表VII-1参照)。この県は、アチェ州の南部内陸部にあり、付表VII-1で示されているように、キリスト教徒住民が約4分の1を占めていて、キリスト教徒の華人にとって支援を受けやすい場所であった。この事実は、バンダアチェの華人が一時的避難先に選んだ場所は、外国やインドネシア内で比較的 안전한場所と華人が考えた場所であったことを示している。こうした人口変動が、みられるなかで、華人が関与している寺院の数については、変化せずに、つまり、華人排斥運動でも破壊されずに保たれていた(表VII-6)。

表VII-5. バンダアチェ市の宗教別人口 (1981~2010年)

ソース：Aceh Dalam Angka (Aceh in Figures) 1981, 1982, 1983, 1984, 1986, 1987, 1988, 1989, 1990, 1997, 1998, 2010, 2011 をもとに作表。2009年と2010年は%のみで実数は不明。

Banda Aceh							
Year	Islam	Protestant	Katolik	Hindu	Budha	Konghu Chu	Other
年	ムスリム	プロテスタント	カトリック	ヒンドゥー	仏教徒	儒教	その他
1981	65,765	1,365	461	62	4,180	n/a	35
1982	66,610	1,404	476	63	4,242	n/a	35
1984	71,270	1,266	663	59	4,141	n/a	-
1988	166,522	1,567	987	54	3,911	n/a	3
1989	188,580	1,567	987	54	3,911	n/a	3
1990	178,120	1,582	989	55	3,950	n/a	3
1996	207,581	2,075	586	45	300	n/a	-
1998	204,546	4,693	8	82	3,444	n/a	-
2006	199,241*(総人口)						
2007	219,659*(総人口)						
2008	217,918*(総人口)						
2009 (%)	98.34	0.28	0.17	0.02	1.19	n/a	n/a
2010 (%)	97.73	0.70	0.19	0.01	1.37	0.00	n/a

* ソース：Indikator Kesejahteraan Masyarakat 2009 Provinsi Nangroe Aceh Darussalam

表VII-6. バンダアチェ市の宗教施設数の推移 (1981~1998年)

ソース: Aceh Dalam Angka (Aceh in Figures) 1981, 1982, 1983, 1984, 1986, 1987, 1988, 1989, 1990, 1997, 1998, 2010, 2011 をもとに作表。2009年は%のみで実数は不明。

Banda Aceh							
Year	Mesjid	Menasah	Mushalla	Protestan	Katholik	Kelenteng	Kuil
	モスク	小モスク	小モスク	プロテスタント教会	カトリック教会	寺院	インド寺
1981	20	38	17	3	1	4	2
1982	26	35	19	3	1	4	2
1983	26	35	19	3	1	4	2
1984	20	38	17	3	1	4	2
1986	63	102	21	3	1	4	2
1987	63	102	21	3	1	4	2
1988	63	102	21	3	1	4	2
1989	66	101	22	3	1	4	2
1990	66	101	22	3	1	4	2
1996	74	97	44	3	1	4	2
1998	75	97	44	3	1	4	2
						Vihara	Pura
2009	93	101	35	2	1	1	7
2010	91	142	122	3	1	3	1

注 (1) Menasah ムナサアは、礼拝だけでなく、共同体の集会や教育に使われる施設。

(2) 2009年の寺院の数は、調査手続きの変更に伴う混乱、あるいは表記上の誤りの可能性がある。

表VII-6 はまた興味深いことに、ムスリムの人口変化とモスクの増加の結びつきを示唆している。1980年代半ばにモスクが3倍に増加したときの背景として、ムスリム人口の2倍以上の増加があったことがわかる。この時期は、バンダアチェ市内のモスクの一つで、アチェ人男性用の帽子コピア・ムクトゥブの形状をした頂上部をもつモスクが完成したのである。モスク建設には地域住民の意思や資金が必要であるが、この時期にモスク建設のための支援があったようである (Aspinall 2009)。この時期に小規模なモスクで、アチェでは村に建設されて、地域住民の集会施設やイスラーム教育の場になるムナサア Menasah が建設されている様子が見える。その後、今日に至るまで、モスクの建設は増加傾向にあり、2004年の津波災害後には、小モスク Mushalla の数が2010年に急増した様子が示されている (ただし、統計上の誤りの可能性もある)。バンダアチェにおける日常生活のイスラーム化をさらに進める動きを示していると考えられる。また、地域共同体を再生する拠点としてムナサアが災害復興の中で見直されたことがあった(The Jakarta Post 2005)ことから、再生の動きを反映していると考えられる。

まさにこの地域再生にとどまらず振興のための動きがバンダアチェの華人の間で始まっている。2011年当初にバンダアチェのビジネス経営者が中心になって、メダンの華人からの提

案と支援もあって、華人コミュニティのための組織を小さな事務所を拠点にして発足させた。資金集めの活動や、華人住民のための活動プログラムを増やす努力をしている。

以上のようにアチェおよびバンダアチェの人口動態と、住民の宗教的背景から推察できるエスニシティ別の動向を把握してみると、華人の動きは、2004年12月のスマトラ沖地震の被災後にメダンなどに一時的に避難した人が多かったこと、1990年代後半の華人への圧力にたいしても避難のために移動したこと、その他に、アチェ南東部橋のメダンから車で数時間の距離の町でも、多くの華人が転居したために、寺院のみが一つ残されていたことから、理由は異なるにしろ、華人の移動性の高さが示されている。自らの親族ネットワークや同郷ネットワークにより、そうした移動が比較的可能であると考えられる。このことが、おそらく、アチェ王国時代から現在まで、華人の間でおこなわれてきたことであると推量できる。

華人に備わった高い移動性は、アチェの各都市で時代により華人の人口が増えたり、全くいなくなったりする現象をもたらしたと考えられる。そうであるとする、華人のもっている技能や能力が、その都市で必要とされるものでありながら、失う可能性があり、失った場合のその都市の社会的、より限定すれば経済的機能の低下を招くことになるだろう。もし、華人が、2004年の津波以前に「100人ほど」のテイラーとしてアチェ人の衣生活に寄与していたとしたら、今後、テイラーとしての役割は残るのだろうか、もし残るとすると華人は再びその役割を担うのか、それとも新たな役割にも挑戦していくのか。アチェ社会で必要としていたテイラーは、アチェ人、とりわけシグリ出身者が、かなりの部分を補って、今後もシグリ出身者がこの職についていき、アチェ人の衣生活を支えていくのであろうか。

この問題は、アチェの多数派であるムスリムのアチェ人にとってのモットー「権力をもつものは、きちんとした服装の人である」(Teuku Alibashah Talsya 1993)を、アチェ人がどれほど長く保持し、実践するかに関わっている問題である。イスラーム信仰に合致する服装は、身体を覆う服装である以上、とくに女性の場合の服装には、一つの制約がかけられていると理解できる。人間生活において活動をする上で一つの制約がかかることは、当事者の創造性を閉ざす働きをするよりもむしろ開花させる働きをされると考えられている。このことは、例えば、日本の俳句や短歌の字数制限を考えてみれば、それに乗っ取った後に思考の自由さと無限さがあることで、理解することができる。アチェの場合も、おそらく例外ではないだろう。今後も、アチェ人のとくに女性が自分の服装や家族の服装を考えるときに、どう作るか誰に製作を頼むかの問題を、どう解いていくかで、華人のテイラー職人の腕が試されるかもしれない。これ以外にも、華人が華人エスニシティの回復から、見直し過程を経て、自立をみいだそうとエスニシティに合致した服装を求めれば、華人が華人のためのテイラーとして役割を果たすことになるだろう。華人が今後の社会の変化の中で、華人エスニシティにこだわらずに、多彩な能力を多彩に活用して、新たな役割を果たすようになれば、テイラーの職にもこだわる必要はないであろう。

結論

ここでは、スキナーの研究の中で、日常生活様式の変化を根拠に用いている点に注目して、彼が想定したことを吟味しながら、アチェでの事象を検討するための糸口を明らか

にする試みをおこなってきた。アチェという地域には多様な文化的背景をもつ人々が暮らしている。その中でもアチェの華人は、少なすぎず多すぎず、いろいろな周囲の社会的状況に合わせて、居住地を変え生業を変えて、アチェの地域的枠組みにこだわる必要はないが、インドネシアの社会でもアチェの中で生きることを選択した人たちがいる。アチェ王国時代の華人から、現在の華人に直接つながるものはないだろうし、そうした事実の根拠を学術的に見いだすことは今後ともに困難なことであると予測できる。しかし、あえて、華人のテイラー的な役割を仮定し、スキナーが検討したように、改宗やプラナカンの社会が存在した場合をアチェにあてはめてみると、テイラーを輩出するシグリを含むピディ地域の歴史的な存在様式は、私の仮定を間接的に断片的に根拠となりうることを示していると思う。最近の事象についても未だ資料収集は手つかずながら、本稿のテーマは、今後のアチェにおける衣生活文化の展開の問題にもつながるもので、持続的な探究の必要が求められている。

文献

- Aspinall, Edward 2009 *Islam and Nation: Separatist Rebellion in Aceh, Indonesia*. Stanford University Press.
- Chandra, Rebecca (ed.) 2011 *Legacy of a great Leader, Tjong Young Hian*. Medan, Indonesia: Budihardjo Chandra and family.
- Department van Economische Zaken 1935 *Volkstelling 1930 (Census of 1930 in the Netherlands Indies. Volume VII, Chinese and other non-Indigenous Orientals in the Netherlands Indies)*. Batavia.
- Franke, Wolfgang 1987 *Chinese Settlement in North Sumatra as seen from Epigraphic Evidence, a Preliminary Report*. In Rainer, Carle (ed.) *Cultures and Societies of North Sumatra*. Berlin, Hamburg: Reimer. Pp.111-131.
- Graf, Arndt, Susanne Schroöter and Edwin Wieringa (eds.) 2010 *Ache: History, Politics and Culture*. Singapore: ISEAS Publishing.
- Lee, Kam Hing and Tang Chee-Beng (eds.) 2000 *The Chinese in Malasia*. Oxford University Press.
- Lindsey, Timothy and Helen Pausacker (eds.) 2005 *Chinese Indonesians: remembering, distorting, forgetting*. Singapore: ISEAS Publications.
- Reid, Anthony (ed.) 1996 *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese*. Allen & Unwin.
- Reid, Anthony 2005 *Chinese Migration into North Sumatra*. In Reid, Anthony, *An Indonesian Frontier: Acehnese and Other Histories of Sumatra*. Singapore: Singapore University Press.
- Reid 2009 *Escaping the burdens of Chineseness*. *Asian Ethnicity* 10(3): 285-296.
- Skinner, G. William 1996 *Creolized Chinese Societies in Southeast Asia*. In Anthony Reid (ed.) *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese*. Allen & Unwin. Pp.51-93.
- Suryadinata, Leo (ed.) 2004 *Chinese Indonesians: State Policy, Monoculture and Multiculture*. Singapore: Eastern Universities Press.

Tang, Chee Beng 1988 *The Baba of Melaka: Culture and Identity of a Chinese Peranakan Community in Malaysia*. Salengor Darul Ehsan: Pelanduk Publications.

Teuku Alibashah Talsya 1993 *Pakaian Aceh (1) (2)*. *Majalah Dwi Bulanan Suara Laka, Jeumala*. 7, 8. Lembaga Adat Dan Kebudayaan Aceh (Juli-Augustus)(September-Desember).

The Jakarta Post 2005 'Meunasah' play strategic role in the life of Acehnese. (Wed, 01/19/2005)
<http://www.thejakartapost.com/news/2005/01/19/meunasah039-play-strategic-role-life-acehnese.html>

付表Ⅶ－１．ピディ県、北アチェ県、アチェ・トゥンガラ県の宗教別人口の推移

ソース：Aceh Dalam Angka (Aceh in Figures) 1981, 1982, 1983, 1984, 1986, 1987, 1988, 1989, 1990, 1997, 1998, 2010, 2011 をもとに作表。2009年と2010年は%のみで実数は不明。

Pidie ピディ県

Year	Islam	Protestant	Katolik	Hindu	Budha	Konghu Chu	Other
1981(n/a)	-	-	-	-	-	-	-
1982	322,536	10	56	17	738	n/a	-
1984	322,536	10	56	17	738	n/a	-
1988	399,149	48	10	17	701	n/a	-
1989	405,283	48	10	17	701	n/a	-
1990	419,321	49	11	18	708	n/a	-
1996	457,469	3	37	10	26	n/a	-
1998	460,063	73	13	441	16	n/a	-
2010 (%)	99.95	0,01	-	-	0.04	-	n/a

Aceh Utara 北アチェ県

Year	Islam	Protestant	Katolik	Hindu	Budha	Konghu Chu	Other
1981	618,142	582	228	53	1,898	n/a	6
1982	628,833	634	236	60	1,892	n/a	-
1984	653,666	631	351	68	1,945	n/a	4
1988	770,880	682	377	73	2,064	n/a	-
1989	787,175	682	377	73	2,064	n/a	-
1990	843,211	691	375	74	2,084	n/a	-
1996	920,265	526	358	81	1,149	n/a	-
1998	923,877	1,871	432	132	2,848	n/a	-

Aceh Tenggara アチェ・トゥンガラ県

Year	Islam	Protestant	Katolik	Hindu	Budha	Konghu Chu	Other
1981	122,495	34,879	1,768	-	61	n/a	44
1982	122,495	34,879	1,768	-	61	n/a	44
1984	122,495	34,879	1,768	-	61	n/a	44
1988	146,430	37,248	3,271	-	-	n/a	74
1989	151,855	37,248	3,271	-	-	n/a	74
1990	144,799	37,620	3,274	-	-	n/a	75
1996	166,436	37,002	2,474	-	270	n/a	-
1998	189,645	35,026	2,909	-	-	n/a	-

付表VII-2. ピディ県、北アチェ県、アチェ・トゥンガラ県の宗教施設数の推移

ソース：付表1と同じ。

<u>Pidie</u> ピディ県							
1981	171	1,244	300	-	-	-	-
1982	171	1,244	324	-	-	-	-
1983	171	1,244	324	-	-	-	-
1984	171	1,244	300	-	-	-	-
1986	198	1,269	329	-	-	-	-
1987	201	1,269	329	-	-	-	-
1988	201	1,269	329	-	-	-	-
1989	202	1,269	329	-	-	-	-
1990	202	1,269	329	-	-	-	-
1996	207	1,269	329	-	-	-	-
1998	217	1,269	329	-	-	-	-
<u>Aceh Utara</u> 北アチェ県							
1981	303	1,539	291	4	1	-	1
1982	303	1,546	293	4	1	-	-
1983	303	1,546	293	4	1	-	-
1984	303	1,539	291	4	1	-	1
1986	316	1,556	305	4	1	-	1
1987	316	1,556	305	4	1	-	1
1988	316	1,556	305	4	1	-	1
1989	336	1,559	322	4	1	-	1
1990	327	1,559	325	4	1	-	1
1996	388	1,554	344	4	1	1	-
1998	406	1,554	344	4	1	1	-
<u>Aceh Tenggara</u> アチェ・トゥンガラ県							
1981	134	242	51	61	9	-	-
1982	134	242	49	61	9	-	-
1983	134	242	49	61	9	-	-
1984	134	242	51	61	9	-	-
1986	146	256	73	61	9	-	-
1987	145	256	82	61	9	-	-
1988	145	256	82	61	9	-	-
1989	162	244	80	61	9	-	-
1990	162	244	80	61	9	-	-
1996	200	157	100	61	9	-	-
1998	205	157	119	61	9	-	-

VIII 制約性と表現性——アチェ人の衣生活における宗教とファッション

衣生活をめぐる議論の中に、日本においても 1980 年代前後に制服のもつ制約的な側面についての議論がみられた。その一つに、衣服に備わっているとみなされた社会秩序維持の機能を活用して、制服で体現される秩序から逸脱する者にラベリングしたり、処分の対象にしたりすることに、とくに学校等の脈絡で、使われてきたことにたいする批判があった。服装は均一のものを作り出せる特性をもち、個人が必ず個別に着装するものという特性があることから、制服に社会（学校）の規則であるとの名目上の規則を付与させて服装規則（ドレス・コード）とし、個人がその要請に応じる人間であるかどうかを判定する基準としての服装が制服として容易に使われてきたのである。制服は個人を没個性化させるものであるとか、その人の自由な表現能力を収奪するものであるとの懸念もあった。一方、個人のアイデンティティ形成に集団の帰属性の経験が必要だという想定から帰属性意識をもたらす制服の有用性や、経済的余裕のない者への救済的役割を指摘する肯定的な論議もあった。結局、衣服のもつ多面性に振り回された形で収束的な議論にはならないまま、それまでにみられなかった衣服そのものへの関心があらわれた。例えば、教育の商品化の進行による学校選択の決め手としての役割が制服のファッションナブル化に託されたことは、その服が選択の対象になるかどうか判断される存在となったことを示す。それを着用する人間が主役になることで、服装の制約性が選択性に転換され、その転換を支えたのが多様で新規なスタイルを早いサイクルで提供するファッションであった。しかし、服装にたいする制約性が社会の基盤に存在する場合、ファッションはどう受け入れられるのであろうか。ここで、イスラームの慣習法が正式に適用され、服装にたいする制約が社会的に存在するインドネシアのアチェ州地域をとりあげ、この間について答えてみたい。具体的には、服装に関わる制約性が、信仰心の高いアチェ人に受け入れられている状況のなかで、個人の表現性がどのように存在しうるのかを検討していくことにする。

調査地の概要

インドネシアの最西端にあるスマトラ島の西北端を占めるアチェ（州名）は、2004 年 12 月に約 20 万人の犠牲をもたらした大津波の被災によって、そして、その後のアチェの分離独立派と政府間の長年の対立の急速な終息によって、多くの研究者の災害・復興支援、政治宗教、そして文化社会歴史への関心を引きつけた（e.g., Aspinall 2009; Graf, Schroter & Wieringa 2010; Reid 2006）。アチェは、地理的近接性からインドネシアで最も古くからイスラーム教が浸透したと考えられ、実際に、17 世紀にマレー半島にまで及ぶイスラーム王国として栄え、とくに生活文化的な特徴から、主にトルコ、インド、中国の文化的影響を歴史的に強く受けていると考えられている（Smith 1997）。18 世紀以降は政治経済的な勢いを失い、とくに 19 世紀末から 20 世紀初頭まで数十年に

及んだオランダとの対立状態は、懸案の独立問題と絡んで、2004年の大災害に遭うまで持ち越されてきたとあってよい。

アチェの生活上の特徴として特筆すべきことは、州内全域でイスラーム法（シャリア・イスラーム Syariat Islam）が公式に適用されていて、生活の諸側面に法的な制約がかかっていることである。とくに女性の衣生活に関する規則が明確にあり、すべてのイスラーム教徒である女性は幼い子どもを除いて、自宅の外では、イスラーム教徒以外の女性と明確に区別できるほど衣服着形態（とくに頭部を被うジルバブ）を守っていて、女性の宗教性を体現している。この慣習法の公式採用は、インドネシアにおいてアチェだけで実施され、中央政府も2002年に、アチェにおけるこの慣習法の効力を認めている。

しかし、アチェには、主に沿岸部一帯の住民であるアチェ人以外に、異なる文化をもつ住民にガヨ人、アラス人、アヌク・ジャマー人、タミアン人がいて、それぞれがまとまった地域で生活し、アチェ人と類似性を持ちながらも独自の民族服を保持していて、同じイスラーム教徒であってもアチェ人と同様の慣習法にたいする敬虔さを持っているとは限らない。また、アチェの沿岸部には、古くから中国系の住民が少なからず暮らしていて、スハルト政権による中国系文化の表出に非寛容な政策が政権交代を経て撤廃され、言葉の再修得の活発化や、アチェの州都バンダ・アチェで2011年5月に歴史的に最初の中国系のフェスティバルが実施され、アチェにおける文化的多様性を政治的に受け入れ観光政策に組み入れるという画期的な出来事となった。これによりアチェの中国系住民の間で自由に中国的服装の着用が子ども世代を中心に広がり始める端緒が開かれたとあってよい。このように、アチェは多数派住民であるアチェ人の文化には他文化の影響の多様な存在があり、現在は、アチェにおいて、かつて他の地域の人々から宗教的に保守的で一様な住民からなる土地とイメージされてきたことから抜け出て、他の地域、他の国と同様に、多様な人々が暮らす土地であることの再認識から、それにもとづいたイメージ作りが始まったといえる。

ここでは、アチェにおけるこうした文化的背景の異なる住民それぞれについて検討することは紙幅の都合からできないので、アチェの主な住民であるアチェ人に焦点をあてて論考を進めることにする。

信仰の敬虔さと衣生活への宗教上の制約

アチェ人が信仰心の高い敬虔なムスリムであり、アチェ戦争で長期にわたり抵抗力を発揮した不屈で頑強な人々であると、他の地域の人々、とくに想像される国家の形成を担ったジャワ人によってみなされてきた。事実、アチェ戦争で倒れたトゥク・ウマルは抵抗のヒーローであり、彼の妻もヒロインとして彼らの存在がアイコン化されてきた。同じムスリムであるジャワ人が天然資源の豊富なアチェへ「移住」し資源の恵みを持ち去ることは、歴史的に独立を保持してきたと考える分離派のアチェ人にとって、ジャワ人を中心とする政府による第二の植民地化と解釈され、分離独立の根拠の一部にされた（Aspinall 2009: 54）。アチェに対するステレオタイプ的なイメージは、古くからイスラーム法（シャリア・イスラーム）を重視してきた人々であったことと、それを体現する日々の可視的なアチェ人の営みで補強され続けている。可視的営みの

最たるものは女性のジルバブの着用であり、近年でも、海外メディアの注目を引いたシャリア警察によるジルバブ不着用者への取り締まりが映像化して報道され、アチェの宗教上の日常生活への制約の強さのイメージを強化することになった。しかし、慣習法の受容は日常性の中に蒸着して当たり前のことと受け止められていることは、聞き取りをした人々の話から確かめられる一方で、どれほどまでに適用されるかについては常に解釈の対象であり、議論の的にもなっている（Yunis 2009）。

ここで、慣習法が衣生活との関わりでどのような制約をもたらしているのかをみてみる。公の場でムスリム女性が着用すべき服装のあり方を説明しようとした州政府作成のリーフレットによると、コーラン（Al-Quran）において、神 Allah が予言者 Nabi Muhammad SAW に伝えた項目に、①アウラ（aurat 恥部（顔と手掌以外の身体部分））を覆うもの、②穴のあいていないもの、③体の線をあらわさないもの、④男女の異装の禁止、⑤形が特殊でないこと、⑥異教徒の衣服の形でないこと、⑦香水を使ってはいけないこと、⑧媚びたり人気を得たりするためのものでないこと、の8項目があるとしている。これら8項目のうち、現在、バンダ・アチェ市内とアチェの主要都市の公の場所で観察できる女性の服装から判断すると、守られている項目として、①⑤⑥を挙げることができる。外部者にとって明確に判断できないが守られていると推測されるのは、②④⑦である。残された③の体の線をあらわさない衣服に関しては、世界的なファッションである脚部のぴったりとした衣服がとくに若い世代で一般化していて、必ずしもすべての世代の女性で守られているわけではなくなっていることがわかる。

信仰の敬虔さを示すのに、宗教上の教えに従って、女性の服装のあるべき姿をとることで、人間としてのあるべき姿が体现され、敬虔な信仰者であることを自他ともに伝えていこうと考えれば、アチェ人女性の宗教儀礼時の服装を観察する限り、上記のすべての項目に当てはまる形態をとっていたことは理解できる。しかし、宗教儀礼時以外の日常生活での服装のあり方をみるかぎり、信仰の敬虔さを示すことは、教えのすべてに従う必要はなく、その一部、とくに頭部を被うことで象徴的に保証されていると考えられる。また、上述の項目の⑧を宗教的教えの1つとして解釈すれば、通常考えられることは、簡素さの追究により、信仰の敬虔さが追究されるであろう。例えば、ヨーロッパでの迫害を逃れてアメリカに移住したアーミッシュは現在でも、単調な色彩で単純な形態の頭部を含めた全身でまとう形態の服装を儀礼時でも日常でも保持している。アチェにおいても、色と形の簡素さや単調さが主流であるようである。しかし、インドネシアのジャワの都会で、ムスリム女性の信仰心とファッションとの関連を検討した研究（Jones 2010）が示すように、頭部の被いがファッションの対象となって人気をとるスタイルのものが販売され購入され着用されるようになってきている現象があり、そのことが信仰から外れるのかどうかの議論があるように、アチェにおいても今後、グローバルなファッションの受け入れかたにより、同様の問題が生じると思われる。

表現性の追究としてのファッション

アチェ人女性の服装は、イスラーム慣習法を守りながらも、近年のグローバル経済

の波を、津波による被災以降の社会的な変化の中で、受け続けていて、世界的なファッションの動きに影響を受け始めていることは確かである。例えばファッション記事を含む女性向け雑誌の流通がみられ、アチェ人女性のファッションデザイナー（男性も少なくとも一人いる）が判明しているだけでも十数名存在するようになった。アチェ市内でビジネスとしてのファッションデザイナーの仕事場での観察・聞き取りから、一般的なデザイナーの仕事であるデザイナー自身の独自のデザインによる服飾の作成、つまり提案的な仕事の仕方のみならず、一部のデザイナーは、客が店にきて自分の考えるデザインを示し提案したことを客と話しながらか修正を加えて最終版を作り、客のファッション指向に沿った服を作っていた。このように、アチェ人の衣生活、とくに女性の服装において、ファッション化の流れが確かに存在していることがわかる。

こうした服装のファッション化の流れの現象の存在は、宗教的敬虔さを堅固に保持してきたと思われるアチェ人が、その精神を自ら知らず知らずのうちに放棄していることになっていることを意味していると解釈してよいだろうか。現在、急速に変動するアチェ社会において、今後どのような展開がみられるのか明確に予測できないことから、この間にたいする答えはまだ十分にできないと考える。しかし、現時点での聞き取りからすると、この間の鍵が、アチェ人の考えるイスラーム的な文化と、アチェ人が古くから継承してきたはずの土着的な文化とが、別個に存在するのではなく、一緒であり一体になったものであるという認識の仕方をしていることにあると考える。この点は、Aspinall (2009)が、アチェ人の文化的アイデンティティを議論しているときに、指摘した点と同じである。つまり、例えば、婚姻儀礼において、実際に観察したことをもとに述べると、先行するメスジット（アチェでモスクの意味）での儀礼ではイスラームの衣装を新郎新婦ともに着用していて、その後、アチェの伝統的な衣装に着替えて、新婦の村に行って新婦の実家での儀式に備えていた。後半の伝統的な衣装について聞き取りをすると、この衣装もイスラームの衣装であるというのである。部外者にとっては、アチェ独自の伝統衣装と、イスラーム教徒で共通的な儀礼服との間には境界があると思えるのであるが、アチェ人にとってこれら二つの種類の服装はともにイスラームであり、つまり、大きな違いがあるわけではないというのである。Aspinall (2009)が述べたような、アチェ人のアチェ人としての文化的アイデンティティは、イスラームの文化的アイデンティティと一体となった理解がされていて、どのような言説をとっても、それらを分離しているような言説はなかったことが、そのまま服装についていえるのである。なぜ一体なのかについての分析は興味深いものであるが、十分な分析をするための資料の蓄積を経なければ、うまくいかないであろう。

ここで注意しなければならないことは、前述の婚礼時の儀礼服のうち、アチェ独自の村方での儀礼に用いる服装は新郎新婦ともに、きらびやかな装飾の施された華美な衣装であることである。新婦の実家で婚礼儀礼がおこなわれる部屋も全面的にきらびやかな装飾がされている。こうした儀礼服の二重性のうちの伝統的と呼ぶことのできる服装は、アチェにおけるアチェ人以外の文化的背景をもった人々の間でも、それぞれに類似性を持ちながら、比較すると確かに独自性をもった形状と装飾の仕方があり、やはりそれぞれが、きらびやかさをもっている。この華麗さは、主に金糸銀糸による刺繍が衣装やタペストリに施されていることにある。

多様な表現性を支える文化背景

アチェにおける衣生活に関わる宗教上の制約性が、敬虔さを示し、男女関係のありかたから家族関係を含む社会の秩序づくりに関わるものであり、他の宗教における制約と同じ役割を果たしていることに違いがない。そうした精神性を体現しようとするとき、ある場合は簡素さや単純さが強調され、他の場合はアチェにおけるように、模様や刺繍で表すことのできる複雑さや華美さを含むことに帰結することがあるのである。アチェの人々の口から聞かれるのは、きらびやかさや華美さを求めることは、むしろ「神を喜ばせる」ことであり、イスラームの教えに合致したものであるということであった。このような認識のもとで、儀礼服の二重性は、アチェ人にとっては一体となってしまっていて、つまり、どちらのタイプの儀礼服もイスラーム的な服である。

ここで筆者は、仮説的に、こうした認識の仕方が、女性の衣生活とファッションとの関係にも存在するのではないかと考える。なぜなら、きらびやかさや華美さは、アチェ人の美意識の土台にあり、媚びたり人気を博したりするような人目を独占するものでない限り、神の喜びを得るものであると理解されていて、そうしたきらびやかさや華美さの延長上にファッションで示される内容が収まっていると考えられるからである。近年、バンダ・アチェでは、すでに何度かファッションショーが開催されていて、地元のデザイナーとジャカルタなどからのデザイナーが参加している。どの作品のデザインも頭部は被われている点では、イスラーム慣習法にかなっていて、ムスリムにとって安心して楽しめるデザインとなっているが、ムスリム以外の者がみても宗教性を意識することなくファッションナブルなデザインとしてみることもできる。その1つが、2011年5月8日夜に *Exploration of Aceh Culture on Moslem Fashion* と銘打ってバンダ・アチェで開催され、観客は階層的に中上位としても世代的には様々なようすで、ファッションそのものが若い世代を通して浸透するというより、各世代を喜ばすものとして受け入れられ始めているようであった。イベント名からわかるように、アチェ文化的なファッションは未開拓であり、その追究はイスラーム信仰の敬虔さを薄めたり消し去ったりすることではなく、むしろそれになかったことであると考えられていることがわかる。アチェ文化の古くからの伝統の基盤がきらびやかさや華美さの要素を含んでいたとしても、アチェ文化自体がイスラームのものであるという考えからすると、そうした要素を現代ファッションの中うまく融合していくことは、慣習法に触れることにならないのである。そうした要素を発揮させることが、アチェ文化的アイデンティティを体現させることにつながり、むしろ文化の再創造として求められているといえる。

このように考えてくると、これまで衣生活をめぐって検討してきたことが、必ずしも衣生活に限定すべきものではないとも考えられる。他の生活場面をみることで、衣生活に関わる検討をさらに深めることにもなるのではないかと考えられる。そこで、次に、具体的な日常生活で、少なくとも部外者にとって、視覚的に顕著にとらえられるものの一例として、アチェにおける街や村の日常空間に点在するモスク（アチェではメスジッドと呼ばれる）の頭部をみてみることにする。

それぞれの文化の宗教と密接にむすびついている神社仏閣寺院神殿は、その文化の空間のなかで誰でもそれと分かる、少なくとも察することができるスタイルで各地に

存在している。詳細にみると個々の建物自体の違いがあることがわかる。イスラームのモスクもそれに外れることはない。しかし、アチェにおいて各地を訪れて気づくのは、他の宗教と異なり、モスクの頭部の形状や色彩が多様であることである。一見してその外貌に一つ一つ個性があるといえるのである。現在、アチェの各地のモスクは新築・修復・修繕・再建されているものが少なくない。この事実はモスク自体が「完成品」として厳然に在るといふ先入観を覆してしまうようなことである。また、大小それぞれのモスクが地域住民の熱意と資金によって作られていて、街道沿いの工事中のモスクのために街道の中央線に沿って立って通行する車から寄付を募っている地域住民の姿がしばしばみられる。こうした寺院の工事中の姿が多くみられることは、Hefner (2010)が、宗教の見直しの興隆現象ととらえていることと符合する。

宗教が見直され、そのために必要なモスクの数を増やしているときに、それを作る側の考えや希望が、モスクの外貌に表現される過程が、資金ができればそれだけで可能な部分の建設をしていくプロセスの中にあると考えると、人々の創意を体現する場としてモスクの外貌があるとみなすことができるだろう。この結果、モスクの外貌の多様性が生み出されることになる。このデザインングの過程に、豊かな表現性を許す、あるいはそれを求めることがなければ、現実にもみられるような表現性は存在しないだろう。もし、信仰の敬虔さが、宗教上の聖域であるモスクのデザインに制約をかけているならば、表現の豊かさは確保されなかっただろう。アチェ人は宗教的に敬虔で信心深いことからすると、宗教の教えが日々の生活にさまざまな制約を加えていることを彼らは全面的に受け入れているはずである。このことについて検討する前に、外貌の多様性を示す一例をみておくことにする。

バンダ・アチェ中心から南西へ2キロ程のトゥク・ウマル(Teuku Umar)大通りに面して、頭部に個性的外貌をもつモスク(Mesjid Baitul Musyahadah、通称 Mesjid Kopiah Meuketob)がある(図Ⅷ-1)。この頭部の外貌は、アチェ出身の歴史的ヒーローであるトゥク・ウマルが戦闘で被っていたコピア・ムクトゥブと呼ばれる帽子²(図Ⅷ-2)を模したもので、アチェ人英雄の存在を、大通りの名称とともに、体現する意味合いをもっている。

イスラーム圏の衣生活において、マレーシアの君主(サルタン)の被りものが、その王宮のシンボルとしての役割を果たす(Maxwell 1990: 309)と同様に、アチェ人にとってアチェの独自性を表現するモノとして男性用の帽子コピア・ムクトゥブがある。イスラーム文化における人間の頭部にたいする関心は、それに載せる被りものにも及んでいて、一つには既に述べてきたような女性の被りものがあり、もう一つに男性用の帽子があるのである。男性用の帽子にはいくつかのタイプがあるが、ここで注目するコピア・ムクトゥブは、既述したアチェの古くからの伝統的な儀礼服を構成する帽子である。コピア・ムクトゥブは、現在、婚礼時にアチェ人男性がモスクでの儀礼を経たのち、村(デサ)の婚礼儀礼に向かう前に、モスクでの盛装からアチェ独自の盛装に着替えるときに被らなければならない、すべてのアチェ人男性が婚姻時のアイテムとして身につけるものである。婚礼時に男女ともに地元の王族の衣装を平民が身につけることは、王族の権威にあやかる東南アジア一帯でよくみられる慣行であるように、アチェの偉人・英雄にあやかることが許されていると理解できる。



図VIII-1 帽子の屋根のモスク
(Mesjid Kopiah Meuketob)



図VIII-2 コピア・ムクトゥブ
(Kopiah Meuketob)

このトゥク・ウマル通りのモスクを調べてみると、モスクのデザインに作り手の表現性を発揮させることができることが明らかとなった。そのデザイン計画を示す模型が、モスクの事務室に残されていて、当初の計画と現在の外貌を比較すると、モスク頭部のコピア・ムクトゥブの帽子は計画どおり実現されていて、計画になかったモスクを囲む塀の要所に設けられた門の上部に小型のコピア・ムクトゥブが一つずつ載せられている。この帽子に人々を迎える役割を担わせた理由は明確ではないが、大きな帽子を中心に抱いて小さな帽子に取り囲まれている様子は、人々が集まる場所としての華美さが感じられる。模型で示された当初の計画として、敷地内に住民サービスのための各種施設の建設を予定していながらも全く実現していないことから、少なくとも建設計画が中断していても、将来は、敷地全体が地域住民の集う場所になることを小さな帽子が示唆しているように思える。

もともとあった小さなモスクとその一帯の開発計画が実を結ばず、モスクの拡大事業として進める過程で、帽子のデザインに行き着いた経緯は、1970年代の改修中に、前アチェ州知事でこの地域に住んでいたアリ・ハシュミ(Ali Hasjmy)が頭部をどのようにしたらよいか悩んでいたときに、たまたま身近にあったコピア・ムクトゥブの帽子にヒントをえて、その形にすることを決めたといわれている。トゥク・ウマル大通りの由来となったアチェの英雄トゥク・ウマルと密接に結びつけられている帽子を、この大通りの視覚文化の一つとして用いることは、相応しい判断だったといえる。こうした表現性の多様な可能性を保証する装置を、制約性を包摂する宗教の経験な信仰者であるアチェ人が持っていることは、アチェ文化の重要な側面であるといえる。

結論

アチェ人はインドネシアの他の地域の人たちより信仰心が強く、宗教の教えを守ることで、日常生活上のさまざまな面での制約を受け入れ、とくに衣生活における女性への制約を受け入れていることは、観察や聞き取りで明らかである。大津波による被災とその後の政府との因縁的な対立関係が急速に解消され、現在、グローバル経済の

波をどのように受け入れ、社会を構築していくかが日常生活上の課題となっている。そうした中で、ファッションは着実に浸透していて、そこには地元での様々議論が生じる源泉があることも確かであるが、女性たちの表現性は、衣服にかかる制約の内側で、開花しているといえる。本論では、多様な表現性の確保がなければファッションが成り立たないという前提から、どのように表現性が確保されているのかを検討していった結果、アチェ人のもつ古くからの伝統的な文化に備わったきらびやかさや華美さが、自らの文化の見直しと再創造の過程で、流用され活用され、ファッションの展開の中で体現させようとしていることが明らかになった。こうした事象が可能となったことには政治社会経済の変化の影響もあると考えられるが、本論では、女性とファッションの問題に限らず、宗教上の制約と表現性の多様性の確保との間には、男性も含めたアチェ人の間に表現性を価値づけ、それを制約の中でも体現する場面をもっていることを、モスクのデザインを一例として確認することができた。制約された枠の中での複雑化と精緻化を意味するインヴォリューションを、アチェ人は伝統的な衣服や装飾で発揮させてきた経験をもつとすると、長い対立的緊張関係が続く状況では発露を見いだせなかったと思われる。そうした状況が解消した現在、グローバル化の波が破壊的な力をもつのではなく、宗教上の制約性を受け入れながらも、再び自らの表現性を活発に複雑化させ精緻化させる道筋を開く力にどのようにしていくのか、つまり、今後、信仰の敬虔さを台無しにすることなしに、どう表現性を保持し高めていくのかをみていくことは、同様の課題をもつ他の地域の人に示唆を与えるだろう。

謝辞

本研究は、文化学園大学文化ファッション研究機構の服飾文化共同研究事業から助成（2009～2011年度）を得た。関係各位に謝意を表すとともに、現地調査の円滑な遂行に尽力していただいた Herawati binti Muhammad Zain 氏に感謝したい。

注

アチェにおけるフィールド調査は、佐野の場合、6回にわたるインドネシア訪問（2010～2011年度）で実施した。訪問期間はそれぞれ1週間程から3週間程の間であった。

1. チュット・ニャック・ディエン博物館（Museum Cut Nyak Dhien）に展示されている20世紀初めの写真資料による。
2. 現在、ピディ県ガロット村で女性によって生産されている。2004年の大津波で生産者が亡くなる前まで、アチェの南岸の小都市ムラボーでも生産されていた。ちなみに、ムラボーは英雄トウク・ウマルの生誕地であり、戦闘で倒れた地でもあり、コピア・ムクトゥブの帽子の形をしたモニュメントが建設されている。

文献

- Aspinall, Edward 2009 *Islam and Nation: Separatist Rebellion in Aceh, Indonesia*. Stanford University Press.
- Graf, Arndt, Susanne Schroter & Edwin Wieringa (eds.) 2010 *Aceh: History, Politics and Culture*. Institute of Southeast Asian Studies.

- Hefner, Robert W. 2010 Religious Resurgence in Contemporary Asia: Southeast Asian Perspectives on Capitalism, the State, and the New Piety. *The Journal of Asian Studies* Vol.69(4): 1031-1047.
- Jones, Carla 2007 Fashion and Faith in Urban Indonesia. *Fashion Theory* Vol.11 (2/3): 211-232.
- 2010 Materializing piety: Gendered anxieties about faithful consumption in contemporary urban Indonesia. *American Ethnologist* Vol.37 (4): 617-637.
- Lukens-Bull, Ronald A. 2001 Two Sides of the Same Coin: Modernity and Tradition in Islamic Education in Indonesia. *Anthropology & Education Quarterly* Vol.32 (3) 350-372.
- Maxwell, Robyn 1990 *Textiles of Southeast Asia, Tradition, Trade and Transformation*. New York: Oxford University Press.
- Reid, Anthony (ed.) 2006 *Verandah of Violence: The Background to the Aceh Problem*. Singapore University Press.
- Smith, Holly S. 1997 *Aceh: Art and Culture*. Oxford University Press.
- Smith-Hefner, Nancy J. 2007 Javanese Women and the Vail in Post-Soeharto Indonesia, *The Journal of Asian Studies* Vol.66 (2): 389-420.
- Yunis, Tabrani 2009 Bertanya Rok Gratis Bupati. *POTRET* Vol.29: 7-9. *Media Perempuan Aceh*.

文献総覧

Akou, Heather Marie

2007 Building a New “World Fashion”: Islamic Dress in the Twenty-first Century, *Fashion Theory* Vol. 11 Issue 4, Berg:pp.403-422.

Alamsyah, T., T. Alibasyat Talsya, Tuanku Abdul Jubril(ed.)

1990 *Pedoman Umum Adat Aceh* (アチェの一般慣習案内), *Edisi 1*: Lembaga Adat dan Kebudayaan Aceh, Propinsi Daerah Istimewa Aceh.

Al Yasa Abubakar

2008 *Antara Setia dan Durhaka, Ulasan Tentang Hak dan Kewajiban Suami Isteri* (忠実と不忠、夫婦の権利と義務の解説) : Badan Pemberdayaan dan Perlindungan Anak, Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam.

Ananta, Aris Lee Poh Onn

2007 *Aceh, A New Dawn*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Andaya, Leonard Y.

2008 *Leaves of the same tree: trade and ethnicity in the Straits of Melaka*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Anizar Ahmad, M. Pd.

2009 *Meningkatan Citra Batik Aceh Melalui Produksi Pakaian Seragam Kerja dan Seragam Sekolah* (仕事と学校での衣服の生産を通じたアチェのパティック創作の向上) , Seminar Sehari: “Ekstensi Potensi Daerah Melalui Kreasi Sandang dan Pangang”, Universitas Syiah Kuala, Banda Aceh.

Asosiasi Perancang dan Pengusaha Mode Indonesia (APPMI)

2009 *Muslimah's Urban Chic*: Noor.

Aspinal, Edward

2006 Violence and Identity Formation in Aceh under Indonesian Rule, *Verandah of Violence: The Background to the Aceh Problem*, Reid, Anthony (ed.): Singapore University Press:pp.149-176.

2009 *Islam and Nation: Separatist Rebellion in Aceh, Indonesia*. Stanford (Calif.): Stanford University Press.

Azhar Munthasir, M. Si dkk

2008 *Adat Perkawinan Etnis Alas (Hasil Observasi)* (アラス民族の婚姻慣習 (調査結果)): Dinas Kebudayaan dan Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam.

2009 *Adat Perkawinan Etnis Aneuk Jamee* (アヌク・ジャメー民族の婚姻慣習): Dinas Kebudayaan dan Pariwisata Aceh.

Badan Pusat Statistik Kabupaten Pidie

2009 *Pidie dalam Angka 2009* (2009年ピディの統計).

Badan Pusat Statistik

- 2007 *Peta Indeks Kecamatan Perdesa 2007 Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam.*
(アチェ特別州の県・郡地図インデックス)

Badan Pusat Statistik Kota Banda Aceh

- 2010 *Banda Aceh dalam Angka Tahun 2010* (2010年のバンダ・アチェ統計).

Bangkaru, M.

- 1997 *A Handbook to Aceh 1998*. CV Penerbit Balohan Haloban.

Brenner, Suzanne A.

- 1995 Why Women Rule the Roost?: Rethinking Javanese Ideologies of Gender and Self-Control, *Bewitching Women, Pious Men: Gender and Body Politics in Southeast Asia*, Ong, Aihwa & Pelets, G. (ed.): University of California Press: pp.19-50.
- 1996 Reconstructing Self and Society: Javanese Muslim Women and “The Veil”, *American Ethnologist* Vol.1 No.1: pp.673-697.
- 2005 Islam and Gender Politics in Late New Order Indonesia. In *Spirited Politics: Religion and Public Life in Contemporary Southeast Asia*, Willford, Andrew C. and George, Kenneth M. (eds.), Studies on Southeast Asia, No.38:pp.93-118.

BRR

- 2005 *Aceh and Nias One Year After The Tsunami, The Recovery Effort and Way Forward.*

Cort, Louise Allison

- 1989 The Changing Fortunes of Three Archaic Japanese Textiles. In Annette B. Weiner and Jane Schneider (eds.) *Cloth and Human Experience*. Washington and London: Smithsonian Institution Press. Pp.377-415. (邦訳: ワイナー/シュナイダー『布と人間』佐野敏行訳、ドメス出版、1995年、所収)

Datin Seri Endon Mahmood

- 2002 *The Nyonya Kebaya, A Century of Straits Chinese Costume*: Periplus, Singapore.

DEKRANAS

- 2010 *Kriya, Indonesian Craft, Perhiasan Tercipta Lewat Harmoni* No.21.

Dekranas Kabupaten Aceh Tamiang

- 2008 *Kabupaten Aceh Tamiang Motif Tradisional* (アチェ・タミアン県の伝統的モチーフ) .

Dinas Perindustrian Daerah Istimewa Aceh

- 1987 *Motif Hias Seni Ornamentik Aceh* (アチェの装飾芸術のモチーフ) .

Dorodjatun Kuntjoro-Jakti (ed.)

- 1988 *Perdagangan, Pengusaha Cina, Perilaku Pasar* (中国人の交易商業、市場): PT Pustaka Grafika Kita, Jakarta.

Duara, Prasenjit

- 2010 Asia Redux: Conceptualizing a Region for Our Times, *The Journal of Asian Studies*, Vol.69, No.4: pp.963-983.

Eye on Aceh

2006 *A People's Agenda?—Post-Tsunami Aid in Aceh.*

Grabski, Joanna

2009 Making Fashion in the City: A Case Study of Tailors and Designers in Dakar, Senegal, *Fashion Theory*, Vol.13, Issue 2: pp.215-242.

Graf, Arndt, Susanne Schröter, Edwin Wieringa

2010 *Aceh, History, Politics and Culture*: Institute Southeast Asian Studies, Singapore.

Hasan, Ibrahim

2003 *Namaku Ibrahim Hasan* (私の名はイブラヒム・ハサン) ; Menebah Tantangan Zaman, Jakarta: Yayasan Malem Putra.

Hasjmy, A.

1983 *Kebudayaan Aceh dalam Sejarah* (歴史におけるアチェの文化) : Penerbit Beuna, Jakarta.

H. Badruzzaman Ismail, SH, M. Hum

2009 *Panduan Adat dalam Masyarakat Aceh* (アチェ社会における慣習案内) : Majelis Adat Aceh (MAA) Provinsi Aceh.

Hefner, Robert W.

2010 Religious Resurgence in Contemporary Asia: Southeast Asian Perspectives on Capitalism, the State, and the New Piety. *The Journal of Asian Studies*, Vol.69, No.4: pp.1031-1047.

Herawati binti Muhammad Zain

2006 *Busana Tradisional Aceh (Khususnya Busana Aceh Pesisir)* (アチェの伝統衣服 (特にアチェ海岸民族の衣服について)) : Seminar of Kochi Women's University.

2009 *Tenunan Aceh dalam Tantangan Masa* (挑戦の時代におけるアチェの織布) : Seminar of Jurusan Pendidikan Teknologi Kejuruan Fakultas Kejuruan dan Ilmu Pendidikan, Universitas Syiah Kuala, Banda Aceh.

H. Rohani Abd. Fatah, M. Ag.

2009 *Penerapan Busana Islami di Bumi Teuku Umar* (トウク・ウマルの地におけるブサナ・イスラームの衣服) : Dinas Syariat Islam Kabupaten Aceh Barat bekerjasama dengan Yayasan PeNA Banda Aceh.

Hurgronje, Snouck, (Richard James Wilkinson)

1906 *The Achehnese Vol. II*: Late E.J. Brill, Leyden.

Hurgronje, Snouck

1985a *Aceh, di Mata Kolonial Jilid I* (植民地時代のアチェ) , Jakarta: Yayasan Soko Guru.

1985b *Aceh, di Mata Kolonial Jilid II*, Jakarta: Yayasan Soko Guru.

Ichwan, Moch Nur

2011 Official ulema and the politics of re-Islamization –the Majelis Permusyawaratan Ulama, Shariatization and contested authority in post-new order Aceh, *Journal of Islamic Studies* 22(2): pp.183-214.

Intarina Hardiman

2010 *Busana Muslim bagi yang Bertubuh Mungil*(かわいいムスリムの衣服) : Threes Emir.

Jenike, Mark R., Kelsey Luts, Celine Vaaler, Sarah Szabo, and John E. Mielke

2011 Thinking About Food, Drink, and Nutrition among Ninthe Graders in the United States Midwest: A Case Study of Local Partnership Research, *Human Organization*, Vol. 70, No.2:pp.139-152.

Jones, Carla

2007 Fashion and Faith in Urban Indonesia, *Fashion Theory* Vol.11 Issue 2/3, Berg:pp.211-232.

2010 Materializing piety: Gendered anxieties about faithful consumption in contemporary urban Indonesia, *American Ethnologist* Vol.37 No.4, University of Colorado, Boulder: pp.617-637.

Jones, Jessieca

2010 Global Hakka: a case study, *Asian Ethnicity* Vol.11, No.3 October:pp.343-369.

Kadir, Ibrahim

2007 *Makna, Pengertian, Pilsafat yang Terkandung dalam Ukiran Ukiran Motif Gayo* (ガヨの彫刻モチーフにおける意味、解釈、哲学) , *Kabupaten Aceh Tengah: Kabupaten Aceh Tengah Provinsi Nangroë Aceh Darussalam*.

Kartikasari, Tatiek

1986/1987 *Arti Perlambang dan Fungsi Tata Rias Pengantin dalam Menanamkan Nilai-Nilai Budaya Propinsi Daerah Istimewa Aceh* (アチェ特別州の文化価値における婚礼の象徴的意味と装飾様式) : Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Pusat Penelitian Sejarah dan Budaya Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah.

Karita Muslim Square

2008 *Ekspresi Mukena, 100 Kreasi Mukena Cantik* (ムクナの表現、魅力的なムクナの100の創造) : PT Gramedia Pustaka Utama.

Khan, Sher Banu A. L.

2010 The Sultanahs of Aceh, 1641-99, *Aceh: History, Politics and Culture*, Graf, Arndt, Susanne Schröter and Edwin Wielenga (ed.), Institute of Southeast Asian Studies, Singapore:pp.3-25.

Khiththati

2010 Baju Syariat (衣服の条件) , *Potret, Media Perempuan* No.32: Center for Community Development and Education: pp.64-67.

Kitzbichler, Stephan

2011 Built back better? Housing reconstruction after the Tsunami disaster of 2004 in Aceh, *Asian Journal of Social Science* 39: pp.534-552.

Latour, Bruno

2005 *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*. New York: Oxford University Press.

Leigh, Barbara

1982 Design Motifs in Aceh: Indian and Islamic Influences, *The Malay- Islamic World of Sumatera: Studies in Politics and Culture*: Monash University: pp.3-33.

1989 *Tangan-tangan Trampil, Hands of Time, Seni Kerajinan Aceh* (アチェの工芸芸術) : Penerbit Djambatan.

Lembaga Adat dan Kebudayaan Aceh

1993a Pakaian Aceh (1) (アチェの衣服), *Jeumala, Majalah Dwi Belanan Suara Laka*:pp.8-13.

1993b Pakaian Aceh (2) (アチェの衣服), *Jeumala, Majalah Dwi Belanan Suara Laka*:pp.19-22.

Lewis, Reina

2007 Veils and Sales: Muslims and the Spaces of Postcolonial Fashion Retail, *Fashion Theory* Vol.11 Issue 4, Berg: pp.423-442.

Lukens-Bull, Ronald A.

2001 Two Sides of the Same Coin: Modernity and Tradition in Islamic Education in Indonesia, *Anthropology & Education Quarterly* Vol.32(3):pp.350-372.

Maxwell, Robyn

1990 *Textiles of Southeast Asia, Tradition, Trade and Transformation*, New York: Oxford University Press.

Mc. Suprapti (ed.)

1980/1981 *Pola Pemukiman Penduduk Pedesaan Daerah Propinsi D.I. Aceh* (アチェ特別州の地方居住区の形態) : Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah.

Merry, Michael S. and Milligan, Jeffrey A.

2009 Complexities of belonging in democratic and democratizing societies -- Islamic identity, ethnicity and citizenship in the Netherlands and Aceh, *Journal of Muslim Minority Affairs* 29(3): 311-323.

Miller, Michelle Ann

2006 What's Special Autonomy in Aceh?, *Verandah of Violence: The Background of the Aceh Problem*, Reid, Anthony(ed.): Singapore University Press:pp.292-314.

Missbach, Antje

2011 The Acehnese diaspora after the Helsinki Memorandum of Understanding: return challenge and diasporic post-conflict transformations, *Asian Ethnicity* Vol. 12, No. 2: pp. 179-201.

Muhammad, ZZ.

1980a *Seni Rupa Aceh I Kabupaten Aceh Tengah* (アチェの芸術 I ・中部アチェ県) :Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.

1980b *Seni Rupa Aceh II Kabupaten Pidie* (アチェの芸術 II ・ピディ県) : Departemen

Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.

- 1980c *Seni Rupa Aceh III Kabupaten Aceh Utara* (アチェの芸術Ⅲ・北アチェ県) : Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.
- 1981 *Seni Rupa Aceh IV Kabupaten Aceh Barat* (アチェの芸術Ⅳ・西アチェ県) : Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.
- 1982 *Seni Rupa Aceh V Kabupaten Aceh Timur* (アチェの芸術Ⅴ・東アチェ県) : Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.
- 1984 *Seni Rupa Aceh VI Kabupaten Aceh Besar* (アチェの芸術Ⅵ・大アチェ県) : Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.
- 1985 *Seni Rupa Aceh VII dan VIII Kabupaten Aceh Selatan dan Aceh Tenggara* (アチェの芸術ⅦとⅧ・南アチェ県と東南アチェ県) : Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan Taman Budaya, Banda Aceh.

Mukhirah

- 2009 *Busana Adat Aceh Sebagai Sumber Inspirasi Pengembangan Mode Busana* (モードの展開へのインスピレーションの泉としてのアチェの慣習衣服), Seminar Sehari dengan Tema: Ekstensi Potensi Daerah melalui Kreasi Sandang dan Pangan, Tata Busana Jurusan PKK-FKIP Universitas Syiah Kuala.

Museum Negeri Propinsi Daerah Istimewa Aceh

- 1991 *Pameran Khusus, Pakaian Adat Aceh dan Perkembangannya* (アチェの慣習衣服とその開花展) : Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Proyek Pembinaan Permuseuman Daerah Istimewa Aceh.

M. Yunus Melalatoa, Rifai Abu (ed.)

- 1979/1980 *Sistem Gotong Royong dalam Masyarakat Pedesaan Propinsi Daerah Istimewa Aceh* (アチェ特別州の社会における協力システム) : Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Pusat Penelitian Sejarah dan Budaya Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah.

Nagata, Judith

- 1995 *Modern Malay Women and the Message of the 'Veil', "Mali" and "Female" in developing Southeast Asia*, Karim, Jahan Wazir (ed.): Berg Publishers: pp.101-120.

Nazamuddin, Agussabti, and Syamsuddin Mahmud

- 2010 *Economic Modernization and its Influence on the Social System in Aceh*. In Graf, Arndt, Susanne Schröter and Edwin Wieringa (eds.) *Aceh: History, Politics and Culture*. Singapore: ISEAS Publishing.

Nurhasanah

- 1990 *Peranan Industri Kecil Sulam Benang Emas dalam Meningkatkan*

Pendapatan Rumah Tangga di Kecamatan Meuraxa Kotamadya (バンダ・アチェのムラクサ郡における家庭での金糸刺繍家内工業の役割) : Banda Aceh.

Ny. As Jafar

1988 *Upacara Adat Pengantin Gayo (Teori)* (ガヨの婚礼慣習儀式 (理論)) : Jakarta.

PT Media Nusa Pradana

2010 *Kria, Indonesian Craft, Perhiasan, tercipta Lewat Harmoni* (創作、調和のとれたインドネシアの手工芸と装飾) .

Reid, Anthony

1969 *The Contest for North Sumatra: Atjeh, the Netherlands and Britain 1858-1898*: Oxford University Press.

2000 *Charting the Shape of Early Modern Southeast Asia*: Institute of Southeast Asian Studies, Singapore.

2005a *Asal Mula Konflik Aceh, Dari Perebutan Pantai Timur Sumatera hingga Akhir Kerajaan Aceh Abad ke-19* (19世紀アチェ王国時代終末までのスマトラ島東海岸で起きたアチェ・コンフリクトの起源) , Jakarta:Yayasan Obor Indonesia.

2005b *An Indonesian Frontier: Acehnese and Other Histories of Sumatra*: Singapore University Press.

2006 *Verandah of Violence: The Background of the Aceh Problem*: Singapore University Press.

2009 Escaping the Burdens of Chineseness, *Asian Ethnicity* Vol. 10, No.3: pp.285-296.

2010 *Imperial alchemy: nationalism and political identity in Southeast Asia* : Cambridge University Press.

Rike Roslinawati & Dewi Trisna Afiati

2002 *All Season's Trendy dengan Jilbab Permata's Busana Qirani* (宝飾された美しい衣服のジルバブについてのオール・シーズン・トレンド) : PT Gramedia Pustaka Utama.

Rist, Manfred

2010 *The Economic Development of Aceh since 1945, Aceh: History, Politics and Culture*, Graf, Arndt, Susanne Schröter and Edwin Wieringa (ed.), Institute of Southeast Asian Studies, Singapore:pp.99-119.

Rusdi Sufi, Shabri A, Agus Budi Wibowo, MSi, Seno, Sri Wahyuni, S. Sos

1997 *Sistem Bagi Hasil Tradisional pada Masyarakat Etnis Aceh dan Aneuk Jamee* (アチェ民族とアヌク・ジャメー民族社会における伝統的体系) : Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Direktorat Jenderal Kebudayaan Balai Sejarah dan Nilai Tradisional, Banda Aceh.

Said, H. Mohammad

2002a *Aceh, Sepanjang Abad, Jilid 1* (時代の中のアチェ、第1巻): Pemerintah Daerah Nanggroë Aceh Darussalam.

2002b *Aceh, Sepanjang Abad, Jilid 2* (時代の中のアチェ、第2巻): Pemerintah

Daerah Nanggroe Aceh Darussalam.

Sandberg, Kristen

- 1993 Malay Dress Symbolism. In *Carved Flesh/ Cast Selves: Gendered Symbols and Social Practices*, Broch-Due, Vigdis, Ingrid Rudie and Tone Bleie (eds.). Oxford: Berg: pp.195-206.

Sano, Toshiyuki

- 1997 Women and Revival of Traditional Cloth Making in the Philippines and Japan. In *Proceedings of International Conference on Women in the Asia-Pacific Region: Person, Powers and Politics. Department of Geography, South East Asian Studies Programme*, Center for Advanced Studies of National University of Singapore.

Schiller, Rachel

- 2011 Reconciliation in Aceh: Addressing the social effects of prolonged armed conflict, *Asian Journal of Social Science* 39:pp.534-552.

Schröter, Susanne

- 2010 Acehnese Culture(s): Plurality and Homogeneity. In Graf, Arndt, Susanne Schröter and Edwin Wieringa (eds.) *Aceh: History, Politics and Culture*: Singapore: ISEAS Publishing.

Sekolah Menengah Kejuruan Negeri 3 Banda Aceh

- 2011 *Model Menghias Busana (Embroidery)* (衣服の装飾の型 (刺繍)) .

Sim, Katharine

- 1963 *Costumes of Malaya*, Singapore: Eastern University Press LTD.

Skinner, G. William

- 1996 Creolized Chinese Societies in Southeast Asia. In *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese*, Reid, Anthony (ed.) : University of Hawaii Press:pp.51-93.

Smith-Hefner, Nancy J.

- 2007 Javanese Women and the Veil in Post-Soeharto Indonesia, *The Journal of Asian Studies* Vol. 66, No.2:pp.389-420.

Smith, Holly S.

- 1997 *Aceh, Art and Culture*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Spradley, James P.

- 1980 *Participant Observation*. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Sufyur Lc MA, Muhammad Suhaili

- 2008 *Busana Islam di Nanggroe Syariat*(ナングロの慣習におけるイスラームの衣服): Dinas Syariat Islam Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam:pp/3-6.

Sujitno, H. Sutedjo & Achmad, H. Mashud

- 1995 *Aceh: Masa Lalu, Kini dan Masa Depan* (Aceh: Past, Present and Future): Kantor Sekretariat Gubernur KDH Provinsi Daerah Istimewa Aceh.

Tan, Chee-Beng

- 2011 Indonesian Chinese in Hong Kong: Re-migration, re-establishment of

- livelihood and belonging, *Asian Ethnicity* Vol.12, No.1 Feb.
- Tarlo, Emma
 2010 *Visibly Muslim, Fashion, Politics, Faith*: Berg.
- Tri Amalia Lestari, Irma Kurniati Azizah, Yuniarti Fitriani
 2010 *Kreasi Kerudung Cantik* (美しい頭布の創作) : Pustaka Anggrek.
- Waterbury, Ronald
 1989 Embroidery for Tourists: A Contemporary Putting-Out System in Oaxaca, Mexico. In Annette B. Weiner and Jane Schneider (eds.) *Cloth and Human Experience*. Washington and London: Smithsonian Institution Press. Pp.243-271. ((邦訳: ワイナー/シュナイダー『布と人間』佐野敏行訳、ドメス出版、1995年、所収)
- Wood, W. Warner
 2000 Flexible Production, Households, and Fieldwork: Multisited Zapotec Weavers in the Era of Late Capitalism, *An International Journal of Cultural and Social Anthropology*:pp.133-148.
- Yunis, Tabrani
 2009 Bertanya Rok Gratis Bupati (県知事の無料のスカートについて聞く), *POTRET* No.29: Center for Community Development and Education:pp.7-9.
- Yayasan Meukuta Alam Himpunan Ahli Rias Pengantin Indonesia “Melati” Yayasan INSANI
 1990 *Tata Rias dan Upacara Perkawinan Aceh*. (アチェの婚礼装飾様式と儀式)
- Yunus, M.Ahmad & Tatiek Kartikasari (ed.)
 1985/1986 *Pakaian Adat Tradisional Daerah Propinsi Daerah Istimewa Aceh* (アチェ特別州の伝統的慣習衣服) : Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan, Direktorat Sejarah dan Nilai Tradisional, Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah.
- Zainuddin, H.M.
 1961 *Tarik Aceh Dan Nusantara* (アチェとヌサンタラの魅力) : Penerbit Pustaka Iskandarmuda, Medan.
- ヴァサンティ・プSPA
 1980年 「第16章 インドネシアの華人文化」『インドネシアの諸民族と文化』クンチャラニングラット編、加藤剛・土屋健治・白石隆訳、めこん : pp.625-446。
- クロノン、ウィリアム
 1995[1983] 『変貌する大地—インディアンと植民者の環境史』佐野敏行・藤田眞理子訳、勁草書房。(Cronon, William 1983 *Changes in the Land: Indians, Colonialists, and Ecology of New England*, New York: Hill and Wang.)
- シャムスディン、トゥク
 1980年 「第10章 アチェの文化」『インドネシアの諸民族と文化』クンチャラニングラット編、加藤剛・土屋健治・白石隆訳、めこん : pp.270-289。

松本 由香

2000 「インドネシア・アチェの服飾文化—脚衣シルーについて—」『日本服飾学会誌』、
第 19 号、日本服飾学会：pp.70-84。

2011 「文化のアイデンティティとしての服飾デザイン」『生活環境学シリーズ 3 生活
のデザイン』横川公子編、光生館：pp.77-84。

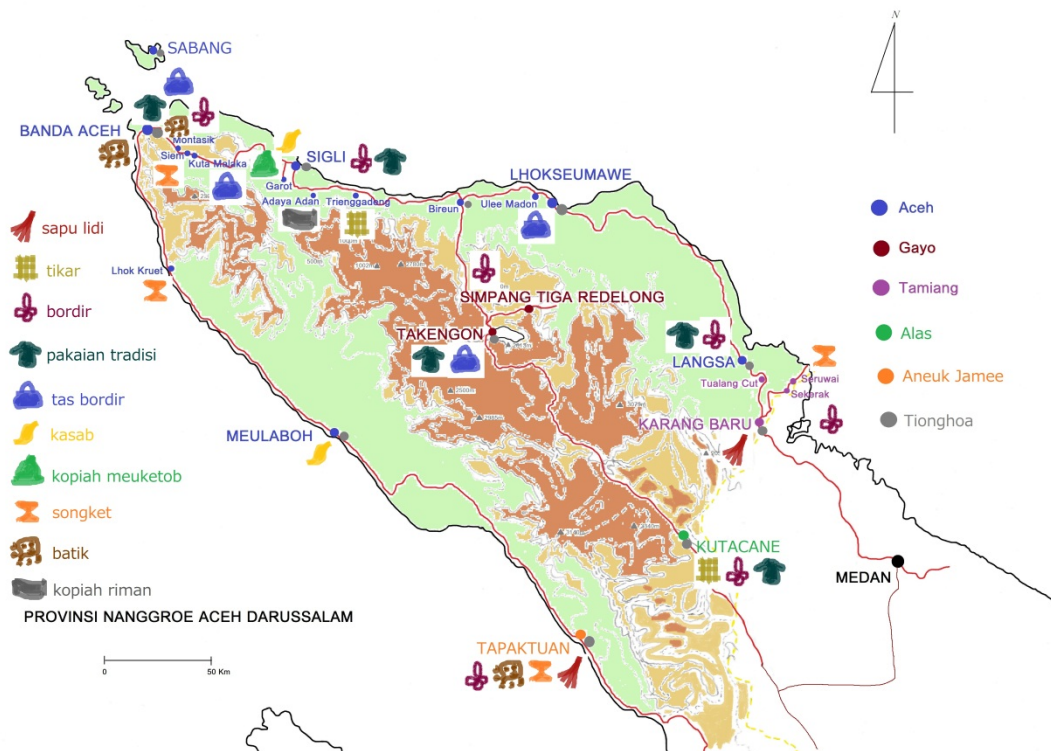
筆者名不詳

n.d. *Penafsiran Lukisan* (manuscript 「絵の解釈」)

(保有者 Cut Aja Ainsyah より 2010 年 5 月複写で提供される)



地図1 インドネシアおよびアチェ州



地図2 調査訪問したアチェ州の町村と各民族分布及び生産物分布



Kecamatan Indrajaya

地図3 ガロット村

表1 アチェ州における服飾工芸産地調査結果

Kabupaten (所在県名)	Kecamatan, Desa (所在郡・地方名)	Nama Tempat (施設名)	Macam Kerajinan (手工芸種類)	Tahun mulai (開始年)	Orang bekerja (従事者人数)	Orang bekerja lingkungan (周辺生産者人数)	Administrasi (主催者)	Bantuan (援助者)	Acara produk (生産方式)
Kota Madya (Aceh人)	Banda Aceh	Kantor Dewan Kerajinan Nasional	tenun(織り)	2009-	7	0	DEKRANAS		
	Banda Aceh	Vocational Training Center Banda Aceh	bordir(ミンシ刺繡)	1977-	1 (guru 先生)	kelas (教室)	pemerintah (行政)		
	Banda Aceh	Jusmiati Bordir	bordir	1975-	1 (guru 先生)	kelas (教室)	pribadi (個人)	pemerintah (行政)	
	Banda Aceh	Woe Bak Adat	sulam(手刺繡),bordir, pakaian tradisi (伝統衣裳)	1980-	1	7	pribadi (個人)		
	Banda Aceh	Nyak Ni	sulam,bordir, pakaian tradisi	1971-	5	25	pribadi (個人)		
Kabupaten Aceh Besar (Aceh人)	Kecamatan Ingin Jaya, Desa Tanjung	Rumoh Batek Atjeh	batik	2006-(1986-)	17	0	DEKRANAS		
	Kecamatan Darussalam, Desa Mireuk Taman	Songket Aceh Kreasi Jasmani	songket (緯系紋織)	2006-	10	0	pribadi (個人)	DEKRANAS, Kantor Perindustrian	
	Kecamatan Darussalam, Desa Siem	Nyak Mu	songket	1976-	8	60	pribadi (個人)		
	Kecamatan Sukamakmur, Desa Kuta Malaka	Workshop Sentra Industri Kecil	tas bordir(ミンシ刺繡かばん)	2008-	25	200	DEKRANAS	BRR	sistem borong (請負方式)
	Kecamatan Sukabumi, Desa Bait	Khairan	tas bordir	2009-	17	0	pribadi (個人)		
	Kecamatan Montasik, Desa Piyeung Datu	Nurniati	bordir	2007-	9	0	pribadi (個人)		
Kabupaten Pidie (Aceh人)	Kecamatan Indrajaya, Desa Garot	Kupula Indah Sevenir Aceh	kasab(金糸刺繡),bordir	1980s-	3	50	pribadi (個人)		
	Kecamatan Indrajaya, Desa Blang Garot	Cut Aya Aishah	kasab	dari dulu (古くから)	1	0	pribadi (個人)		
	Kecamatan Indrajaya, Desa Garot Cut	Kampung Kopiah Meuketob (通称)	kopiah meuketob (男性用伝統的帽子)	dari dulu (古くから)	25	0	pribadi (個人)		
	Kecamatan Indrajaya, Desa Tungkop	Saindah	kopiah meuketob	dari dulu (古くから)	4	0	pribadi (個人)		
	Kecamatan Mutiara Timur, Desa Adaya Adan	Pusaka Moha	kopiah rimar(椰子葉脈編帽子)	1985-	1	30	pribadi (個人)		
Kabupaten Pidie Jaya (Aceh人)	Kecamatan Trienggadeng, Desa Meunasah Raya	Seuke Aceh	anyaman (tikar棕櫚敷物)	2008-	2	400	Koperasi Wanita Kerajinan Rakyat	Save the Children	
	Kecamatan Trienggadeng, Desa Lung Bimba	Nazaria	anyaman (tikar棕櫚敷物)	dari dulu (古くから)	2	100	pribadi (個人)	Seuku Aceh	
Kabupaten Aceh Utara (Aceh人)	Kecamatan Muara Batu, Desa Ulee Madon	Armia	tas bordir	1996-	15	100	pribadi (個人)		
Kabupaten Aceh Barat (Aceh人)	Meulaboh	Hambali	tenun	1995-	1	0	pribadi (個人)		
	Meulaboh	NN	kasab	1974-	2	30	pribadi (個人)		
	Meulaboh	Evi Usmanidar	kasab	dari dulu (古くから)	2	40	pribadi (個人)		
Kabupaten Aceh Jaya (Aceh人)	Kecamatan Sampoi Niet, Desa Lhok Kruet	Kelompok Bungong Ban Keumang	songket	2002-	3	10	pribadi (個人)	Canada Red Cross	
Kabupaten Aceh Tengah (Gayo人)	Takengon	Alfis Souvenir	tas bordir	1983-	1	28	pribadi (個人)		
Kabupaten Bener Meriah (Gayo人)	Simpang Tiga Redelong	Kantor DEKRANAS	sandal bordir(ミンシ刺繡サンダル)	2009-	4	0	DEKRANAS		
Kabupaten Aceh Tamiang (Tamiang人)	Karang Baru	Kantor Bupati	sapu lidi(sawik油椰子葉脈ほうき)	dari dulu (古くから)	0	30	DEKRANAS		
	Kecamatan Sekerak, Kampung Sekerak Kanan	Siti Chadiyah	bordir	2000-	2	10	pribadi (個人)	DEKRANAS Tamiang	
	Kecamatan Seruwai, Desa Pekan Seruwai	Lindung Bulah	songket	2008-	10	0	pribadi (個人) DEKRANAS		
Kabupaten Aceh Timur (Aceh人)	Kecamatan Manyak Payed, Desa Tualang Cut	Mariana	kerajinan dsun pisang (バナナの葉細工)-tas (織布バッグ)	2008-	3	0	pribadi (個人)	DEKRANAS Aceh Timur	
	Langsa, Kampung Djawa	Cut Huzaimah	sulam, bordir, pakaian tradisi	1993-	1	12	pribadi (個人)	DEKRANAS	sistem Padang (出来高方式)
Kabupaten Aceh Tenggara (Alas人)	Kutacane	Sepakat Segenap	bordir	1980年代-	8	40	KOPINKRA (共同組合)	KOPINKRA	
	Kutacane	Salmawati, S.	anyaman (tikar棕櫚敷物)	dari dulu (古くから)	1	41	KOPERASI	KOPERASI	
	Kutacane	Sanggar Mayang	pakaian tradisi	1986-	3	0	pribadi(個人)		
Kabupaten Aceh Selatan (Aneuk Jamee人)	Tapaktuan	Balai Tenun	batik, songket	2003-	40	0	pemerintah (行政)	BRR	
	Tapaktuan	Mustina	bordir	1980年代-	1	12	pribadi (個人)	pemerintah (行政), DEKRANAS	
	Tapaktuan	Usaha Wirin	sapu lidi(kelapa椰子葉脈ほうき)	1994-	1	20	pribadi (個人)	DEKRANAS	

表2 バンダ・アチェにおける服飾関連業調査結果表

Macam usaha (職種)	Nama tempat (施設名)	Nama orang direktur (経営者名)	Tahun lahir ・Seks (生年・性別)	Macam kerja (業種)	Tahum mulai (開始 年)	Orang bekerja ・ Linkungan (従業員数・ 近辺従事者数)	Tempat lahir (出身地)	Sekolah kuliah (出身校)	APPMI (会員の 有無)	Perubahan Tsunami (津波の被 害)	Bantuan (復興援助の有無)
Butik・ Perancang busana (ブティック経営・ ファッション・デザイナー)	Usaha Modist	Aya Sofiana,	1966・女	busana muslim,bordir, payet UNSYIAH大学教員	2003-	5	Banda Aceh Aceh人	Banda Aceh, UNSYIAH	無	半壊	無
	My House	Syarifah Mariana	1955・女	busana muslim,bordir	1980-	12	Banda Aceh Aceh人	Medan, IKIP	無	無	無
	Ipah Modiste	Syarifah Zuhairah	1979・女	busana Muslim,bordir	1990-	13	Banda Aceh Aceh人	Banda Aceh, UNSYIAH	APPMI	全壊	Canada Red Cross
	Vinnel House	Nelisma Amin	1964・女	busana Muslim,bordir	2010-	6	Banda Aceh Aceh人	Jakarta, Bunka Fashion School, Susan Budiharjo	APPMI	Jakarta	無
	House of Lisda	Lisdayanti	1974・女	busana muslim,bordir, payet	2007-	26	Banda Aceh Aceh人	Jakarta, Susan Budiharjo	無	無	無
	Nani House	Nani Djakfar	1968・女	busana Muslim,bordir, payet	2002-	3・10	Banda Aceh Aceh人	Banda Aceh, UNSYIAH	無	浸水	無
	Tiwi Gadeng	Safartiwi Gadeng	1968・女	busana Muslim, bordir	1996-	6	Aceh, Montasik Aceh人	Jakarta, Susan Budiharjo	APPMI	全壊、Jakarta	無
	Shella Asrisyah	Shella Asrisyah	1986・女	busana Muslim, bordir	2007-	6・6	Banda Aceh Aceh人	Kuala Lumpur, ラフレス大学	APPMI		無
	Anira Rumah Payet	Cut Zunyka Zikarnain	1978・女	busana Muslim, bordir, payet	2004-	8・7	Lampung Aceh人	Banda Aceh UNSYIAH, Jakarta, Bunka Fashion School	APPMI	全壊	UNDP, Mercy Corp
Taylor (テイラー)	Abudullah Husen	Abudullah Husen	1944・男	taylor, UNSYIAH元大学教員	1965-	20	Aceh, Sigli Aceh人	独学	無	無	無
	Man's Tari Taylor	Selaiman	1968・男	taylor	1990-	10	Aceh, Sigli Aceh人	Jakarta	無	浸水	無
	Toko Maryan	Husaini	1975・男	taylor, 女物のみ	2008-	4	Aceh, Sigli Aceh人	独学	無	無	無
Toko busana tradisi (伝統衣裳店)	Nyakni	Nyakni	1937・女	busana tradisi	1971-	4	Aceh, Sigli Aceh人	独学	無	無	無
Kustum (裁縫学校)	Putri Kustum	Ainal Madia	1945・女	tata busana	1976-	6	Banda Aceh, Sigli(母)Aceh人	Medan	無	無	BRR・州政府
	Kartini Kustum	Kartini	1950・女	tata busana	1973-	6	Banda Aceh Aceh人	Banda Aceh, Ros Kustum	無	浸水	BRR・州政府

写真



1. バンダ・アチェの街 (2009. 8)



2. コピア・ムクトップのモスク (バンダ・アチェ 2011. 5)



3. 婚礼披露宴でのアチェ人新郎新婦
(バンダ・アチェ 2009. 8)



4. バンダ・アチェのファッション
・デザイナー (2009. 12)



5. 新年ハリ・ラヤの州知事 (左 2 番目)
と家族 (バンダ・アチェ 2011. 9)



6. アチェ文化祭 PKA を見学するユドヨノ大統領夫妻
(中央・右) とアチェ州知事 (左) (バンダ・アチェ 2009. 8)



7. 新郎と婿入りの儀式
(シブレ 2010. 5)



8. 華人街フェスティバルでの客家のアピール
(バンダ・アチェ 2011.5)



9. 仏教系日曜学校で瞑想する華人の子どもたち
(バンダ・アチェ 2011.5)



10. ソンケットを織る女性 (シーム村 2010.5)



11. ボルディールのバッグ (クタマラカ 2010.5)



12. パサールの仕立職人
(シグリ 2011.12)



13. 田植えを終える農夫たち (ガロット村 2011.12)



14. ガロット村の伝統家



15. 建設中のモスク (ガロット村 2011,12)



16. 家の床下でカサブする女性 (ガロット村 2011.5)



17. コピアを作る女性たち (ガロット村 2011. 5)



18. コピア・ムクトゥブ
(ムラボ 2009. 12)



19. コピア・シャム
(ガロット村 2011. 12)



20. Cut Aja Ainsyah (ガロット村 2011. 12)



21. コピア・リマルを編む女性
(アダヤアダン村 2009. 12)



22. ティカールを編む女性
(トレンガデン 2010. 12)



23. 湖のある街 (タケンゴン 2009. 12)



24. ガヨ人の伝統的ファッション (タケンゴン 2009. 12)



25. ランサの街 (2011. 5)



26. 華人の古寺 (スルワイ 2011. 5)



27. 丘陵に広がる華人墳墓 (カランバル 2011. 5)



28. アラス人の婚礼用刺繍傘 (クタチャネ 2011. 8)



29. ティカール編みをする女性たち (クタチャネ 2011. 8)



30. パティックのろう置きをする女性
(タパクトゥアン 2011. 8)



31. トウク・ウマルの記念碑
(ムラボ 2011. 8)



32. 19世紀末のトウク・ウマルの写真
(バンダ・アチェ市立図書館 2010. 12)